博士論文　平成二十九（二〇一七）年度

近衛家実詩壇の研究

慶應義塾大学大学院　文学研究科
国文学専攻　国文学分野
大木　美乃

近衛家実詩壇の研究　目次

はじめに　一

第一部　『猪隈関白記紙背詩懐紙』の把握　四

第一章『猪隈関白記紙背詩懐紙』通観

はじめに

一『猪隈関白記紙背詩懐紙』について

二　句題詩の構成方法　五

三　句題詩の復元　八

四　無題詩の復元　一三

おわりに　一七

第二章　詩懐紙の復元　二〇

はじめに

一　詩題のみ或は本文のみをもつ懐紙同士の同定　二三

二　詩題の推定　三四

三　前半のみ或は後半のみをもつ懐紙の同定　四五

四　他の懐紙作法書に見える『猪隈関白記紙背詩懐紙』　四八

おわりに　五〇

〔表〕左右を裁断された詩懐紙

〔付〕『猪隈関白記紙背詩懐紙』復元一覧　五二

第二部　近衛家実詩壇の考察　六六
第一章『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作者　六七
はじめに　六七
一　家実の兄弟　六八
二　源氏出身の作者　七〇
三　平氏出身の作者　七二
四　菅原氏出身の作者　七三
五　大江氏出身の作者　七四
六　藤原氏出身の作者　七六
おわりに　七六
第二章　鎌倉時代における幼学書の享受　七八
はじめに　七八
一『百二十詠』の受容と反映　八〇
二『蒙求』の受容と反映　八三
三『和漢朗詠集』の受容と反映　八五
おわりに　八九
第三章　前代撰集の影響　九一
はじめに　九四
一　句題詩から見た前代撰集の影響
二　無題詩に見る前代撰集の影響
三　家実詩壇の特質
おわりに

第四章　『文鳳抄』『擲金抄』の享受　九七
はじめに　九八
一『文鳳抄』・『擲金抄』について　一〇〇
二　句題詩の構成方法　一〇三
三　対句語彙集の利用方法　一〇四
四『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』について　一〇七
五『文鳳抄』・『擲金抄』の可能性
おわりに

第三部　『猪隈関白記紙背詩懐紙』以降成立の詩懐紙　一〇九
第一章　東京大学史料編纂所蔵『拾芥抄』紙背詩懐紙
はじめに　―『拾芥抄』紙背詩懐紙とは―　一一二
一　紙背文書の作者　一一六
二『拾芥抄』紙背詩懐紙　一二〇
三　句題詩・無題詩の構成と詩風　一二二
おわりに
第二章　『本朝世紀』紙背詩懐紙
はじめに　―『本朝世紀』紙背詩懐紙―　一二三
一　紙背詩懐紙の書写状況　一三二
二　『本朝世紀』紙背詩懐紙の翻字と校訂　一三三
三　紙背詩懐紙の作者と成立時期　一三六
四　詩懐紙本文の詩風
おわりに

おわりに　一三九
初出一覧　一四一

はじめに

本論文は、鎌倉時代に形成されていた近衛家実詩壇について、明らかにしようとしたものである。

鎌倉時代、本朝において漢詩文の撰集が編纂されなくなったことにより、日本漢文学は衰退の一途を辿っているかのように見える。しかし、古記録類を見れば、詩会は頻繁に催されており、一概に衰退したとは言えないだろう。当時、詩会を主宰した人物の一人に、後に猪隈関白と呼ばれた近衛家実（一一七九～一二四二）がいる。家実の詩会は頻繁に催されており、一つの詩壇を形成していたことを窺える。その詩会において提出された詩懐紙が陽明文庫蔵『猪隈関白記紙背詩懐紙』である。『猪隈関白記紙背詩懐紙』は、『猪隈関白記』古写本の料紙として、その紙背が用いられた形で現存している。その紙数は三百七十紙を越え、作者も二十名以上に上る。また作品は、平安時代から続く句題詩と無題詩の両方が残されている。漢詩文の撰集が編纂されなくなり、その当時の詩の姿を知ることは困難である。その中で、『猪隈関白記紙背詩懐紙』は、当時の詩について知る為の重要な資料だと言えよう。この紙背詩懐紙全体の把握を通じて家実の詩壇を考察することは、鎌倉時代の漢詩文の一側面を明らかにすることに繋がっていると考える。

陽明文庫蔵『猪隈関白記紙背詩懐紙』については、これまでの先行研究により、制作時期や作者、各詩懐紙の書き様について等、詳細な研究がなされてきた[一]。ただ、懐紙に残された句題詩や無題詩の内容解釈という面では、あまり言及されてはこなかった。また、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の中には、古写本の料紙として用いられた為に、天地や左右を裁断され、断簡のまま他の懐紙と繋がっているものも存在する。そうした懐紙について僚紙を見つけ、復元する作業についても未だなされてはいない。

そこで、本論文では、第一部においてこうした断簡の復元作業を行い、現存する『猪隈関白記紙背詩懐紙』の全体像を把握したい。その復元作業をするに当たり、句題詩の構成方法が前提となる。残された作品の多くが七言律詩からなる句題詩である。本詩懐紙全体の内容を理解するうえで、この構成方法を弁えておく必要がある。

最初に句題詩の構成方法について説明しておきたい[二]。句題詩とは、漢字五文字からなる詩題をもつ詩のことで、その多くは七言律詩で構成されている。詩題は、具体的な事物を表す実字とそれ以外の虚字で構成される。句題には古句の一部を用いることが多かったが、時代が下るにつれ、題者による新題が増えていった。七言律詩の句題詩の場合、近体詩の規則の他に、本朝独自の規則に基づき作詩する必要があった。

まず、第一句・第二句を首聯という。この首聯においては、詩題の五文字を全て詠み込む必要がある。これを「題目」という。

続く第三句・第四句を頷聯といい、第五句・第六句を頸聯という。この二聯においては詩題の五文字を用いずに、詩題を敷衍する必要があ

る。これを「破題」という。また、中国の故事を用いて破題することを「本文」といい、頷聯或は頸聯において、それを行う必要があった。

時に、詩題に「松竹」のような二字の並列構造をもった熟語が含まれる場合がある。これを双貫語という。双貫語をもつ詩題を破題する際には、それを上句と下句に詠み分ける必要があった。たとえば上句で「松」を破題するならば、下句で「竹」を破題するということである。

最後の第七句・第八句を尾聯という。この聯では、詩の作者が自由に自分の心情を述べることが許されている。これを「述懐」という。内容としては、自身の才能の無さや不遇な状況を嘆く或は詩会の主催者への賞賛、また詩題と関連付けて自身の心情を述べるというのが常套表現であった。

当時の詩においては、もう一つ弁えておくべき規則がある。それは平仄である[三]。平仄の規則には、次の四つがある。

① 各句の二字目と四字目の平仄を変える「二四不同」

② 二字目と六字目の平仄を揃える「二六対」

③ 五字目・六字目・七字目の三字の内、一つは必ず違う平仄にする「避下三連」

④ 異なる聯と接する句同士は二字目、四字目、六字目の平仄を揃える「粘法」

（具体的には、二句目と三句目、四句目と五句目、六句目と七句目の第二字、第四字、第六字の平仄を揃えるということである。）

当時の句題詩は、その構成方法のほか、平仄の規則も守り、構成されている。本詩懐紙には、漢字五文字の詩題をもたない無題詩も存在する。無題詩においては、平仄以外の定まった規則はない。

第一部では、句題詩の構成方法や平仄を手掛かりに、裁断された結果、断簡となり、別々の箇所に繋がれた懐紙同士を同定し、出来る限り一紙に復元する。

第二部では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』を元に、近衛家実詩壇の考察を多角的に行う。まず、第一章では懐紙の作者について近衛家との関係などを整理する。第二章以降では、詩の内容解釈を通じて、作品に影響を与えた書物いくつかに分け、それぞれ考察を行った。具体的には、鎌倉時代、「四部ノ読書」と称された幼学書が詩に与えた影響を検討する。また、前代に成立した撰集との関係を見る。更に当時、本朝で多数編纂されていた実用書的な性格をもつ対句語彙集にも言及したい。

第三部では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』以降に成立した紙背詩懐紙を扱う。

懐紙の復元作業や、残された作品の内容解釈を通じて、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の全体像を把握したい。その作業を通じて、近衛家実詩壇について、明らかにしていきたい。

一　『猪隈関白記紙背詩懐紙』については、主に以下を参照。山崎誠「陽明文庫蔵猪隈関白記紙背詩懐紙について」（『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年、初出一九八二年）。大曾根章介・後藤昭雄・山崎誠・佐藤道生「陽明文庫蔵陽明文庫蔵猪隈關白記紙背詩懐紙」（『和漢比較文学叢書５　中世文学と漢文学Ⅰ』汲古書院、一九八七年）。山崎誠「陽明文庫蔵「猪隈關白記紙背詩懐紙」解題」（同上書）。

二　句題詩とその構成方法については、主に以下を参考にした。柳澤良一「『本朝麗藻』『新撰朗詠集』について」（『和漢比較文学』第九号、一九九二年）。本間洋一「平安朝句題詩考」（『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二年、初出一九九三年）。小野泰央「平安朝句題詩の制約―題字を発句に載せること―」（『平安朝天暦期の文壇』風間書房、二〇〇八年、初出一九九四年）。堀河貴司「中世漢文学概観―詩を中心に―」『詩のかたち・詩のこころ』若草書房、二〇〇六年、初出一九九六年）。佐藤道生「句題詩詠法の確立―日本漢文学上の菅原文時」（『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年）。蔣義喬「詠物詩から句題詩へ：句題詩詠法の生成をめぐって」（『和漢比較文学』三五、二〇〇五年）。佐藤道生「句題詩概説」（『句題詩論考―王朝漢詩とは何ぞや』勉誠出版、二〇一六年、初出二〇〇七年）。

三　興膳宏『古代漢詩選』（研文出版、二〇〇五年）を参照。

第一部　『猪隈関白記紙背詩懐紙』の把握

第一章　『猪隈関白記紙背詩懐紙』通観

はじめに

日本漢文学史において、紀伝道出身者を中心とする詩壇の活動は、平安末期の藤原忠通のものを最後に衰退の一途を辿っているかのように見える。こうした見方は、忠通の別集『法性寺殿御集』やその下命により成立した総集『本朝無題詩』以後、日本漢詩の撰集が殆ど見られなくなったことを背景とするものであろう。しかし古記録類からは平安末期以降にも詩宴は多く催され、詩壇が形成されていたことが窺える。そして、詩宴の主催者の中には忠通の子孫であり、後に猪隈関白と呼ばれた近衛家実の名が見える。彼が主催した詩宴での作品の一部は、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の形で現存する。本章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』を復元し、その全体像を把握したい。

一　『猪隈関白記紙背詩懐紙』について

まず『猪隈関白記紙背詩懐紙』について確認しておきたい。陽明文庫に所蔵されている『猪隈関白記』には自筆本二三巻と古写本一六巻が現存する。古写本一六巻の内、第四函第一四號から第二三號までの巻子本十軸の料紙には、家実家主催の詩宴で提出された詩懐紙が用いられている。『猪隈関白記紙背詩懐紙』とはこの十軸の料紙に用いられた紙背文書・約三七〇紙を指す。但し、日記の料紙として用いられる際に懐紙の天地が裁断される等の加工が施された為、作者不明の断簡が約四〇紙含まれている。

本詩懐紙が書かれた時期は建久七年(一一九六)頃から元久二年(一二〇五)頃までである。その作者は儒者文人や家実の家司、家実の兄弟など約二一名に上る[一]。詩の形式としては句題詩(漢字五文字の詩題をもつ詩)と無題詩(詩題が漢字五文字ではなく即事や言志の形で即興的に作られる詩)の双方が含まれるが、詩題の確認出来る三二一紙はその殆どが句題詩であり、無題詩は四八紙に過ぎない。このことは、前代に引き続き、句題詩が当時の詩の主流であったことを示している。

一般的に、詩懐紙は詩宴での披講後に反故にされる為、現存数は非常に少ない[二]。現在のところ、本資料は平安鎌倉期を通じて最多の詩懐紙群だと言えよう。本詩懐紙については、既にその全文が翻刻[三]され、残された詩の作者と家実との関係や詩の製作時期が一部、明らかにされている[四]。翻刻作業のメンバーであった山崎誠氏は、懐紙の端作の書様に博士家の家説が反映される一方で、後の公卿や儒職歴任者を含む

二一名の作者の中には当時の好文家がいないとした。更に『猪隈関白記』の作文記事に吻合するものが少ないことを指摘し、本詩懐紙には晴儀の作文会のものが含まれず、いずれも密会の作品だと考察している[五]。一方、堀川貴司氏は『朝野群載』(巻一三・紀伝道・書詩体)に見える記事(詩の本文を六行三字で書く事が通例だとする)によりながら本詩懐紙の中で、特に字配りの確認出来る懐紙について、詩本文の書様を整理した[六]。

このように、これまでは字配りのわかる懐紙の端作や本文の書様など、いわば懐紙の形式面に対する考察は詳しく為されてきた。その一方で、詩の具体的内容は未だ詳しく考察されてはいない[七]。その原因の一端は、詩懐紙が天地左右を裁断されたり、二紙に分断されたりして詩の全容が把握しにくいという現状にある。家実詩壇を緻密に考察する為には、裁断によって欠けてしまった文字を類推し、分断されて離ればなれになった断簡を一紙に復元する作業が不可欠であろう。

そこで、次節以下では、本詩懐紙の詩の中で特に句題詩を取上げてその内容を分析し、その上で断簡の復元作業を試みる。後述するように句題詩は、その構成が明確に決められており、そのことが分断された断簡同士を一紙に戻す際の、あるいは裁断の為に欠字となっている文字を推定する際の、有力な手がかりとなり得るのである。さらに本稿では、そうした句題詩の分析から、当時の詩作に影響を与えた先行文献についても言及したいと考える。

二　句題詩の構成方法

平安時代、詩宴に於ける詩の主流は、句題詩であった。句題詩とは漢字五文字からなる詩題（句題）のもとで詠まれる詩のことである。かつて句題には、古句の一句を用いることが多かったが、時代が下るにつれ題者の案出する新題が増えていった。また、当時の一般的な詩体は七言律詩であり、句題詩もまた同様であった。ここで重要なのは、平安中期以後の句題詩には、一般の今体詩（七言律詩）の規則に加え、本邦独自に慣例化した構成方法が存在していたという点である。以下にその構成方法を簡単に述べる[八]。

まず、首聯(第一句・第二句)では、句題の五文字を全て用いて題意を表現する。また、この聯以外で句題の文字を用いてはならない。この聯を「題目」と呼ぶ。

続く頷聯(第三句・第四句)、頸聯(第五句・第六句)では、句題の五文字を用いずに題意を敷衍しなければならない。これを「破題」と呼ぶ。そもそも句題は、実字（具体的事物を指し示す文字）と虚字（用言・助辞あるいは抽象概念を表す文字）とから構成されている。頷聯・頸聯では少なくとも実字を別の語に言い換える（破題する）必要がある。どちらかの聯では故事を用いて題意を表現することが望ましく、その場

合は「破題」と言わずに「本文」と呼ぶ。また、句題の中には、並列構造を持つ二字の熟語（双貫語という。琴酒、山水など）を含むものがある。この場合、双貫語は上句と下句とに分けて破題されなければならない。たとえば、句題に「琴酒」という語が含まれる場合、上句で「琴」を破題するなら下句では「酒」を、上句で「酒」を破題するなら下句では「琴」を破題する必要がある。

尾聯(第七句・第八句）に至って作者は、はじめて自らの心情を述べることが許される。これを「述懐」と呼ぶ。詩宴の場や主催者、出席者を賞賛する内容を持つ場合もあるが、自らを貶め、その不遇を嘆く内容をもつ場合も多い。

以上の構成方法を念頭に置き、本詩懐紙の句題詩について検討したい。ここで取上げるのは第四函第一四號第一六紙にある平親輔の作品である。

秋日同賦**師友依秋至**應　教一首〈題中取韻〉　散位平親輔九

1 依秋何客頻尋至　秋に依りて何れの客か頻りに尋ね至る
2 景氣感深友又師　景気 感深し 友又師
3 傾蓋(友)云臨(至)風冷夕(依秋)　蓋を傾けて云(ここ)に臨む 風冷まじき夕
4 受書(師)更對(至)露清時(依秋)　書を受けて更に対ふ 露清き時
5 今驚涼月(依秋)同心入(友)(至)　今驚く 涼月に同心入るを
6 倩望微陽(依秋)授説(師)之(至)　倩ら望む 微陽に授説之くを
7 沈陸多年慙散木　陸に沈むこと多年 散木を慙づ
8 才疎此席泥言詩　才疎そかにして 此席 言詩に泥む

詩題の「師友依秋至(師友は秋に依りて至る)」は新題であり、この句題には「師友」という双貫語が含まれている。首聯では、傍点で示したように句題の五文字が全て用いられている。

頷聯・頸聯では、双貫語「師友」を一聯の上下に詠み分けて破題しなければならない。頷聯上句の「傾蓋」は、『蒙求』「程孔傾蓋」の「孔

子之剡、遭程子於塗。傾蓋而語、終日甚相親(孔子剡に之き、程子に塗に遭ふ。蓋を傾けて語り、終日甚だ相親しむ)。」という故事を典拠とする。孔子と程子とが蓋を傾けて親しく語り合う様子を表し、詩題の「友」を言い換えている。下句の「受書」は『史記』「蘇秦伝」一〇などに見える語で、師に就いて書を学ぶ姿勢を表し、詩題の「師」を言い換えている。

一方、詩題の「秋」を破題するのは「風冷」と「露清」であろう。これらの語は、この対偶関係がそのままの形で『菅家文草』(巻一・10)「重陽侍宴賦景美秋稼應製詩(重陽宴に侍りて景、秋の稼に美しといふことを賦す、應製詩)」に「吹金風冷簸、滴玉露清瑩(金を吹きて風 冷に簸る、玉を滴てて露 清らに瑩く)。」一一と見える。いずれも秋の景物であり、詩題の「秋」を言い換えている。したがって頷聯は、上句で「友依秋至」を、下句で「師依秋至」を表すことにより、上下併せて「師友依秋至」を破題している。

次に頸聯を見よう。ここで詩題の双貫語「師友」を表すのは「同心」と「授説」であろう。詩題の「友」を言い換えるのは、同じ考えを持つという意の「同心」で、『周易』「繫辞上」の「二人同心、其利断金(二人 心を同じくすれば、その利きこと金を断つ)。」を典拠とする。詩題の「師」を言い換えるのは、教えを授けるという意を持つ「授説」である。一方、詩題の「秋」を表すのは「涼月」と「微陽」であろう。「涼月」は『白氏文集』(1201)「独眠吟 其二」の「就中今夜最愁人、涼月清風滿牀席(就中今夜最も人を愁へしむ、涼月清風牀席に満つ)。」を踏まえ、秋の涼しげな月の意で詩題の「秋」を表す。対偶関係にある「微陽」は『文選』(巻一三、秋興賦、潘岳)の一節「何微陽之短晷、覚涼夜之方永(何ぞ微陽の短晷なる、涼夜の方に永きを覚ゆ)。」が典拠で、秋のわずかな陽光を意味し、詩題の「秋」を表している一二。以上の分析から、頷聯と同じく頸聯においても、詩題が的確に破題されていることを確認出来る。

尾聯の「沈陸」は『荘子』「則陽」の「方且與世違、而心不屑與之具。是陸沈者也(方に且に世と違ひて、心、之と具にするを屑しとせず。是れ陸沈する者なり)。」の「陸沈」と同義であり一三、世に容れられないことをいう。また、「散木」は、『荘子』「人間世」の「散木也。以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐(散木なり。以て舟を為れば則ち沈み、以て棺槨を為れば則ち速やかに腐る)。」を典拠とし、才能のないことをいう。ここで親輔は、自らの不遇を嘆き、自分を恥じているのである。

以上の分析により、当該句題詩が、平安中期に定着した句題詩の構成方法に即して製作されていることを確認出来た。詩の作者・平親輔は、家実家の家司で後に従三位治部卿まで出世したが、儒者ではない。一般的な貴族が、句題詩の構成方法を守って詩を作っていたことは、その構成方法が、当時にあってもなお広く浸透していたことを示唆する。したがって、本詩懐紙における他の句題詩についても、こうした構成方法が守られていることを前提とすることが出来る。

三　句題詩の復元

次に、二紙に分断されている懐紙の復元作業を試みたい。以下、考察の対象とする二紙の筆跡が近似する点についてはこれを前提とし、他の視点から考察することとする。

まず、第二〇號第五一紙(a)と第二〇號第一九紙(b)の二紙を取上げる。最初に、懐紙の字配りのまま本文を掲出する。

a、第四函　第二〇號　第五一紙

春日同賦**尋花至遠山**應教一首〈題中取韻〉　散位菅原淳高

朝至遠山遲日斜是斯
遊放爲尋**花**隱倫問路
欲望露樵客伴行遂領
霞追嶺頭春蹤殆僻趁

b、第四函　第二〇號　第一九紙

「
巖腹雪歩彌**賒**千程
経過誰人倦染著庾梅
」

□□□　　※□□□は裁断により不明

押韻に関する注記に「題中取韻(題の中より韻を取る)」とあり、詩題「尋花至遠山(花を尋ねて遠山に至る)」の内の「花」字が首聯末尾に見えることから、淳高は「花」字を韻字としたのである。aに存する押韻の文字「花」字と「霞」字は下平声麻韻である。一方、bでは尾聯末尾の文字は不明だが、頸聯末尾の「賒」字は下平声麻韻であり、aとbとは韻字が一致している。また、bに「庾梅」と見えることから、賦された季節は「春」でありaの端作に「春日」とあることに対応する。以上の理由から、aとbとは元来一首であった可能性がある。

この可能性をさらに高める為には、詩の内容を分析する必要がある。前節で詳述したように、句題詩は詩の本文が詩題に強く規定される。特に頷聯・頸聯は、詩題が破題されていなければならない。a、bを一首と見なす為には、両紙に跨る頸聯が正しく破題していることを確認する必要がある。aとbとを繋げて次に掲げる。

春日同賦**尋花至遠山**應教一首〈題中取韻〉　散位菅原淳高

1 朝至遠山遲日斜　朝に遠山に至り 遅日斜めなり

2 是斯遊放爲尋花　是れ斯の遊放は花を尋ねむが為めなり

3 隱倫問路欲望露　隱倫に路を問ひ 露を望まむと欲す

4 樵客伴行遂領霞　樵客に伴はれて行き 遂に霞を領す

5 追嶺頭春蹤殆僻　嶺頭の春を追ふ 跡は殆ど僻る

6 趁巖腹雪歩彌賒　巖腹の雪を趁ふ 歩は彌よ賒かなり

7 千程經過誰人倦　千程経過すれども誰人か倦まむ

8 染著庾梅□□□　庾梅に染め著きぬ □□□

頸聯では、対偶関係にある「嶺頭」と「巖腹」とが詩題の「山」を、「春」と「雪」とが詩題の「花」を、「蹤殆僻」と「歩彌賒」とが詩題の「至遠」を、それぞれ破題していることを確認することが出来る[一四]。以上の破題の分析に、前述の押韻などを考え合わせれば、a、bが本来一紙であったことは確実であろう。

次に、第一八號第一〇紙(c)と第一八號第二〇紙(d)の二紙を取上げる。

c、第四函 第一八號 第一〇紙

秋日同賦**江湖景氣秋**各分一字詩〈探得**廻**字〉　木工頭源兼定

江湖緣底眺望好景氣

屬秋興幾**催**露白陶朱

徐棹渡風寒漁父頻歌
廻紫蘭漠々杭州裏黄
□□々呉郡**隈**愁列詩　※□□は裁断により不明
「
d、第四函 第一八號 第二〇紙
」
筵愚暗士此時可恥接高**才**

押韻に関して、「探得廻字(廻字を探り得たり)」とあり、cは「廻」字が韻字である。cに存する押韻の文字「催」、「廻」、「隈」は、上平聲灰韻である。一方、dに見える尾聯末尾の「才」字もまた上平聲灰韻であり、cとdとは韻字が一致することから、元来一首であった可能性が高い。ここで、前述のa、bと同じく、二紙を繋いだものを掲げてみよう。

秋日同賦**江湖景氣秋**各分一字詩〈探得廻字〉　木工頭源兼定

1 江湖縁底眺望好　江湖 底に縁りてか 眺望好き
2 景氣屬秋興幾催　景気は秋に属りて興幾たびか催す
3 露白陶朱徐棹渡（景氣秋／湖）　露白し 陶朱徐ろに棹さして渡る
4 風寒漁父頻歌廻（景氣秋／江）　風寒し 漁父頻りに歌ひて廻る一五
5 紫蘭漠々杭州裏（景氣秋／湖）　紫蘭漠々たり 杭州の裏
6 黄□□々呉郡隈（景氣秋／江）　黄□□々たり 呉郡の隈
7 愁列詩筵愚暗士　愁ひに詩筵に列する愚暗の士
8 此時可恥接高才　此の時 恥づべし 高才に接することを

この場合、第七句目の「詩」字までがc、「筵」字以降がdである。a、bとは異なり、破題の箇所がc、dの二紙を跨いではいない。詩題と本文との関係を根拠として二紙を同定することは出来ないが、前述の押韻に加えて、「詩」字と「筵」字とを繋いだ場合の文脈が極めて自然であることから、両紙が本来一紙であった可能性が高いと考えられる。

さらにここでは、頸聯に見える、不明の二字の推定を試みたい。詩題の「江湖景氣秋(江湖景気秋なり)」のうち、詩題の「江湖」は双貫語なので、破題の上句と下句とに「江」と「湖」とを詠み分ける必要がある。問題の頸聯のうち、詩題の「江」を表すのは下句の「呉郡隈」であり、詩題の「湖」を表すのは上句の「杭州裏」である。これは『白氏文集』(2468)「奉送三兄(三兄を送り奉る)」の「杭州暮醉連牀臥、呉郡春遊並馬行(杭州の暮醉 牀を連ねて臥し、呉郡の春遊 馬を並べて行く)。」を踏まえる[一六]。頸聯の下三字がそれぞれ「江」「湖」を表すとすると、上四字、すなわち「紫蘭漠々」と、不明の二字を含む「黄□□々」とに詩題の「景氣秋」が対応することになる。そこで、詩題の「秋」の破題となり得る語彙で、かつ「紫蘭」と対を作ることが出来るものを『文鳳抄』に探ると(『文鳳抄』については後述)、巻二「歳時部・雑秋」の項に「紅蘭、紫蘭、黄菊、紫菊」と見える。したがって、不明の二字の第一字は「菊」だと考えられる。一方、上句の「漠々」の対として考えられるのは「紛々」である。「漠々」と「紛々」は、『白氏文集』(0918)「惜落花贈崔二十四(落花を惜しみて崔二十四に贈る)」に「漠漠紛紛不奈何、狂風急雨兩相和(漠漠 紛紛として奈何ともせず、狂風 急雨両ながら相和す)。」と見える。以上の分析により、第六句は「黄菊紛々呉郡隈(黄菊紛々たり 呉郡の隈)」であると推定出来る。

第二〇號第六二紙(e)と第二〇號第六紙(f)を取り上げる。最初に、懐紙の本文を現状のまま掲出する。

e、第四函 第二〇號 第六二紙

春日同賦花下披經史一首〈以情爲韻〉 親輔

春花綻下披何帙經史

讀來高引聲續記倩

「

f、第四函 第二〇號 第六紙

」

望張錦底含章頻

對曝紅程紛粧映字
鄭玄思濃艶薫書
班固情稽古窗前梅樹
□□時終日翫歡鶯　※□□は不明

押韻は、eの端作に「以情爲韻(情を以て韻とす)」とあることから、下平声清韻の「情」が韻字だと分かる。eに見える押韻の文字「聲」は、下平声清韻である。一方、fに見える押韻の文字は「程」「情」「鶯」である。この内、「程」「情」は下平声清韻であり、「鶯」は下平声耕韻だが、これは清韻と同用出来る。つまり、eとfの韻字は一致する。また、fに「梅樹」「鶯」と見えることから、その季節は「春」であり、eの端作に「春日」とあるのと符合する。以上の二点から、eとfとが元来一紙であった可能性を指摘出来る。この可能性を高める為に、残された詩の内容を分析する。句題詩には、その内容が句題に制約されるという特徴がある。特に頷聯・頸聯では、句題に含まれる実字を必ず別の語に言い換えなければならない。そこで、eとfを跨ぐ頷聯やfに含まれる頸聯で、eに見える句題「花下披經史(花下に経史を披く)」の実字「經」「史」「花」が言い換えられているかを確認する。対偶関係が重要である為、eとfとを繋げて次に挙げる。

春日同賦**花下披經史**一首〈以情爲韻〉親輔

1 春**花**綻**下披**何帙　春花 綻ぶ下 何の帙をか披かむ
2 **經史**讀來高引聲　経史 読み来りて高く声を引く
3 續記倩望張錦底（披史／花下）　続記 倩ら望む 錦を張る底
4 含章頻對曝紅程（披經／花下）　含章 頻りに対ふ 紅を曝す程
5 紛粧映字鄭玄思（花下／披／經）　紛粧 字に映ず 鄭玄の思

6 濃艶|花下 薫書|披 班固情|史　濃艶 書に薫る 班固の情

7 稽古窗前梅樹□　古を稽ふ 窓前 梅樹の□

8 □時終日翫歡鶯　□時 終日 歡鶯を翫ぶ

右の本文では第三句の「倩」字までがｅ、「望」字以降がｆである。句題の文字と詩句の対応関係を本文横に小字で注記した。句題に含まれる「經史」は双貫語である。頷聯・頸聯では、「經」と「史」とを上句と下句とに分け、それぞれを表す詩句が対をなす形で、句題を破題する必要がある。頷聯上句「續記」は、『史記』に続く『漢書』を指し、「史」を表す。下句「含章」は、『周易』「坤卦」の「含章可貞(章を含みて貞にすべし)。」に由来する語で、優れたものを内に含むという意味をもち、「經」を言い換える。また、「錦」と「紅」は、それぞれ「花」を表す。したがって頷聯では二紙を跨ぐ形で句題が破題されていると言える。頸聯では、対偶関係にある「紛粧」「濃艶」がそれぞれ「花」を表す。上句「鄭玄」は、多くの経書に注を施した後漢の人であり、「經」を言い換える。下句でそれと対をなす「班固」は、正史の『漢書』を撰した後漢の人であり、「史」を言い換える。すなわち、頸聯においても「經史」を双貫語とし、句題を破題していることを確認出来た。頷聯と頸聯の双方で同一の句題の破題を確認出来たことによりｅ、ｆが元は一紙であったと結論づけることが出来る。本節にて考察した三例のように、押韻や首聯の用字、破題を確認することにより、句題詩の断簡を一紙に復元することが可能になる。

四　無題詩の復元

無題詩とは、句題をもたない詩を指す。本詩懐紙には、詩題を確認出来る無題詩の懐紙が四九紙現存する。作者と紙数の内訳は次の通りである。

- 平親輔　十二紙
- 大江周房　十一紙
- 大江匡範、平時宗　六紙
- 平時兼　三紙
- 菅原在高、菅原淳高、源顕成　二紙

・近衛兼基、菅原在茂、平知基、藤原光親、藤原敦尚　　一紙

無題詩では句題詩に比べ、全体を通じて作者自身の精神・思想を自由に表現出来る。句題詩の復元では、二紙を同定する為に、句題の破題を確認することが特に重要であった。しかし、無題詩は詩題に内容が制約されない場合も多く、必ずしも破題があるわけではない。また、句題詩のような定まった構成方法も確立されてはいない。その為、無題詩の復元は、句題詩と異なる方法で行う必要がある。

それでは、無題詩の復元を試みたい。最初に、第一八號第六三紙(c)と第一八號第一三紙(d)の本文を懐紙の現状のまま掲出する。

g、第四函 第一八號 第六三紙

秋日於山寺言志**勒**　兵部大輔時宗

今出洛陽尋勝地往來

不絶暫難休溪嵐遙過

「　　」

h、第四函 第一八號 第一三紙

竹扉曉山月獨澄蕭寺秋

殘漏響闌三面屋半鐘

聲遠一階樓長安城

外寂寥境終日引朋

乘興遊

gの端作の押韻に関する注記「勒」は、この詩が勒韻によって作られたことを示す。勒韻とは、複数の参加者が詩を作る際に、韻字とその用いる順を予め設定することである。本詩懐紙の無題詩は全て勒韻で作られている。また、同じ詩題をもつ無題詩は、指定されている韻字やその順が全て一致することから、同じ詩宴でのものであると考えられる。gの詩題は、「秋日於山寺言志」である。これと同じ詩題のものに

は、平親輔の「秋日於山寺言志」(第一八號第六四紙)と大江周房の「秋日於山寺言志」(第一八號第六五紙)がある。

この内、親輔の詩の端作には、勒韻に関する注記として「休秋樓遊」とある。親輔、周房の詩の押韻は、いずれも注記の通りになされていることから、この二紙が同じ詩宴で詠まれたものであり、かつこの詩宴の勒韻が「休」「秋」「樓」「遊」であったと考えられる。g、hを繋げたものからこの点を確認出来れば、g、hが元来一紙であり、親輔、周房の詩と同じ詩宴で詠まれたものである可能性が高まる。この点を確認する為、二紙を繋げたものを次に挙げる。

秋日於山寺言志勒　　兵部大輔時宗

1 今出洛陽尋勝地　　今 洛陽を出でて勝地を尋ぬ
2 往來不絶暫難休　　往来絶えず 暫くだも休み難し
3 溪嵐遙過竹扉曉　　溪嵐 遥かに過ぐ 竹扉の暁
4 山月獨澄蕭寺秋　　山月 独り澄む 蕭寺の秋
5 殘漏響闌三面屋　　残漏 響闌けたり 三面の屋
6 半鐘聲遠一階樓　　半鐘 声遠し 一階の楼
7 長安城外寂寥境　　長安城外 寂寥の境
8 終日引朋乘興遊　　終日 朋を引き興に乗りて遊ぶ

第三句の「過」字までがg、「竹」字以降がhである。押韻を確認すると、gの「休」字、hの「秋」「樓」「遊」字が親輔、周房の詩の勒韻と一致する。続いて詩の内容を検討する。第四句に「蕭寺秋」とあり、端作の「秋日」とその季節が符合する。gとhとを跨ぐ頷聯の構成は、「溪嵐」と「山月」、「遥過」と「獨澄」、「竹扉曉」と「蕭寺秋」が対句となっている。第四句では、詩宴の場である山寺の風景を詠んでいることが「蕭寺」という語からわかる。第三句も寺の風景を詠んでいると考えられ、特に「蕭寺」と対をなす「竹扉」が、寺を表しているかを確認する必要があるだろう。「竹扉」が寺の戸という意味で用いられている例として、中原広俊の「秋日遊古寺」(『本朝無題詩一七』巻十)の「優遊漸及夕陽暉、古寺蕭疎掩竹扉(優遊して漸く及ぶ 夕陽の暉、古寺蕭疎として竹扉を掩ふ)。」がある。第三句の「竹扉」は、広俊の表

現と同様の意味で用いられていると考えられ、全体の内容に齟齬が見られない。よって、gとhとが元は一紙であったと考えられる。

次に第一八號第四五紙(i)と第一八號第九紙(j)の二紙を取り上げる。

i、第四函 第一八號 第四五紙

冬日陪　書齋言志詩**勒**

太皇大后宮權大進江匡範

猗矣斯焉抛外事各嘲

風月翫良辰士唯侍讀

「

j、第四函 第一八號 第九紙

」

從年舊　君□富才如　※□は不明

日新夢草頻驚空送

夜榮華尚少不期春姓

江今遇守文世累代家門

欲浴仁

iの詩も端作より勒韻であったとわかる。iと同じ詩題を持つものには、大江周房の「冬日陪　書閣言志」(第一八號第四七紙)がある。周房の詩の端作に押韻に関する注記として「勒辰新春仁」とあり、この四字が周房の参加した詩宴での勒韻だとわかる。この点が一致するかをiとjの韻字とその順から確認する為、次に二紙を繋げた形で挙げる。

冬日陪　書斎言志詩勒　　太皇大后宮權大進江匡範

1猗矣斯焉抛外事　　猗矣 斯れ焉に外事を抛ち

2 各嘲風月翫良辰　　各おの風月を嘲り良辰を翫ぶ
3 士唯侍讀從年舊　　士は唯だ侍読するのみ 年の旧るに従ふ
4 君□富才如日新　　君は才に富む 日びに新たなるが如し
5 夢草頻驚空送夜　　夢草 頻りに驚く 空しく夜を送る
6 榮華尚少不期春　　栄華 尚ほ少なり 春を期せず
7 姓江今遇守文世　　姓は江 今 守文の世に遇ひ
8 累代家門欲浴仁　　累代の家門 仁に浴せむとす

第三句「讀」字までがi、「從」字以降がjである。この詩の押韻は、iに「辰」字、jに「新」「春」「仁」字が見え、周房のものと一致することが確認出来る。したがって、この詩が周房と同じ詩宴でのものであり、元来は一紙であった可能性が高いと言える。

この可能性を高める為に、詩の内容に注目したい。頷聯では、対偶関係にある「士唯侍讀」と「君□富才」、「從年舊」と「如日新」がそれぞれ、作者自身の嘆かわしい現状と詩宴の主催者の賞賛すべき現状を対比し、表現している。続く頸聯においても自身の才の無さや政治的不遇を詠んでいる。句題詩の場合、こうした述懐は尾聯にのみ許されていた。ところが、当該詩では述懐が詩全体に及んでいる。詩全体を通じて「自己を詠む」構成は無題詩における一つの特徴である、という指摘が既にされており[一八]、それを踏まえている点は、jが無題詩であることを示唆する。そして、第七句には「姓江」とある。これは、jの作者が大江氏出身であることを示す。残された懐紙の作者の内、大江氏出身者は匡範と周房の二人に限られる。同じ詩宴における周房のものについては既に指摘した。ここから、jの作者もiと同じ、匡範であると考えられ、iとjについても元来一紙であったと指摘出来る。

ここまで、無題詩の断簡の復元方法を提示した。句題詩のように定まった構成方法を持たない無題詩では、勒韻という押韻や詩の内容の分析から二紙を一紙に復元することが可能であると考える。

おわりに

本章で取上げた句題詩は、いずれも平安中期に定着した所謂句題詩の構成方法に即して作られている。このことは、『猪隈関白記紙背詩懐

紙』の当時においても、依然としてこの構成方法が詩作の主流であったことを示すとともに、本詩懐紙の句題詩の分析にあたっては、この構成方法を必ず前提としなければならないことをも示している。そして、本詩懐紙の現状に照らして、この前提が重要なのは、『猪隈関白記』の料紙とする為に、裁断、分断されて本来の姿を留めていない懐紙を復元するのに、この前提が極めて有効だからである。続いて、無題詩に考察の対象を広げ、家実詩壇の具体相の一端を明らかにしようとした。そこに近づく為には、本詩懐紙の作品の全体像を把握する必要があり、詩の内容の考察と共に残された断簡の復元が不可欠である。無題詩を復元する場合、詩の内容が句題詩ほど詩題に制約されない為、破題の確認が重要となる句題詩の復元とは自ずから異なる方法が求められる。無題詩では、勒韻や詩の対句、内容の分析をより詳細に行っていくことで復元が可能である。家実詩壇についての具体的かつ総括的な考察の為には、断簡となった懐紙を可能な限り復元し、本詩懐紙の作品全体を視野に入れる必要がある。

一　山崎誠「陽明文庫蔵「猪隈關白記紙背詩懐紙」解題」(『和漢比較文学叢書 5　中世文学と漢文学 I』汲古書院、一九八七年)。

一　本詩懐紙以前の成立で現存する詩懐紙は三紙確認出来る。最古のものは安和二年三月に藤原実頼の作文会において書かれた藤原佐理の作品(古谷稔「懐紙の研究―書式の成立と変遷」『東京国立博物館紀要』十一、一九七六年)であり、次が承安四年頃の成立と推定される『文泉抄』紙背の大江忠房詩懐紙(久曽神昇『平安時代仮名書状の研究』風間書房、一九六八年)、そして後京極良経詩懐紙(古谷稔「後京極良経と法性寺流書法の展開―三井文庫本詩懐紙を中心として―」『MUSEUM』四九八、一九九二年)である。また、堀川貴司氏は本詩懐紙を含め、詩懐紙全体の流れについて整理されている。(「詩懐紙通観」『詩のかたち・詩のこころ　中世日本漢文学研究』若草書房、二〇〇六年、初出二〇〇三年)。

二　大曾根章介・後藤昭雄・山崎誠・佐藤道生「陽明文庫蔵陽明文庫蔵猪隈關白記紙背詩懐紙」(前掲注一書)。

三　前掲注一。

四　山崎誠「陽明文庫蔵猪隈関白記紙背詩懐紙について」(『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年、初出一九八二年)。

五　堀川貴司(前掲注二論文)。

六　堀川氏は「句題詩の詠法と場」(前掲注二書、初出一九九五年)で本詩懐紙の菅原在茂の詩(「山川被隔霞」)を解釈している。

七　句題詩の構成方法については、主として佐藤道生「句題詩概説」(『句題詩研究 古代日本の文学に見られる心と言葉』佐藤道生編、慶應義塾大学21世紀COE心の統合的研究センター、二〇〇七年)や堀川貴司(前掲注七論文)を参照した。

八　本文右横の小字は、詩句と詩題との対応関係を示したものである。

十　『史記』「蘇秦伝」に「蘇秦聞之而慙自傷、乃閉室不出、出其書遍觀之。曰、夫士業已屈首受書、而不能以取尊榮、雖多亦奚以爲。於是得

周書陰符伏而讀之。」とある。

十一 川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』(日本古典文学大系七二、岩波書店、一九六六年)参照。

十二 『文鳳抄』(巻二、歳時部・雑秋)「涼月明月　微陽」とある。以下、本間洋一校注『文鳳抄』(歌論歌学集成 別巻二、三弥井書店、二〇〇一年)参照。

十三 同様の例は『菅家文草』(巻三・219)「行春詞七言廿韻」に「苺苔石上心沈陸、楊柳花前脚履氷。」とある。

十四 主要な語句の典拠・用例を挙げる。○嶺頭〔沈佺期、遙同杜員外審言過嶺詩〕天長地闊嶺頭分、去國離家見白雲。○巖腹〔王維、燕子龕禪師詩〕巖腹乍旁穿、澗唇時外拓。〔本朝無題詩巻八、山寺、春日遊長楽寺、藤原季綱〕巖腹梯危携竹杖、渓心房暗挑蘭釭。○雪〔白氏文集、1358、二月五日花下作〕二月五日花如雪、五十二人頭似霜。○露・霞・雪・春〔文鳳抄巻八、草樹部・花〕春、雪、霞、露、雲、錦、紅、白、艶、粧、色、気、匂、香、芳、薫、染、開、落、散、皆以一字有花意。

十五 頷聯の典拠・用例を挙げる。○陶朱徐棹渡〔蒙求、范蠡泛湖、李翰自註〕史記、范蠡事越王句踐、用其□漑雪會稽之恥。遂乗遍舟浮於江湖、變名姓適齊爲鴟夷子。反之陶、爲陶朱公。○漁父頻歌廻〔楚辞、漁父〕屈原既放。遊於江潭。行吟澤畔。顔色憔悴。形容枯槁。漁父見而問之。(中略)漁父莞爾而笑、鼓枻而去乃歌曰(下略)。

十六 同様の対句表現は『新撰朗詠集』(巻下、411草・草長江湖上、大江以言)に「呉郡望青風放馬、杭州道緑月行人。」とある。

十七 以下、『本朝無題詩』所収の詩句に関しては、本間洋一『本朝無題詩全注釈』(一～三、新典社、一九九二～一九九四年)の本文、訓読、注釈を参照した。

十八 堀川氏は、『本朝無題詩』の特色について「一首の構成の中に、〈場〉としての自己と外界という両者を巧みに配置することによって、心象と風景とが一体化した世界を作り上げるところにある」と述べる。(「本朝無題詩試論―句題詩との対比から―」(前掲注一書、初出二〇〇〇年)。

第二章　詩懐紙の復元

はじめに

前章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の復元方法について、句題詩と無題詩の双方から考察を行った。詩懐紙全体を見渡すと、天地を裁断された場合、裁断された端の部分を別の箇所で料紙として用いることはない。一方、左右に裁断された場合、断簡となった二紙それぞれを稀に異なる箇所で料紙として使用していたようである。このような左右に裁断されたと思しき懐紙を整理し、本章の末にその表を付した。表にある通り、本詩懐紙に含まれる断簡の形態は、詩題のみ闕や前半闕等、多様である。そこで本章では、表に挙げた懐紙を考察の対象とし、前章で検討した方法に基づき、可能な限りその復元を試みる。次節以下、各懐紙の筆跡は酷似していることを前提に、内容面を検討することで僚紙の同定を行う。なお、闕字箇所に残画を確認出来る懐紙は、本章での復元対象とはしない。

一　詩題のみ或は本文のみをもつ懐紙同士の同定

本節では、詩題のみ或は本文のみを有する懐紙同士の同定を行う。句題詩と無題詩では、考察の方法が異なる為、最初に句題詩の考察から進める。まず、第四函第十七号第二十紙と同函同號第四十四紙について、上段に懐紙の字配りのまま、下段に二紙を繋げた形を掲出する。

〔第四函　第十七号　第二十紙〕

春日同賦花色映臺〔榭詩〕　〔以春為韻〕

〔第四函　第十七號　第四十四紙〕

太皇大后宮権大進大江匡範

紛々花色映何処臺榭
之閒不秘匂香柏紅櫻
籠粉艶長楊翠柳積芳
塵燕姫舞袖旁廻雪秦
女簫聲剩調春始自携
文餘念少心懸風月
數寄身

【校訂本文】

春日同賦**花色映臺榭**詩〔以**春**為韻〕太皇大后宮権大進大江匡範

1 紛々花色映何処
2 臺榭之閒不秘**匂**
3 香柏紅桜籠粉艶
4 長楊翠柳積芳**塵**
5 燕姫舞袖旁廻雪
6 秦女簫聲剩調**春**
7 始自携文餘念少
8 心懸風月数寄**身**

押韻に関して、第二十紙に「以春為韻（春を以て韻と為）」とあり、上平声諄韻の「春」が韻字である。その本文と推定される第四十四紙の押韻の文字「匀」「塵」「春」「身」もまたいずれも上平声諄韻、或はそれと同用出来る上平声真韻である。二紙は押韻の面では一致していることを確認出来た。

次に、下段の二紙を繋げた校訂本文の内容を分析し、二紙がもとは一紙であったかを検討したい。当該詩のような句題詩の場合、その構成方法が守られていたことは、前章にて述べた通りである。そこで、句題詩の断簡と考えられる第四十四紙の本文と、第二十紙の詩題「花色映臺榭」との一致を考えたい。まず、首聯では、詩題の五文字全ての使用を確認出来る。

次いで頷聯と頸聯では、詩題が正しく破題されているかという点を見る。なお、詩題に含まれる「臺榭」は双貫語である。その為、各聯の上下で「花色映臺」或は「花色映榭」を表すように詠み分ける必要がある。頷聯の第三句上二字「香柏」は、漢の武帝が築いた「柏梁臺」の異名である。詩題の「臺」を」言い換えている。それと対をなす第四句二字「長楊」は、秦代に築かれた「長楊榭」のことを指す。詩題の「榭」を言い換えている。続く第三句下五字「紅桜籠粉艶」を見る。「紅桜」は色を含む花の名であり、下に続く「粉艶」により、その艶めいた花の美しさを表現する。これにより詩題の「花色映」を言い換えている。それと対偶関係にある第四句下五字「翠柳積芳塵」を見よう。「翠柳」は色を含む花の名、その下の「芳塵」は、散り積もった美しい花びらを表す。これにより「花色映」を言い換えている。頷聯では、第三句にて「花色映臺」、第四句にて「花色映榭」が、「臺」「榭」を表す部分を対句としつつ、詩題全体を敷衍している点を確認出来た。続けて、頸聯を確認する。頸聯では、第五句上四字「燕姫舞袖」により、漢の成帝の后であった趙飛燕が袖を翻しながら美しい舞を舞った舞榭を暗示する。これにより詩題の「榭」を言い換えている。対をなす第六句上四字「秦女簫聲」は、簫史が鳳臺にて妻の弄玉と共に簫を吹いた故事を踏まえた表現である。これにより詩題の「臺」を言い換えている。続く第五句下三字「旁廻雪」はその周囲で散っている白い花びらの様子を雪に喩え、詩題の「花色映」を言い換えている。それと対をなす第六句下三字「剰調春」では、花びらが春の美しい調べに乗っていることをいい、詩題の「花色映」を言い換えている。これにより頸聯においても、第五句にて「花色映榭」、第六句にて「花色映臺」を、「榭」と「榭」を対句として言い換えつつ、詩題全体を敷衍していることを確認出来た。首聯の題目、頸聯と頸聯において詩題が破題されていること、同時に押韻が守られていることを鑑み、この二紙がもとは一紙であったと考える。次に、当該の二紙のように詩題のみを有する第二十號第五十八紙と官署、本文を有する第十七號第四十紙を見る。先のものと同様、上段に懐紙の字配りそのままの翻字、下段に二紙を繋げた校訂本文を掲出する。

〔第四函　第二十號　第五十八紙〕

秋夜同賦夜長催勝遊詩　〈便用遊字〉

〔第四函　第十七號　第四十紙〕

木工頭源兼定

秋夜方長催感興宜
哉素律叶勝遊東方遲
曙會同足北斗徐廻宴集
頭送漏自然酣暢客待鷄
遮莫詠吟儔英才連座
爭鋒席思得此時
屢無愁

【校訂本文】

秋夜同賦**夜長催勝遊**詩〈便用**遊**字〉木工頭源兼定

1 秋夜方長催感興
2 宜哉素律叶勝遊
3 東方遲曙会同足
4 北斗徐廻宴集**頭**
5 送漏自然酣暢客
6 待鷄遮莫詠吟**儔**
7 英才連座争鋒席
8 思得此時屡無**愁**

押韻に関して、第五十八紙の端作に「便用遊字（遊字を便用す）」とあり、下平声尤韻の「遊」が韻字である。その本文と推定される第十七號第四十紙の押韻の文字は、「遊」「頭」「儔」「愁」である。この内、「儔」「愁」は下平声尤韻、「頭」は、それと同用出来る下平声侯韻である。これにより、押韻の面で、二紙が一致していることを確認出来た。次いで、内容面を見ていきたい。

まず、首聯において、詩題「夜長催勝遊（夜長勝遊を催す）」の五字が用いられている。次に頷聯・頸聯を見る。当該詩も句題詩である為、頷聯と頸聯において詩題が破題されているかを確認する必要がある。頷聯からみる。第三句上四字「東方遲曙」と、それと対偶関係にある第四句上四字「北斗徐廻」は、いずれも夜がなかなか明けないことを言う。これにより、詩題の「夜長」を表現する。当該詩のように、「東方」と「北斗」を対とし、夜長を言い換える例としては、『江吏部集』（巻上、月露夜方長）「鏡瑩北斗漸廻後、珠点東方難曙間。（鏡瑩く北斗の漸く廻りし後、珠点ず東方曙け難き間。）」等が挙げられる。当該詩においても、これと同様の破題がなされていると考える。続く各句下三字「会同足」と「宴集頭」を見る。「会同」は、人々が宴の為に集まる様子、「宴集」は宴会そのものを表現する。これにより、題の「催勝遊」を言い換えている。頷聯において、詩題が破題されていると考える。そして、頸聯を見る。第五句では上四字「送漏自然」は、いつのまにか夜の時が過ぎていくことを言う。また、対をなす第六句上四字「待鷄遮莫」は、鷄が夜明けを知らせるのを待つということはどうでもよい、即ち夜が長い為、いつ明けるかということは気にならないと解釈できる。つまり、いずれも詩題の「夜長」を言い換えている。続く第

五句下三字「酣暢客」は、宴席にて酒を楽しむ出席者を指す。対をなす第六句下三字「詠吟儔」もまた、詩会にて詩を詠吟する出席者を指しており、いずれも詩題の「催勝遊」を言い換えている。頸聯においても詩題が敷衍されていると考える。以上より、押韻と共に、首聯の題目、頷聯・頸聯における詩題の破題を確認することが出来た。第十七號第四十の詩題は、第四函第二十號第五十八紙に見る「夜長催勝遊」と推定出来、二紙が元は一紙であったと考える。

二　詩題の推定

前節では、本文のみを有する懐紙に対して、詩題のみを有する懐紙との同定を行った。その方法の一部は、同定すべき断簡をもたない懐紙において、その詩題を推定する際にも有効である。そこで実際に、詩題の検討を行いたい。まずは、句題詩の本文と想定される第十五號第三十二紙を掲出する。

〔第四函　第十五號　第三十二紙〕

〔文士各納涼〕

(夏□終日)興無彊文士
家々各納涼詞苑月前
迎素律翰林風底属
清商読書窓舊衣還
健練筆床閑扇自忘
箇裏頌声吟詠久
君齢従此歳年長

【校訂本文】文士各納涼

1 夏□終日興無彊
2 文士家々各納涼
3 詞苑月前迎素律
4 翰林風底属清商
5 読書窓舊衣還健
6 練筆床閑扇自忘
7 箇裏頌声吟詠久
8 君齢従此歳年長

本詩懐紙の詩題として、首聯より、「文士各納涼」が推定される。そこで、詩題と頷・頸聯の各句との対応について検討したい。詩題とした「文士各納涼」の内、実字である「文士」と「納涼」が頷聯・頸聯において破題されているかを確認する。まず、頷聯では、第三句上二字「詞苑」は、文人仲間が集う場を意味する。その対偶関係にある第四句上二字「翰林」は、文人を意味する。これにより詩題の「文士」を言い換えている。一方で「納涼」を表すのは、第三句下三字「迎素律」、第四句下三字「属清商」である。「素律」と「清商」は、いずれも秋の

異称である。暑さが収まった涼しい秋という表現を用いることにより、詩題の「納涼」を表現している。これにより、頷聯では詩題を敷衍していることを確認出来た。次いで頸聯を見よう。詩題の「文士」を言い換えているのは、第五句上四字「読書窓舊」、第六句上四字「練筆床閑」である。一方、「納涼」を言い換えるのは、第五句下三字「衣還健」と、対なす第六句下三字「扇自忘」であろう。「衣還健」とは、夏の暑さが収まり、涼しくなったことで衣替えの必要があることを表現する。また、「扇自忘」とは涼しくなったことで自然と扇ぐ必要がなくなったことを表現する。これにより頸聯においても、各句が詩題を敷衍していることを確認出来た。以上の検討より、第十五號第三十二紙の詩題は、「文士各納涼」だと考える。

続いて、第十五號第三十二紙同様、句題詩の本文と推定される作品の詩題を検討する。第一句、第二句を闕とする第四函第二十號第九紙を次に掲出する。

〔第四函 第二十號 第九紙〕

緩二崤畔妙管響通
十室程豊沛宴闌(繁)
暁語長安望極翫春(声)
庭梅桜樹旁匂處戯(艶)
交花頻遥鳴

【校訂本文】

聞鶯洛邑中

（第一、二句闕）

3 □□□緩二崤畔
4 妙管響通十室**程**
5 豊沛宴闌繁暁語
6 長安望極翫春**声**
7 庭梅桜樹旁匂處
8 戯艶交花頻遥**鳴**

【参考】第四函 第二十號 第六十四紙

春日同賦**聞鶯洛邑中**應　教詩〈**題中取韻**〉　太皇大后宮権大進大江匡範

洛邑之中令耳傾　唯無外事欲聞**鶯**
自経十□被留語　毎度三川未飽**鳴**
元禮浮閒歌竹舌　沛公過處囀花**聲**

春天除目漏恩士　此後何因□□□

当該詩は、首聯を闕とする為、詩題の五文字を首聯より想定することは出来ない。しかし、頷聯・頸聯の表現から詩題は、第二十號第六十四紙の匡規の作品と同じ「聞鶯洛邑中」だと推定する。匡範の作品や、表現の典拠・用例から、推定した詩題を検証したい。

まず、当該詩の押韻を確認する。参考として掲げた匡範の作品の端作に「題中取韻（題の中より韻を取る）」とある。即ち、この作品の提出された詩会では、詩題「聞鶯洛邑中」の内、一字を用いて韻字としていたとわかる。当該詩本文の押印の文字は、「程」「声」「鳴」である。この三字は、「程」「声」が下平声四清韻、「鳴」が下平声庚韻である。これは、詩題の下平声耕韻「鶯」といずれも同用出来る文字であり、韻は一致している。「題中取韻」の場合、詩題の五文字は首聯でのみ用いることが出来る。その為、「鶯」の字は、闕である首聯に含まれていると考える。

形式面において齟齬の生じないことを確認出来た為、本文の内容解釈に移る。頷聯と頸聯が詩題を破題しているかを検討する。詩題「聞鶯洛邑中」に含まれる「洛邑」が双貫語である。「洛」と「邑」が詠み分けられ、言い換えられているかを確認する。まず、第四句上四字「妙管響通」の「妙管」は、『百二十詠』一（047、鶯）の「寫囀清歌裏、含啼妙管中。（囀いを寫す清歌の裏、啼を含む妙管の中。）」等を典拠とする表現である。「響通」と共に用いることで、詩題の「聞鶯」を言い換える。ついで下三字の対句を確認しよう。第三句下三字「二崤畔」の「二崤」は長安の左に聳える函谷関の二崤を指す。『文選』巻一「西都賦」に「漢之西都、在於雍州、是曰長安。左據函谷二崤之阻。（漢の西都は、雍州に在り、是れを長安と曰ふ。左は函谷二崤の阻に據り、）」とある。これにより詩題の「洛中」を言い換える。その対偶関係にある「十室」は『論語』（公冶長）にある「子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉。（子曰く、十室の邑、必ず忠信丘のごとき者有らん。）」を典拠とする。これにより、詩題の「邑中」を言い換える。頷聯は第三句に闕があるものの、「洛」と「邑」を対句とし、詩題を破題していることを確認出来た。次に、頸聯を見る。第五句上四字「豊沛宴闌」の「豊沛」とは漢の高祖の出身地「豊沛邑」のことを指す。四字全体で詩題の「邑中」を言い換えている。それと対偶関係にある「長安」は、唐の都であり、詩題の「洛中」を言い換えている。続く「聞鶯」に該当する各句の下三字を見よう。第五句下三字「繁暁語」では、鶯の鳴き声を「語」と表現し、詩題の「聞鶯」を言い換える。対をなす第六句下三字「翫春声」もまた、春になると鳴く鶯の声を賞玩する様を言い、詩題の「聞鶯」を言い換えている。頸聯においても、詩題を破題していることを確認出来た。押韻や、頷聯・頸聯の破題の表現の検討を通じて、「聞鶯洛邑中」という詩題を推定出来ると考える。続けて、句題詩の本文と推定される同號第三十七紙の作品を掲出する。当該作品も第一句と第二句の一部を闕とする。

〔第四函 第二十號 第三十七紙〕

水辺動感腸岸荻花□
旁載雪洲蘆葉悴被
封霜敗籣緑變沙痕下
老菊色衰潭面傍
景気蕭條何思苦
終朝携客□□□

【校訂本文】

寒叢在水辺

（第一句闕）

2 □□水辺動感腸
3 岸荻花□旁載雪
4 洲蘆葉悴被封霜
5 敗蘭緑変沙痕下
6 老菊色衰潭面傍
7 景気蕭條何思苦
8 終朝携客□□□

【参考】陽明文庫蔵『大手鑑』所収詩懐紙二

冬日同賦**寒叢在水辺**各分一字詩〈探得霜字〉　前伊豆守平時兼

寒叢三両送餘芳　只在水辺足満望
潭菊纔残猶帯雪　皐蘭早敗被封霜
菰蒋月冱江村地　蘆葦花衰波路郷
遊宴席召愚昧士　愁呈一什□□□

第二句の語句や頷聯、頸聯の内容から、詩題を考えたい。陽明文庫蔵『大手鑑』所収の平時兼の懐紙を見る。この懐紙と本詩懐紙では、太字で示したように、頷聯と頸聯において語句の一致する箇所を確認出来る。句題詩では、同じ詩題をもつ作品同士の頷聯と頸聯において、詩題を破題する為に用いた語句の重複が生じることがある。その為、本詩懐紙も、時兼の作品と同じ詩題を持つ可能性がある。そこで、本詩懐紙の詩題を「寒叢在水辺」であると推定し、第二句以下でそれを検討したい。押韻については、時兼の作品に「探得霜字」とある。この場合、詩会の出席者の間で、異なる韻字を用いて作詩することもある為、内容解釈から詩題と本文について検討する。

まず、第二句では、詩題「寒叢在水辺」の「水辺」が用いられていることを確認出来る。次の頷聯と頸聯では、詩題を破題しているかを確

認する。頷聯からみる。第三句上二字「岸荻」と、それと対偶関係にある第四句上二字「洲蘆」は荻や蘆が生えている場所、即ち詩題の「在水辺」を言い換えている。続く第三句下五字「花□旁載雪」と第四句下五字「葉悴被封霜」は、いずれも詩題の「寒叢」を言い換えていると考える。「花□旁載雪」とは、冬の寒い日に雪をその上に乗せて萎れた花の様子を表す。また、「葉悴被封霜」とは、霜に閉じ込められ、勢いを失った草の様子を表す。これにより、頷聯では詩題が破題されていると考える。次いで頸聯を見る。第五句上四字「敗蘭緑変」と第六句上四字「老菊色衰」が、季節の経過と共に色の変化した蘭と菊をそれぞれ表し、「寒叢」を言い換えている。また、第五句下三字「沙痕下」、第六句下三字「潭面傍」は、いずれも「在水辺」を表していると考える。頷聯と頸聯の双方で、仮定した詩題を破題していると考える。再び、平時兼の詩に戻る。時兼の詩においても、頷聯では、第三句上四字「潭菊纔残」と第六句上四字「皐蘭早敗」は、「叢在水辺」を表している。また、第三句下三字「猶帯雪」と第四句下三字「被封霜」は、「寒」を表している。続く、頸聯では、第五句上四字「菰蒋月冱」第六句上四字「蘆葦花衰」が「寒叢」を表している。また第五句下三字「江村地」、第六句下三字「波路郷」が「在水辺」を表すと考える。時兼の詩と本詩懐紙を比較すると、一致する対語が詩題の同じ部分を表現する為に、使用されているとわかる。以上のことより、当該詩の詩題は、「寒叢在水辺」と考える。続いて、端作のみを闕とする第四函第二十三號第四十二紙を掲出する。

〔第四函 第二十三號 第四十二紙〕

給料文章生敦尚

本自雨中感旁成有
絃有管動心情山腰
雲暗龍鱗曲水面浪廻
鶴操声餘靄収来高
調處孤煙巻去急(弾)
程施霑斜脚似皇(澤)
見此独愁沈滞名

【校訂本文】

雨中有管絃　給料文章生敦尚

1 本自雨中感旁成
2 有絃有管動心情
3 山腰雲暗龍鱗曲
4 水面浪廻鶴操声
5 餘靄収来高調處
6 孤煙巻去急弾程
7 施霑斜脚似皇澤
8 見此独愁沈滞名

右の詩の詩題は、既に本間洋一氏が「雨中有管絃」であると、指摘する[三]。本節では、その意見に依拠しつつ、その表現について更に考察したい。他に同じ詩題を持つ作品はない為、詩会における韻字は不明である。推定した詩題「雨中有管絃」と本文の表現の一致を検討する。まず、首聯では、詩題の五文字が全て用いられている。次いで、頷聯・頸聯において詩題を破題しているかを確認する。なお、詩題の「管絃」は双貫語である。この為、頷聯と頸聯において、「管」と「絃」を詠み分けているかも合わせて確認する必要がある。第三句上四字「山腰雲暗」と第四句上四字「水面浪廻」は、対句語彙集である『文鳳抄』（巻一、天象部・雨）[四]の項に「山腰雲暗、水面浪廻」と見える。当該詩においては、詩題の「雨中」を言い換えている。続く第三句下三字「龍鱗曲」は笛の曲名であり、詩題の「管」を言い換える。それと対をなす第四句下三字「鶴操声」は琴の曲名であり、詩題の「絃」を言い換えている。これにより、頷聯では詩題を破題していることを確認出来た。続けて、頸聯を見る。第五句上四字「餘靄収来」と第六句上四字「孤煙巻去」の対偶関係の用例として、『類聚句題抄』[五]の藤原雅材の「雨霽山河清」に、「余靄収時峯倍黛、孤烟巻後水添音。（余靄収まりし時に峯は黛を倍す、孤烟巻きし後に水は音を添ふ。）」がある。藤原雅材の詩では、詩題の「雨」を言い換える為の表現として用いられている。当該詩懐紙の表現も、同様であると考える。そこで、詩題の「雨中」を言い換える。続く第五句下三字「高調處」は「管」を表す。対となる第六句下三字「急弾程」は「絃」を表す。頷聯、頸聯の双方で、双貫語を対句として表現し、かつ各句で詩題を敷衍することが確認出来た。これにより、本詩懐紙の詩題は「雨中有管絃」と考える。

このように、端作をもたず本文から句題詩と推定される作品の場合、首聯や頷聯、頸聯の表現、他の作品との語句の重複から、その詩題を推定することが可能である。一方、端作を持たない無題詩ではどうか。ここからは、無題詩の本文をもつと推定される懐紙の詩題を検討したい。まず、端作、第一句、第二句の一部を闕とする第四函第十四號第二十一紙を、本文の字配りのまま次に掲出する。

〔第四函　第十四號　第二十一紙〕

」

□□□□**明**千界有雪
参**秋**暁万里無雲一夜
晴露竹不言煙暗色風
槐遮莫雨乾**声**（落葉之雨雖／下、古竹之煙雖暗、天未太晴、地／表太潔。故云。）
南端嘯立今無興
想像庾楼潘室**情**

第十四號第二十一紙の押韻を確認する。端作を闕とするが、当該詩の押韻の文字は、「明」「晴」「声」「情」である。この押韻の文字と同じ順で同じ文字が用いられている作品が、次の下段に参考として掲出した同号第二十紙の平親輔の作品「秋夜於月前言志」詩である。その一致を確認する為、上段に校訂本文、下段に親輔の作品を掲出する。

【校訂本文】

秋夜於月前言志〈勒〉

1 □□□□□□□
2 □□□□□□**明**
3 千界有雪参秋暁
4 万里無雲一夜**晴**
5 露竹不言煙暗色
6 風槐遮莫雨乾**声**〈落葉之雨雖／下、古竹之煙雖暗、天未太晴、地／表太潔。故云。〉
7 南端嘯立今無興
8 想像庾楼潘室**情**

【参考】第四函 第十四号 第二十紙

秋夜於月前言志〈勒〉 親輔

何劣箇中澄去同
庾公楼上比清**明**
秋来殊勝五更影
雲尽遠望千里**晴**
草露臨昏眸飽色
松風迎夜耳盈**声**
倩看景気詞難及
当座尽篇独泥**情**

右の二紙のように、韻字とその順が完全に一致するのは、勒韻で作詩された場合である。勒韻とは、詩会の出席者全員が、同じ韻字を同じ順に用いて作詩することである。『猪隈関白記紙背詩懐紙』では、無題詩のみ勒韻で作詩されている。即ち、作品同士の韻字とその順が一致する、それらは同じ詩会にて提出された無題詩の可能性がある。その場合、必然的に詩題は共通する。当該詩は、韻字とその順の一致により親輔の作品と同じ詩会にて提出された無題詩の可能性がある。また、詩の本文に「秋」とあり、親輔の作品と賦された季節も一致する。これにより、当該詩の詩題を「秋夜於月前言志」だと推定する。

この詩題である可能性を更に高める為、詩の内容解釈を通じて、推定した詩題と詩の内容に齟齬が生じないかを検討したい。無題詩には句題詩のような明確な構成方法はないが、詩題に即した内容で作詩されている。当該詩の場合には、「秋夜」や「月」に関係する内容であるかを考える。第三句「有雪」とは、月に照らされた地があたかも雪が降ったかのように白く輝いている様を詠む。月に関連するこの表現は、『和漢朗詠集』六（巻上、秋・八月十五夜 243、白居易）の「嵩山表裏千重雪、洛水高低両顆珠。（嵩山表裏千重の雪、洛水高低両顆の珠。）」

等に用例が見られる。また、第七句「南端」は、『文選』（巻二十三、悼亡詩三首其三）の潘岳の「皎皎窓中の月、照我室南端。（皎皎たる窓中月、我が室の南端を照らす。）」を典拠とする。第八句の「潘室」も、この詩を典拠とした表現であり、「潘」とは詩の作者潘岳を指す。同句の「庾楼」と親輔の作品の「庾公楼」は、同じことを指す。「庾楼」とは、晋の庾亮が武昌にいる時、南楼に上り、秋の夜を楽しんだ故事を指す。こうした表現から、当該詩は、詩題「秋夜」や「月」に関連づけて詠まれていることを確認出来た。推定した詩題との間に齟齬はない。これにより、当該詩の詩題は「秋夜於月前言志」であると考える。当該詩の他に、詩の形式から無題詩の本文と推定される懐紙もある。そのような作品として、次に第十四號第二三紙を懐紙の字配りのまま掲出する。

〔第四函　第十四號　第二十三紙〕

」

潘氏宋生知我思無他近(日)
労中**丹**沈淪年舊頭(徐)
老四十秋帰心独**寒**唯翫
前鴻將后雁不堪紫蕙又(紅)
蘭風雲気味興相切景気(蕭)
條感万**端**夜臥香山鐘未報
暁過商嶺月西**残**文賓酒(客)
宴遊席一詠一吟漏欲**闌**

第十四號第二三紙は、七言律詩よりも長い形式で構成されている。この点で無題詩の本文だと考える。同じ詩会にて提出した可能性のある作品を探る為、まず、押韻の文字を確認しよう。当該詩の押韻の文字は、「丹」「寒」「蘭」「端」「残」「蘭」であり、この順に用いられている。用いられている韻字とその順が一致するのは、次に掲出する同号第二三紙の平親輔の作品である。その一致を確認する為、上段に二三紙の校訂本文、下段に参考となる親輔の作品を掲出する。

【校訂本文】

暮秋言志応　教詩〈勒〉

1 潘氏宋生知我思
2 無他近日労中**丹**
3 沈淪年舊頭徐老
4 四十**秋**帰心独**寒**
5 唯翫前鴻將后雁
6 不堪紫蕙又紅**蘭**
7 風雲気味興相切
8 景気蕭條感万**端**
9 夜臥香山鐘未報
10 暁過商嶺月西**残**
11 文賓酒客宴遊席
12 一詠一吟漏欲**闌**

【参考】　第四函　第十四號　第二十二紙

暮秋言志応教詩**勒**　勘解由次官平親輔

庭林紅葉粧増雨
引朋眺□動意**丹**
望在夕郎齢既老
倩思霜鬢首徐**寒**
籬東旁洗露清菊
窓裏頻薫風敗**蘭**
雁韻送秋霜塞外
蟲聲追夜怨叢**端**
夢驚千里雲晴後
眼極五更月色**殘**
遊宴本来催感席
琴詩酒会興何**闌**

当該の詩懐紙の韻字と親輔の作品の韻字とその順の一致は、二紙が同じ詩会の作品であることを示唆する。また、当該詩のほんぶんには、第四句に「秋」があり、親輔の作品と賦された季節が一致する。これにより、当該詩の詩題が「暮秋言志」である可能性があると考える。この可能性を高める為、詩題の「秋」と詩の内容との間に齟齬が生じていないかを検討する。

まず、第一句上四字「潘氏宋生」をみよう。「潘氏」とは、「秋興賦」を詠んだ潘岳を指す。次いで「宋生」は、「九弁」の中で、「悲哉秋之為気也。蕭瑟兮草木揺落而変衰。」と詠んだ宋玉のことである。下三字「知我思」は、暮秋に際して感じる作者の思いを「秋興賦」を作った潘岳や「九弁」を作った宋玉はわかっている、と解釈出来る。また、第八句「景気蕭條」とは、「蕭条」が秋の物寂しい様子を意味する。『本朝無題詩』[七]巻二の藤原忠通の「賦秋景気」に「景気蕭条廼眼見、衰蘭花萎菊粧空。（景気蕭条として眼を廼らし見れば、衰蘭花萎えて菊の粧も空し。）」とあり、当該詩もこの表現を踏まえていると考える。取り上げた表現より、詩の内容は「秋」に関係するものであることを確認出来た。これにより、当該詩の詩題は、「暮秋言志」詩であると考える。

ここまで見てきた作品は、いずれも七言律詩で構成されている。ただ『猪隈関白記紙背詩懐紙』には、少ない数ではあるものの五言律詩や七言絶句の作品も含まれている。そこで詩題を闕とし、もとは七言絶句であったと推定される第四函第二十號第五十紙を本文の字配りのまま次に掲出する。

〔第四函 第二十號 第五十紙〕

万葉**羽林**春**羽林**遂可
翫金鳳　博陸献齢
亦大椿有注

当該詩は、詩本文の後半を有する懐紙である。最終行が三字で終わっていることから、これが後半の三字である。この中に聯を跨いで「羽林」が二度用いられている。この「羽林」は、詩懐紙全体の成立時期から右近衛中将であった近衛家実を指すものと考える。尾聯にて詩会の主催者を具体的に賞賛する表現は、句題詩の述懐における常套表現の一つである。しかし、当該詩の場合には、それが他の聯にも及んでおり、特別な場における作品であることを示唆する。これと重複する表現もつ懐紙は、同號第十八紙の菅原淳高の作品である。内容を比較検討する為、次に当該詩の校訂本文と淳高の作品を掲げる。

【校訂本文】

栄華契萬春

（第一句闕）

2 □□万葉羽林春

3 羽林遂可翫金鳳

4 博陸献齢亦大**椿**有注

『猪隈関白記』建久八年（一一九七）一月六日条に、第十八紙が作詩された詩会に関する記録がある八。詩会では、菅原在茂が題を献じ、詩は絶句かつ題中取韻にて詠まれたとある。第十八紙の詩題「栄華契萬春」は、漢字五文字の句題である。句題の七言絶句に関する明確な規則が存在したかは定かではない。しかし、句題の七言律詩の首聯と尾聯のような構成であると指摘されている九。即ち、前聯では漢字の五文字を詠み込み、後聯では詩題と関連を持たせつつ自身の思いを述べるという構成である。少ない字数の中で、詩題と関連付ける必要がある為、

【参考】〔第四函 第二十號 第十八紙〕

早春同賦**栄華契萬春**應　教一首〈**題中取韻**〉　散位菅原淳高

1 栄華云発楽心新

2 芳契自斯万葉**春**

3 可見羽林高会所

4 十廻松與再悛**情**

詩会の出席者の表現は、間々重複することがある。第十八紙では、どうか。前聯にて詩題の五文字が全て用いられている。後聯では、「羽林」である家実の繁栄と、それが松のようにいつまでも続くようにと近衛家を寿いでいる。先述した七言絶句の構成とそのこうせいが一致していることを確認出来る。

ここで、当該詩に再び戻る。まず、詩の韻字から見る。『猪隈関白記』本文に題中取韻とあり、当該詩は、詩題の「栄華契万春」の内、上平声諄韻の「春」を韻字とする。第四句末「椿」も上平声諄韻である為、一致する。この韻字は、第十八紙も同様である。また、第二句には、詩題の内、「万」と「春」が用いられている。こうした十八紙との一致は、当該詩の詩題が「栄華契万春」である可能性を示す。次に、後聯の内容を検討する。第四句の「博陸」は関白の唐名である。当該詩を建久八年の作とすると、この語は建久七年（一一九六）十一月に関白に就いた基通を指すことになる。また、「大椿」は、『荘子』「逍遥遊」に「上古有大椿者、以八千歳為春、八千歳為秋。（上古に大椿有り、以て八千歳を春と為し、八千歳を秋と為す。）」と見える長寿の椿のことを指す。これにより、詩会を主宰する近衛家を寿いでいると考える。内容の面でも詩会の時期と齟齬が生じていないことを確認出来た。そこで、当該詩の詩題を「栄華契萬春」と考える。

これと同じ詩題をもつと推定出来る詩懐紙がもう一紙存在する。それが、十八號第二七紙である。次に、その本文を懐紙の字配りのまま上段に、下段にその校訂本文を掲出する。

〔第四函　第十八號　第二十七紙〕

〔栄〕華此□自今盛契
□万春遥久栄栄幸万
千唯匪久定傅大麓
〔羽〕林情

【校訂本文】

栄華契万春

1 栄華此□自今盛
2 **契□万春**遥久栄
3 栄幸万千唯匪久
4 定傅大麓羽林情

第十八號第二七紙は、端作と官署を闕としている。そこで、詩の語句を手掛かりとし、詩題の推定を行いたい。当該詩は、用いられている語句に先の二首との重複が見られる。これにより、詩題が「栄華契万春」である可能性がある。まず、押韻について確認する。前聯では、詩題の五文字が全て詠み込まれていることを確認出来る。押韻の文字は、下平声庚韻の「栄」と下平声清韻の「情」である。庚韻と清韻は同用出来る為、詩中に用いられている韻字は一致する。この韻字は先の二首と異なる。だが、韻字の指定は「題中取韻」であり、詩題の平声の文

字を用いればよく、当該詩は詩題の「栄」を韻字としている為、その点で問題はない。形式面では、推定した詩題との間に祖語が生じていないことを確認出来た。そこで、内容面を確認する。この詩においても第四句に「羽林」と記されており、詩会を主宰する家実を寿いでいる。詩会の時期と合わせても無地¥淳はなく、本詩懐紙の詩題を「栄華契万春」であると考える。

本節では、詩題を持たない懐紙について、その詩題の推定を行った。残された詩の本文が句題詩と想定される場合、首聯の用字、頷聯と頸聯の破題に共通する内容、他の作品との比較から詩題を推定出来る。これは七言絶句と想定される懐紙においても有効であった。また無題詩と想定される場合、勒韻が手掛かりになる。他の無題詩の懐紙との韻字の比較や、本文の内容から詩題を推定することが可能である。

三　前半のみ或は後半のみをもつ懐紙の同定

本節では、本文が裁断された断簡同士を同定し、一紙に復元したい。作詩の際、韻字や平仄の規則も厳格に守られていた。その為、復元した作品において、平仄の面も確認する必要がある。韻字・平仄という形式面と詩本文の表現という二方面から、懐紙同士の同定について検討する。前節同様、句題詩の懐紙から考える。最初に、第四函第十五號第二紙、同第四紙、同第六紙を掲出する。

〔第四函　第十五號　第六紙〕

早春同賦歌管伴鶯声詩　〈便用**声**字〉

〔第四函　第十五號　第四紙〕

太皇太后宮権大進大江匡範

有歌有管催春興即伴
林鶯及数**声**出谷相和

「

〔第四函　第十五號　第二紙〕

」

程嬌思塵與韓娥動囀
聞鄰令向子**驚**昔作蓬
莱趍拜客今為沫泗

滞沈**生**

第六紙は詩の端作のみ、第四紙には官署と第一句から第三句に該当する部分、第六紙には第四句末字以降に該当する部分が残されている。

まず、三紙について韻字を確認しよう。第二紙の端作に「便用声字（声字を便用する）」とある。これにより、韻字は下平声清韻の「声」であるとわかる。なお、「声」は詩題に含まれている為、第二句末で用いる必要がある。これを念頭に各紙の韻字を見る。第二句末を含む第四紙の押韻の文字に「声」が用いられている。また、第六紙に見える押韻の文字は「程」「驚」「生」である。「程」は「声」と同じ下平声清韻、「驚」と「生」は清韻と同用出来る下平声庚韻である為、韻は一致する。

次に詩の内容を検討する。分析する為に三紙を繋げる必要がある為、三紙を繋げたものを上段に、下段にその平仄を掲出する。（平仄は、平声を○、仄声を●、韻字を◎で示す。以下同。）

【校訂本文】

早春同賦**歌管伴鶯声**詩　〈便得**声**字〉　太皇太后宮権大進大江匡範

1 有歌有管催春興
2 即伴林鶯及数**声**
3 出谷相和□□□
4 □□□□□□**程**
5 嬌思塵與韓娥動
6 囀聞鄰令向子**驚**
7 昔作蓬莱趁拜客
8 今為沫泗滞沈**生**

【平仄】

●○●●○○○
●●○○●●◎
●●○○□□□
□□□□□□◎
○○○●○○●
●●○○○●◎
●●○○○●●
●●○○○●●
○○●●●○◎

右の三紙については既に山崎誠氏がその同定を指摘している。ただ、内容にはあまり言及されておらず、考察の余地がある。

まず、首聯をみる。首聯には詩題「歌管伴鶯声」の五文字が全て用いられている。詩題に含まれている「歌管」は双貫語である。その為、頷聯と頸聯では各句が「歌伴鶯声」或は「管伴鶯声」の破題について検討する。頷聯は第二紙と第三紙の間が闕である為、破題等を考察する

ことが難しい。ただ、第三句「出谷」は、春になると谷から出てくる鳥、鶯を表すと考える一〇。続けて頸聯の内容に移る。第五句上二字「嬌思」は、「嬌」が「嬌声」で鳴く「鶯」を指し、詩題の「鶯声」を表す。同句下五字「塵與韓娥動」は「伴歌」を表す。「韓娥」とは、その美しい歌声が梁の塵を動かしたという『列子』の故事一一を踏まえている。それと対をなす第六句上二字「囀聞」の「囀」は「鶯」の囀りであり、それを「聞」くという表現から「鶯声」を表していると考える。同句下五字「向子」とは、晋の向秀の事である。隣から聞こえてくる笛の音に感じ入り、『文選』巻十六の「思旧賦」を作ったという故事を踏まえている。この故事は、「思旧賦」の序に載る他、『蒙求』に「向子聞笛」という標題で収められている一二。頸聯では、双貫語を対句としつつ、第五句で「鶯声伴歌」、第六句で「鶯声伴管」を破題している。これにより、韻字やその表現からこの三紙が元は一紙であったと考える。

当該の三紙が間に他紙を挟んで繋げられた背景に、『猪隈関白記』古写本本文の成立があると考える。三紙の紙背には、『猪隈関白記』古写本の内、建永元年（一二〇六）十月一日条～六日条の記事が記されている。この部分は第二紙に記された三日条に続けて、三日条の裏書が後に増補されている。この増補部分が現在の第三紙である。また、次の五日条を記した第四紙の後に五日条の裏書が後に増補されており、現在の第五紙となっている。そして、六日条を記した第六紙が続く。つまり、日記本文に裏書であった部分が間に差し挟むようにして増補されているのである。即ち、一日条を記した第一紙の後に続く第二紙が裁断されて間に裏書が挟まれたことでは、もとは第二紙であった部分が第四紙、第六紙になってしまったということになるだろう。この点からも、当該の三紙がもとは一紙であったと指摘出来る。続いて二紙に裁断された詩懐紙の一紙への復元を行う。第四函第二十號第三十八紙と同函同號第二十六紙を本文の字配りのまま掲出する。

〔第四函　第二十號　第三十八紙〕

三月盡日同賦惜春山路閒各分一字應教詩〈探得**花**字〉

散位平知基

□光被惜幾煙霞山路之

□爭得**遮**遠岫和風胸底

「

〔第四函　第二十號　第二十六紙〕

」

澗戸馴帰鳥暫訪洞門□

□**華**豈只慈恩参月盡労□
　悵望興家**々**

第三十八紙は、建仁三年（一二〇三）三月二十五日の詩会において提出された詩である[三]。韻字や内容解釈を通じて、この二紙の同定を行いたい。まず、韻字を確認する。第三十八紙の端作に「探得花字（探りて花字を得たり）」とあり、本詩の韻字は下平声麻韻の「花」だとわかる。第二十六紙の押韻の文字は「遮」、第三十八紙の押韻の文字は「華」と「家」である。この三字は、いずれも下平声麻韻である為、指定された韻字と韻は一致する。また、第三十八紙の尾聯に当たる部分に「参月尽」とある。これは、詩懐紙を提出した詩会の時期を述べており、端作と一致する。韻や作詩時期の一致により二紙が一紙であった可能性は高い。そこで、その可能性を更に高める為、二紙を繋げて詩の内容解釈をする。次に、二紙を繋げたものを上段に、その平仄を下段に掲出する。

【校訂本文】

三月盡日同賦**惜春山路閒**各分一字應教詩〈探得**花**字〉散位平知基

1 □光被惜幾煙霞
2 山路之□爭得**遮**
3 遠岫和風胸底□
（第四句闕）
5 □□澗戸馴帰鳥
6 暫訪洞門□□**華**
7 豈只慈恩参月盡
8 労□悵望興家**々**

【平仄】

□○●●●○○
○●○□○●◎
●●○○○●□
（第四句闕）
□□●●○○●
●●○○□□◎
●●○○○●●
●□●○○○◎

二紙の同定では、第三十八紙に含まれる頸聯において、詩題「惜春山路閒（春を惜しむ山路の閒）」という詩題を破題しているかを検討する。頸聯においても多々闕字がある為、特に詩題の実字「春」「山路」を第五句中二字「澗戸」と、それと対をなす「洞門」は、いずれも山中の家の意である。第六句上二字に「暫訪」とあるように、そこに至るまでには山路を通る必要がある。これにより、第六句上四字「暫訪洞

門」が詩題の「山路間」を言い換えると考える。また、対をなす第五句「澗戸」も「山路」を言い換えていると考える。続く第五句下三字「馴帰鳥」を見る。「帰鳥」とは、春の終わると谷に帰っていく鳥、鶯のことを指し、春が過ぎることを惜しむ表現である。これにより、詩題の「惜春」を示す。第五句の「澗戸」と「帰鳥」の表現は、『和漢朗詠集』（巻下、雑・山家 559、紀斉名）「山路日暮、満耳者樵歌牧笛之声。澗戸鳥帰、遮眼者竹煙松霧之色。（山路に日暮れぬ、耳に満てる者は樵歌牧笛の声、澗戸に鳥帰る、眼を遮る者は竹煙松霧の色。）」を踏まえた表現である。「帰鳥」については、『本朝無題詩』（巻四、惜残春、惟宗孝言）等にも、その用例が見える。第六句下三字は「花」と確認出来るのみだが、これもまた詩題の「春」を踏まえていると考える。頸聯は闕が間々存在し、全体と詩題の関係の検討は困難である。だが、第五句では実字を含む「山路」と「惜春」が敷衍されていた。また、第六句においても「山路間」と「春」という詩題の実字が敷衍されていると確認出来た。これにより、頸聯では、詩題が破題されていると考える。最後に尾聯の表現について述べる。先に尾聯の「参月尽」と端作との関わりを指摘した。この「参月尽」という表現は、同時に『白氏文集』巻十六（0990）「酬元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄」の「悵望慈恩三月尽、紫桐花落鳥関々。（悵望す慈恩三月尽、紫桐花落ちて鳥関々。）」を踏まえている。押韻や詩会の時期の一致、詩の表現から、二紙が元は一紙であったと考える。

これまで見てきた二首は、詩の表現を中心に同定を行った。七言律詩の句題詩の懐紙では、本文を六行三字で記すことが一般的だが、稀に異なる懐紙も存在する[一四]。そうした形式面から考察する必要がある二紙として第四函第十八號第六十一紙と同函同號第五十七紙を掲出する。

〔第四函 第十八號 第六十一紙〕

初冬同賦**燈下有琴詩**一首〈**題中取韻**〉

大江匡範

寒**燈**万点初冬夜
携去無他**琴**與**詩**
背壁撫来魚躍曲
挙窓呈得鳳文**詞**
庭明未尽和松響
綿漏尚挑滴藻**思**

「

〔第四函 第十八號 第五十七紙〕

不耐元来当座事
毎人飛筆独告**遺**

第六一紙は尾聯を闕とし、第五七紙は尾聯のみを有する懐紙である。この二紙の特徴は、一句を一行で記す点である。本詩懐紙では、勒韻で作詩する無題詩の懐紙に多く見られる書き方である。この書き方には、韻字を守って作詩したことを示す目的があると考える。本詩懐紙の場合はどうかという点も検討する必要がある。ではまず韻字を確認しよう。第六一紙の端作より、韻字は上平声之韻の「詩」である。六一紙の押韻の文字は「詞」と「思」、第五七紙は「遺」である。「詞」と「思」は、「詩」と同じ上平声之韻、「遺」は之韻と同用可能な上平声脂韻である為、韻は一致している。次いで、平仄を確認する。当該の二紙の場合、尾聯の前で切れている為、第六句と第七句との間で粘法が正しくなされているかを確認する必要がある。そこで、二紙を繋げた本文を上段に、その平仄を下段に掲出する。

【校訂本文】

初冬同賦**燈下有琴詩**一首〈題中取韻〉　大江匡範

1 寒燈万点初冬夜
2 携去無他琴與**詩**
3 背壁撫来魚躍曲
4 挙窓呈得鳳文**詞**
5 庭明未尽和松響
6 綿漏尚挑滴藻**思**
7 不耐元来当座事
8 毎人飛筆独告**遺**

【平仄】

○○●●○○●
○●○○○●◎
●●●○○●●
○○○●○○◎
○○●●○○●
○●○○●●◎
○●○○○●●
●○○●●●◎

下段に示した通り、第六句と第七句では、第二、第四、第六字の平仄が全て一致しており、粘法にも矛盾がない。押韻も含め、形式面では二紙が一紙であった可能性は高いと考える。

では、内容の面から二紙の同定を検討する。第五七紙に含まれる尾聯の内容を見よう。第七句下三字「当座事（当座の事）」とある。「当座」

とは、詩題を当日の詩会の席で定めることである。当然、韻字もその場で決められる。当該詩は、当座であった為にそれを守ったことを明示する必要があったのではないか。先に、当該詩の書き方が無題詩の懐紙に多く見られることを指摘した。無題詩は、当該詩の状況と同じく当座にて作られる。以上より、尾聯の内容は作品全体と関連しているといえる。そこで、この二紙が元は一紙であったと考える。続いて、第四函第二十號第六十紙と第四函第二十號第二十九紙を見る。

〔第四函　第二十號　第六十紙〕

春日同賦**燕至自洲渚**応教一首　〈以**春**為韻〉

大学頭菅原在茂

十飛燕至自何處洲渚
之間慰翅**頻**無伴鳧鷺
巣幕夕有厭鸚鵡莅梁
辰青丘退去依知社玄

〔第四函　第二十號　第二十九紙〕

「
」

沚抛来為嚮**春**可(賞)□
禽諳節候往還有定不
違**旬**

この二紙では、まず押韻を確認する。第六十紙の端作に「以春為韻（春を以て韻と為）」とあることから、上平声諄韻の「春」が韻字であるとわかる。押韻の文字は、第六十紙に「頻」、「辰」、第二九紙に「春」「旬」が見える。「頻」、「辰」は上平声真韻、「旬」は、「春」と同じ上平声諄韻である為、押韻は一致する。また、第二十九紙に「春」とあるのは、端作に記された韻字であると同時に、季節も一致することになる。これにより、形式面においては、二紙の一致を確認出来た。次に、内容面での考察に移る。詩の本文を見、考察する必要がある為、二紙を繋げた形で掲出する。今回はさほど関連はないが、上段に校訂本文、下段にその平仄を示す。

【校訂本文】

春日同賦**燕至自洲渚**応教一首　〈以**春**為韻〉大学頭菅原在茂

1 十飛燕至自何處　●○○●●○●

2 洲渚之間慰翃**頻**　○●○○●●◎

3 無伴鳧鷖巣幕夕　○●○○○●●

4 有厭鸚鵡莅梁**辰**　●●○●●○◎

5 青丘退去依知社　○○●●○○●

6 玄沚抛来為嚮**春**　○●○○○●◎

7 可賞□禽諳節候　●●□○○●●

8 往還有定不違**旬**　●○●●●○◎

【平仄】

首聯では、詩題の五文字が全て用いられていることを確認出来る。当該の二紙の場合、頸聯の二字目から後半を有する第二九紙と繋がっている。そこで、頷聯と頸聯で詩題が破題されているかを中心に検討したい。当該詩の詩題「燕至自洲渚」は、「洲」「渚」という双貫語を含む。これを詠み分けているかに注意しつつ頷聯と頸聯を解釈する。特に、二紙は頸聯を跨いでいる為、頸聯の表現が詩題を敷衍しているかに注意する。

頷聯では、第三句上四字「無伴鳧鷖」の「鳧鷖」とは、『毛詩』「鳧鷖」の「鳧鷖在渚、公尸来燕来処。（鳧鷖渚に在り、公尸来たり燕し来り処る。）」を踏まえた表現である。これにより、詩題の「渚」を言い換える。また、上二字「無伴」は、渚より「鳧鷖」を伴うことなく至る、即ち「至自」を表すと考える。それと対偶関係にある第四句上四字「有厭鸚鵡」の「鸚鵡」とは、「鸚鵡洲」の事である。『白氏文集』巻十（0498）「夜聞歌者」の「夜泊鸚鵡洲、秋江月澄徹。（夜泊す鸚鵡洲、秋江月澄徹す。）」等を踏まえた表現である。即ち、詩題の「洲」を置言い換える。また、上二字「有厭」で、「洲」の「鸚鵡」を厭い、そこからやって来るという意で、詩題の「至自」を表している。続けて、各句下三字の表現を見よう。第三句下三字では、「巣幕夕」と、その対をなす第四句下二字「莅梁」は、いずれも燕の営巣を意味する。これにより、詩題の「燕」を言い換える。このように頷聯では、第三句にて「燕至自渚」、第四句にて「燕至自洲」をそれぞれ言い換え、一聯で詩題を破題していると考える。

では頸聯を見る。第五句上四字「青丘退去」の「青丘」とは、長洲の異称である。これにより詩題の「洲」を言い換える。「退去」は、「洲」から去ってやって来るという意で用いられており、詩題の「自至」を言い換える。その対偶関係にある第六句上四字「玄沚抛来」の「玄沚」とは詩題の「渚」を表す。「抛来」は、「渚」を抛ってやって来るという意で用いられており、「至自」を表すと考える。続けて各句の下三字について検討する。第五句下三字「依知社」の「知社」は、燕が春の訪れを知るという意である。『和漢朗詠集』(巻上、秋・九日261、李端)に「燕知社日辞巣去、菊為重陽冒雨開。(燕は社日を知って巣を辞して去る、菊は重陽の為めに雨を冒して開く。)」等を踏まえたひょうげんである。これにより、詩題の「燕」を言い換える。これと対句となる「為嚮**春**」は、「嚮**春**」をする鳥、即ち、詩題の「燕」を言い換える。このように、頸聯では、第五句にて「燕至自洲」、第六句にて「燕至自渚」をそれぞれ言い換え、聯全体で詩題を破題していることを確認出来た。特に頸聯は、二紙を跨ぐ箇所だが、双貫語「洲」と「渚」を対句とし、詩題を敷衍していることを確認した。最後に尾聯を見る。尾聯は、詩題と関連する内容を持つことがある。当該詩では、第七句に「禽」という言葉が見える。これは、燕等の鳥の意で、詩題と関連を持つと言えよう。以上の検討より、当該の二紙が元は一紙であったと考える。続いて句題詩の復元を進める。次に掲げる懐紙は、三紙以上に裁断された内のそれぞれ一部を有すると考える懐紙である。第四函第二三號第六紙と、同函同號第四紙を本文の字配りのまま掲出する。

〔第四函 第二三號 第六紙〕

歳暮同賦詩友待春景各分一字詩　〈探得**交**字〉

前伊豆守平時兼

待春景至言詩友吟詠

「

〔第四函 第二三號 第四紙〕

」

慕和風報伴来**嘲**万歳

歓遊昌箇裏任他漢日

苦封**茅**

右に掲げた懐紙は、端作と第二句二字目までを有する第六紙と、まず、押韻を確認する。第六句以降を有する第四紙である。まず、押韻を確認する。第六紙の端作に「探得交字(探りて交字を得たり)」とあり、下平声肴韻の「交」を韻字とする。押韻の文字は、第四紙の「嘲」

と「茅」である。この二字は、いずれも下平声肴韻である為、韻は一致している。二紙が形式面からは、二紙である可能緒性がある。次に、詩の内容から二紙の同定について検討したい。そこで、次に二紙を繋げたものを掲出する。上段に校訂本文、下段にその平仄を示す。

【校訂本文】

歳暮同賦**詩友待春景**各分一字詩〈探得**交**字〉　　前伊豆守平時兼

1 待春景至言詩友
2 吟詠□□□□□
（第三、四、五句闕）
6 慕和風報伴来**嘲**
7 万歳歓遊昌箇裏
8 任他漢日苦封**茅**

【平仄】

●○●●○○●
○●□□□□□
（第三、四、五句闕）
●○○●●○◎
●●○○○●●
○○●●●○◎

次に、頸聯に当たる第六句が詩題「詩友待春景」を破題しているかを検討する。第六句上四字「慕和風報」の「和風」は春に吹く穏やかな風のことを言う。これは、『和漢朗詠集』（巻上、春・早春 010、白居易）「先遣和風報消息、続教啼鳥説来由。（先づ和風をして消息を報ぜしむ、続いで啼鳥をして来由を説かしむ。）」等を典拠・用例とする語句である。これにより、詩題の「春景」を表す。この第六句上四字では、それを「慕」うとあるので、四字全体で「待春景」を言い換えと考える。続く下三字「伴来嘲」は、「伴」が詩会の場に伴う人、即ち「友」を表現する。また、「嘲」とは、詩を作ることを意味する。これは『白氏文集』巻二十五（2352）「留題郡齋」に「吟山歌水嘲風月、便是三年官満時。（山に吟じ水に歌ひて風月を嘲る、便ち是れ三年官満つる時。）」等を踏まえた表現である。これにより、下三字「伴来嘲」は、詩題の「詩友」を言い換える。以上の考察から、頸聯の第六句では、詩題が破題されていると考える。途中に闕はあるが、第四函第二三號第六紙と同函同號第四紙は、もとは一紙であったという強い可能性を指摘出来るだろう。

ここまで、句題詩の作品の一部と考えられる懐紙の復元を、可能な限り行った。二紙に裁断された懐紙同士の同定は、無題詩においても可能である。そこで、ここからは無題詩の本文と考えられる詩懐紙において、懐紙同士を同定し、復元を行いたい。次に、端作を有する第四函第十八號第五紙と、無題詩の本文の後半部分を有すると推定出来る同函第二十號 第四十四紙を次に掲出する。

〔第四函 第十八號 第五紙〕

冬日於清水寺上方即事詩〈勒〉兵部大輔時宗

従昔得名清水寺箇中
□舎両参間往聞時雨
「
〔第四函　第二十號　第四十四紙〕
」
孤夢覚立向夕一念
□止住幽居渓北地利
生霊跡路東山〈観音霊跡、利生殊勝。故云。〉
□参仏殿礼千手続望
「

まず、押韻を確認する。第五紙の端作には、「勒」とのみ記されている為、指定された韻字やその順は不明である。そこで、各偶数句末の押韻の文字を確認する。第五紙の押韻の文字は「間」、後半の二十號第四十四紙の押韻の文字は「山」である。この二字は、いずれも上平声山韻であるので、韻は一致する。続いて、平仄を確認する。粘法を見る為、二紙を繋げたものを上段に、その平仄を下段に掲出する。

【校訂本文】
冬日於清水寺上方即事詩〈勒〉兵部大輔時宗
1 従昔得名清水寺
2 箇中□舎両参間
3 往聞時雨孤夢覚
4 立向夕陽一念□
5 止住幽居渓北地
6 利生霊跡路東山〈観音霊跡、利生殊勝。故云。〉
7 □参仏殿礼千手
8 続望　「

【平仄】
○●●○○●●
●○□●●○◎
●○○●○○●
●●●○●●□
●●○○○●●
●○○●○◎
□○●●●○●
●○□□□□□

校訂本文の第三句第五字以降は、第四函第二十號第四十四紙である。平仄の粘法を確認する。頷聯に当たる第二句第六字と頸聯に当たる第三句の第六字は、いずれも平声である。一か所ではあるが、粘法にも矛盾はない。韻と平仄という形式面からは、二紙が一紙である可能性が高いと考える。

そこで、詩の内容を検討し二紙を同定する。詩題に「清水寺上方即事」とある。即ち、当該詩は清水寺で催された詩会において作作られたとわかる。清水寺は京の東山に在し、その本尊は十一面千手観世音菩薩である。無題詩の構成方法に定まったものはないが、詩題に即した内容で作詩される。そこで、第四十四紙の内容から、詩題との繋がりを検討しよう。注を含め、第六句全体「利生霊跡路東山〈観音霊跡、利生殊勝。故云。〉」の内容をみる。下三字「路東山」とあり、また注に「観音霊跡」とあるのに注目する。「東山」とは、詩会の催された地、清水寺のことを指す。また、注の「観音霊跡」は、その地にてご利益をもたらす仏の名を具体的に述べる。これもまた、詩会の場に関する記述であろう。これらの表現は、先に述べた清水寺の状況と一致する。それを元に、第七句下二字「千手」が表現するものを考えると、清水寺の本尊「千手観世音菩薩」のことだと言える。詩中の語句の分析から、第四函第二十號第四十四紙の表現は、第四函第十八號第五紙の端作における「清水寺」のことと関連づけられていると確認出来た。そこで、当該の二紙がもとは一紙であったと考える。

ここまで、左右に裁断された懐紙同士の同定をし、その復元を可能な限り行った。句題詩においては、その構成方法や押韻、平仄の規則が手掛かりとなり、復元することが可能である。無題詩の場合も、勒韻という韻字の指定や平仄、詩題と詩本文の関わりから懐紙を同定し、復元することが可能である。

四　他の懐紙作法書に見える『猪隈関白記紙背詩懐紙』

これまで、『猪隈関白記紙背詩懐紙』全体を把握する為、詩懐紙の断簡同士を同定し、一紙に復元した。『猪隈関白記』古写本の紙背全体を見渡すと、一部に白紙の部分が見とめられる。その中には単に白紙ではなく、墨の跡は見えるものの、本文を判読出来ない箇所が存在する。これは、後に詩懐紙の作品を鑑賞する為に、相剥ぎされたことで生じたと考える。また、『猪隈関白記』自体が断簡となり、その紙背に詩懐紙が確認出来る例もある。『猪隈関白記紙背詩懐紙』全体の把握においては、このような他に存在する詩懐紙についても収集する必要がある。古写本から相剥ぎされた詩懐紙として、陽明文庫蔵「源兼定詩懐紙」が挙げられる。まず、その翻字を次に掲出する。

〔木工頭源兼定詩懐紙（一般文書目録九二〇〇二）〕

夏日同賦佳客対泉石各

分一字詩〈探得情／字〉

木工頭源兼定

佳客云来成宴会対
泉対石興相兼青
苔色遍儲盃為乗□
瀬声幽投転□□□
袖舒姑絃調□□□
孫楚枕欹情□□□□
閑中友莫咲此時□□□

現在、この詩懐紙は軸装されたうえで陽明文庫に所蔵されている。尾上陽介氏は、この詩懐紙紙背に見える文字の残画に注目された[一五]。そして陽明文庫蔵『猪隈関白記』古写本断簡の内、承元三年六月九日前欠から同月十四日後欠の一紙と当該の詩懐紙とが表裏の関係であったことを指摘された。先に『猪隈関白記紙背詩懐紙』が翻字された際、これに連なる古写本断簡紙背の詩懐紙も補遺として収められている。つまり、当該の詩懐紙も『猪隈関白記紙背詩懐紙』の一つとして扱う必要があるだろう。なお、詩題「佳客対泉石」を有する懐紙は現在のところ、他に見つかってはいない。当該の詩懐紙のように何らかの理由により古写本から剥された詩懐紙は、今後も見つかる可能性はあると考える。

また、流出した詩懐紙自体は見つからずとも、その本文が書写され、他の作品の中に収録されている可能性もある。それが、大阪市立大学森文庫蔵『懐紙書様の事』（天文十八年写、森繁夫旧蔵）に収録された三首である。まず、その作品の翻字を掲出する。

◆「詩歌相逢会之事」の部（『懐紙書様の事』）所収詩

a　源兼定詩懐紙

夏日同賦詩酒唯催興一首〈以情／為韻〉

木工頭源兼定

断腸元自為詩酒宜々
此時催興成六義賦言

旡飽思三遅楽飲折籌情
玉篇吟詠忘憂際金面
頎来動感程風月
招引客携文携管
絶他営

b　平親輔詩懐紙

五月五日同賦招賓端午日一首
〈以来為／韻〉平親輔

良節云迎端午日招賓
此席感相催綺羅誘引
俗蘭處冠盍拘引懸芬
臺百草蹋時鳴佩向五
糸餝夕抂軒来秋心先
夏更無散宿望独疲
栄未開

c　大江匡範詩懐紙

江家懐帋

早夏同賦夏浅不忘春
詩〈以情／為韻〉
太皇大后宮権大進江匡範
○○○○○○○○

（以下、字配りを示す圏発のみ）

まず、aを見る。aは、『猪隈関白記』断簡〈承元三年四～六月〉の紙背に見える大江匡範、平時兼の作品とほぼ同内容の端作を有する。大江匡範の作品の端作には、「夏日同賦詩酒唯催興応教一首〈以情／為韻〉」とある。詩題と韻字の一致より、aは二紙と同じ詩会にて提出された作品だと考える。なおaの本文は、宮内庁書陵部蔵『詩懐紙草』（寛政六年二月、柳原紀光写）にも収められている。書写されたその本文に異同はない。

次に、bを見る。bは、第四函第二一號第九紙の大江匡範の作品と端作の内容が一致する。詩題と韻字の一致より、bについてもまた、詩題と韻字が一致しており、同じ詩会における作品と考える。cは、「江家懐帋」の項において、大江家の詩懐紙の例として、端作と字配りを示す圏発のみが記されている。この端作は、第四函第十五號第三三紙の平時兼の作品と一致する。詩題と韻字の一致から、cと時兼の詩についてもまた、同じ詩会にて提出された作品と考える。

この三紙が掲載された『懐紙書様の事』は、懐紙の作法について、主に和歌懐紙に関する事項を記している。懐紙の作法に関する資料の多くは、和歌懐紙の書き方のみを記述する。詩懐紙の例を載せている本書は、当時の詩懐紙の作法を知る上でも貴重な資料と言えよう。また、その中で、『猪隈関白記紙背詩懐紙』が取り上げられていることを見過ごすことは出来ない。詩懐紙の作法を知るうえで、重要な資料であったことを示していると考える。

おわりに

本章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』全体像を把握する為に、断簡となった懐紙を同定し、句題詩と無題詩の双方からその復元を行った。対象となる詩懐紙の形態は古写本の料紙である為、様々である。その中で、詩題を闕とするもの、本文を途中まで有するものに分け、その僚紙を検討した。　まず詩題を持たない懐紙の詩題を検討する場合、明確な構成方法をもつ句題詩ともたない無題詩では、その方法が自ずと異なる。句題詩ならば、首聯の題目が守られているかの確認や、頷聯、頸聯の表現をもとに詩題となる懐紙の同定、或は詩題の推定を行うことが可能である。一方、無題詩ならば、作詩の際に詩会の出席者全員が同じ韻字を同じ順で用いて詩を作る勒韻を元に同じ詩会の出席者を検討することで、詩題を推定できる。また、この方法は、詩の本文の一部を持つ懐紙同士を同定する際にも有効である。句題詩では、前半の詩懐紙の端作と後半の頷聯、頸聯における破題等の表現の一致が、懐紙同士の同定において重要である。一方、無題詩では、勒韻として定められた韻字の一致や、その内容から一致を確認することが出来る。

また、猪隈関白記紙背詩懐紙の一つと考えられる詩の本文を有する懐紙作法書も存在する。断簡同士の同定や、詩題の推定と共に、こうした作品にも目を配ることが、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の復元には必要である。同時に、その受容を考える意味でも、こうした把握は必要であると考える。

一 以下、『百二十詠』所収の詩句に関しては、山崎明、ブライアン・スタニンガー「百二十詠詩注校本―本邦伝存李嶠雑詠注―」（『斯道文庫論集』第五十輯、二〇一七年）を参照。

二 『古筆手鑑大成』（第十二巻、角川書店、一九九三年）を参照。

三 本間洋一校注『歌論歌学集成別巻二　文鳳抄』（三弥井書店、二〇〇一年）、同「院政期の漢詩序説（六）―忠通とその時代―」（『北陸古典研究』第三〇号、二〇一五年）。

四 以下、『文鳳抄』所収の詩句に関しては、注三書を参照。

五 以下、『類聚句題抄』所収の詩句に関しては、本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、二〇一〇年）を参照。

六 以下、『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和歌文学大系47　和漢朗詠集・新撰朗詠集』（明治書院、二〇一一年）を参照。

七 以下、『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、本間洋一『本朝無題詩全注釈』（一～三、新典社、一九九二～一九九四年）を参照。

八 〔猪隈関白記、建久八年一月六日条〕密々講詩、題云、栄華契万春、〈題中、絶句〉、大学頭在茂朝臣所出也、依年首也。

九 佐藤道生「四韻と絶句―『源氏物語』乙女巻補注」（『句題詩論考―王朝漢詩とは何ぞや』、勉誠出版、二〇一六年、初出二〇一四年）。

一〇 鶯の表現については、渡辺秀夫「谷の鶯・歌と詩と―〈典拠〉をめぐって―」（『中古文学』第二一号、一九九七年）参照。

一一 〔列子、湯問〕秦青顧謂其友曰、昔韓娥東之齊。匱糧、過雍門、鬻歌假食。既去而餘音繞梁欒、三日不絶。左右以、其人弗去。

一二 〔文選巻十六、思旧賦、向秀〕隣人有吹笛者、発声寥亮。追思曩昔遊宴好、感音而歎。故作賦云。同、『蒙求』（117向子聞笛）

一三 『猪隈関白記』建仁三年年三月二十九日条参照。

一四 『猪隈関白記紙背詩懐紙』の懐紙の書き方については、堀川貴司氏が詳細に考察されている。その中で、大江匡範は六行三字を守らずに書いている場合があることを指摘している。（「詩懐紙通観」『詩のかたち・詩のこころ　中世日本漢文学研究』若草書房、二〇〇六年、初出二〇〇三年）。

一五 尾上陽介「朝廷を支えた近衛家―歴代当主と家司たち（『兵範記』紙背文書やその他の断簡からの発見」）（『近衛家名宝からたどる宮廷文化史　陽明文庫が伝える千年のみやび』笠間書院、二〇一六年）。

〔表〕　左右を裁断された詩懐紙

函	號	本文	種類	韻字	廣韻	作者
14	1	端作有	句題詩	**粧**	下平・陽	不明
14	10	端作、前半一行有	句題詩	**言**	上平・元	大江周房
14	21	本文後半六行有	不明	**勒**（明・晴・声・情）	下平・清	不明
14	23	端作、官署闕	無題詩	**勒**（丹・寒・蘭・端・残・闌）	上平・寒	不明
14	24	末三字闕	句題詩	**晴**・清・声	下平・清	大江匡範
15	1	端作有	句題詩	声	下平・清	不明
15	2	後半三行三字有	不明	程・驚・生	下平・庚、清	不明
15	3	端作、前半二行有	句題詩	**音**・禁	下平・侵	平時宗
15	4	官署、前半二行有	不明	声	下平・清	大江匡範
15	5	官署、前半一行有	不明	涼	下平・陽	平時兼
15	6	端作有	句題詩	**声**	下平・清	不明
15	12	末三字闕	句題詩	**粧**・芳・郷	下平・陽	菅原在高
15	19	後半一行闕	無題詩	**勒**（遊・流・舟・幽）	下平・尤、幽	平親輔
15	32	端作、官署闕	不明	涼・商・忘・長	下平・陽	不明
16	2	末1字闕	句題詩	**寒**・残・単	上平・寒	平時兼
16	7	端作闕	句題詩	**貞**・栄・程・情	下平・清	平親輔
17	12	端作一部闕（他、間々闕）	句題詩	紅・中・風・窮	上平・東	平時兼
17	14	末三字闕	句題詩	**春**・新・匂	上平・真、諄	大江匡範
17	17	端作闕（他、間々闕）	句題詩	**鶯**・声・情・名	下平・庚、清	大江匡範
17	18	端作闕（他、間々闕）	句題詩	鶯・瀛・鳴・情	下平・庚、清	源兼定
17	21	末三字闕	句題詩	**情**・声・程	下平・清	大江匡範
17	29	後半二行二字有	不明	春・旬	上平・諄	不明
17	40	端作闕	句題詩	遊・頭・俤・愁	下平・尤、侯	源兼定
17	44	端作闕	不明	匂・塵・春・身	下平・真、諄	大江匡範
17	45	端作・前半三行有	句題詩	**深**	下平・真、諄	大江周房
17	47	端作一部闕	不明	**勒**（頻・春・人・巡）	上平・真、諄	平親輔
18	2	末一字闕（他、間々闕）	句題詩	**疎**・余	上平・魚	大江周房
18	5	前半二行四字有	無題詩	**勒**（間）	上平・山	平時宗
18	9	後半四行三字有	不明	新・春・仁	上平・真、諄	不明
18	10	端作、前半五行有	句題詩	**廻**・催・隈	上平・灰、	源兼定
18	11	端作闕、官署残画有	不明	堪・南・三・覃	下平・談、覃	平親輔
18	13	後半四行三字有	不明	秋・楼・遊	下平・尤、侯	不明
18	20	後半一行三字有	不明	才	上平・咍	不明
18	21	末三字闕	句題詩	**山**・間・遠	上平・山	平親輔
18	25	端作闕	不明	般・寒・闌	上平・桓、寒	平親輔
18	27	後半三行三字有	不明	栄・情	下平・庚、清	不明
18	33	端作、前半二行有	句題詩	**家**	下平・麻	菅原義高
18	44	後半五行四字有	不明	**勒**（休）	上平・東	不明
18	45	端作、前半二行有	無題詩	**勒**（辰）	上平・真	大江匡範
18	50	後半一行三字有	不明	通・風・紅・功	上平・刪	不明
18	56	末三字闕	句題詩	還	下平・麻	平時宗
18	57	後半二行有	不明	**花**・斜・沙	上平・脂	不明
18	60	後半一行三字有	不明	遺	下平・侵	不明
18	61	端作、前半六行有	句題詩	音	上平・之	大江匡範
18	63	端作、前半二行有	無題詩	**勒**（休）	下平・尤	平時宗
19	1	末三字闕	句題詩	**情**・程・成	下平・清	大江周房
19	2	末1字闕	句題詩	**粧**・疆・芳	下平・陽	近衛兼基
19	3	末三字闕	句題詩	**粧**・陽・霜	下平・陽	菅原在高
19	17	末三字闕	句題詩	驚・程・晴・〔明〕	下平・耕、清	大江周房
19	21	末三字闕	句題詩	**心**・任・陰	下平・侵	平時宗
20	5	末三字闕	句題詩	**粧**・腸・芳	下平・陽	大江匡範
20	6	後半五行有	不明	程・情・鶯	下平・耕、清	不明
20	9	後半四行五字有	不明	程・声・鳴	下平・耕、清	不明

補	補	補	23	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22	22	22	22	22	22	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
16	8	1	42	22	8	6	5	4	2	21	19	16	15	14	9	7	4	3	62	61	60	58	55	51	50	44	38	37	33	26	22	20	19	15
前半五行有	末三字闕	端作一部闕	端作闕	後半五行有	後半一行三字有	端作、前半一行有	途中四行有	後半二行三字有	末三字有（皆有情）	端作闕	端作一部闕	端作、前半六行有	端作、前半三行有	途中一行有（八字）	後半四行二字有	端作、官署一部闕	後半四行有	末一字闕（他、間々闕）	端作、前半二行有	後半四行五字有	端作、前半四行有	端作有	末三字有（隔俗寰）	端作、前半四行有	後半二行三字有	途中五行有	端作、前半二行有	途中五行有	途中四行有	後半二行五字有	端作闕	端作有	後半途中二行有	端作闕
無題詩	句題詩	句題詩	不明	不明	不明	句題詩	不明	不明	不明	句題詩	句題詩	句題詩	句題詩	不明	不明	句題詩	不明	句題詩	句題詩	不明	句題詩	句題詩	不明	句題詩	不明	不明	句題詩	不明	不明	不明	不明	句題詩	不明	不明
勒（吟・林・音）	望・**霜**・郷	**成**・**傾**・**情**・**英**	情・声・程・名	填・邊・年	沈	**交**	心・禁・音	潮・茅	情	郷・望・腸・章	調・簫・遥	**晴**・程・行	**遊**	不明	鮮・年・仙	情・声・程・栄	流・秋・猷	春・辰・勻	**情**・声	人・勻・臣	**春**・頻・辰	遊	寰	**花**・霞	春・椿	山	**花**・遮	腸・霜・傍	望・光・行	花・家	**勒**（繁・園・軒・恩）	**春**	余	休・秋・幽・遊
下平・侵	下平・陽	下平・耕、清	下平・清	下平・先	下平・侵	下平・肴	下平・侵	下平・肴	下平・清	下平・陽	下平・蕭	下平・清	下平・尤	不明	下平・先、仙	下平・清、庚	下平・尤	上平・真、諄	下平・清	上平・真	上平・真、諄	下平・尤	上平・删	下平・麻	上平・諄	上平・山	下平・麻	下平・陽、唐	下平・陽、唐	下平・麻	上平・元、痕	上平・諄	上平・魚	下平・尤
大江周房	平時兼	平時兼	藤原敦尚	不明	不明	平時兼	不明	不明	不明	平親輔	大江周房	平時兼	平親輔	不明	不明	不明	不明	藤原敦〔尚〕	平親輔	不明	菅原在茂	不明	不明	菅原淳高	不明	不明	平知基	不明	不明	不明	平時宗	不明	不明	平親輔

［注］本文が左右に裁断された懐紙の内、端作の闕により詩題が完全に不明の懐紙も挙げた。先行研究において、詩題の推定されている懐紙の号数・紙数は網掛けで示した。闕字の残画を確認出来る懐紙は、二紙の同定対象としていない。本文の有や闕は懐紙本文の行数に従った。端作に記された韻字は、太字で示した。

〔付〕猪隈関白記紙背詩懐紙復元一覧

本章では、第一章、第二章において復元した詩懐紙を一覧にし、號の順に掲載する。なお、二紙の號数が異なる場合、端作の記された懐紙を有する號の数にて載せる。各詩冒頭の番号は紙数である。また、今回の考察の中で、復元出来なかった懐紙については、今後、僚紙が見つかる可能性を鑑み、章末に韻字により分類したものを掲出する。

第四函　第十四號

(21)

秋夜月前言詩〈勒〉

□□□□□□□
□□□□□□□明
千界有雪参秋暁
万里無雲一夜晴
露竹不言煙暗色
風槐遮莫雨乾声（落葉之雨雖／下、古竹之煙雖暗、天未太晴、地／表太潔。故云。）
南端嘯立今無興
想像庾楼潘室情

(23)

暮秋言志応　教詩〈勒〉

潘氏宋生知我思
無他近日労中丹
沈淪年舊頭徐老
四十秋帰心独寒
唯翫前鴻將后雁
不堪紫蕙又紅蘭
風雲気味興相切
景気蕭條感万端
夜臥香山鐘未報
暁過商嶺月西残
文賓酒客宴遊席
一詠一吟漏欲闌

第四函　第十五號

(6)
(4)
(2)

早春同賦歌管伴鶯声詩　〈便得声字〉

太皇太后宮権大進大江匡範

有歌有管催春興
即伴林鶯及数声
出谷相和□□□
□□□□□□程
嬌思塵與韓娥動
囀聞鄰令回子驚
昔作蓬莱趂拜客
今為沫泗滞沈生

(32)

文士各納涼

夏□終日興無彊
文士家々各納涼
詞苑月前迎素律
翰林風底属清商
読書窓舊衣還健
練筆床閑扇自忘
箇裏頌声吟詠久
君齢従此歳年長

第四函　第十八號

(5)、第二十號(44)

冬日於清水寺上方即事詩〈勒〉

兵部大輔時宗

従昔得名清水寺
箇中□舎両参間
往聞時雨孤夢覚
立向夕陽一念□

止住幽居渓北地
利生霊跡路東山〈観音霊跡、利生殊勝。故云。〉
□参仏殿礼千手
続望□□□□□

(10)、(20)

秋日同賦江湖景氣秋各分一字詩〈探得廻字〉

木工頭源兼定

江湖縁底眺望好
景氣屬秋興幾催
露白陶朱徐棹渡
風寒漁父頻歌廻
紫蘭漠々杭州裏
黄□□々呉郡隈
愁列詩筵愚暗士
此時可恥接高才

(27)

栄華契万春
栄華此□自今盛
契□万春遥久栄
栄幸万千唯匪久
定傳大麓□林情

(45)、(9)

冬日陪　書斎言志詩〈勒〉

太皇太后宮権大進江匡範

猗矣斯焉抛外事
各嘲風月翫良辰
士唯侍読従年舊
君□富才如日新
夢草頻驚空送夜

栄華尚少不期春
姓江今遇守文世
累代家門欲浴仁

(61)、(57)

初冬同賦燈下有琴詩一首〈題中取韻〉

大江匡範

寒燈万点初冬夜
携去無他琴與詩
背壁撫来魚躍曲
擧窓呈得鳳文詞
庭明未盡和松響
綿漏尚挑滴藻思
不耐元来当座事
毎人飛筆独告遺

(63)、(13)

秋日於山寺言志〈勒〉

兵部大輔平時宗

今出洛陽尋勝地
往来不絶暫難休
渓嵐遥過竹扉暁
山月独澄蕭寺秋
残漏響闌参面屋
半鐘声遠一階楼
長安城外寂寥境
終日引朋乗興遊

第四函　第二十號

(9)

聞鶯洛邑中

□□□緩二崤畔
妙管響通十室程

豊沛宴闌繁暁語
長安望極翫春声
庭梅桜樹旁匂處
戯艶交花頻遥鳴

(20)、第十七號(44)

春日同賦花色映臺榭詩〈以春為韻〉

太皇大后宮権大進大江匡範

紛々花色映何処
臺榭之間不秘匂
香柏紅桜籠粉艶
長楊翠柳積芳塵
燕姫舞袖旁廻雪
秦女簫聲剰調春
始自携文餘念少
心懸風月数寄身

(37)

寒叢在水辺
□□□□□□□
□□水辺動感腸
岸荻花□旁載雪
洲蘆葉悴被封霜
敗籣緑變沙痕下
老菊色衰潭面傍
景気蕭條何思苦
終朝携客□□□

(38)、(26)

三月盡日同賦惜春山路間各分一字應　教詩

〈探得花字〉

散位平知基

□光被惜幾煙霞

□

山路之　爭得遮
遠岫和風胸底□
□□□□□□□
□□
□□澗戸馴帰鳥
暫訪洞門　　華
□豈只慈恩三月盡
労　悵望興家々

(50)

栄華契万春
□□万葉羽林春
羽林遂可翫金鳳
博陸献齢亦大椿有注

(51)、(19)

春日同賦尋花至遠山応教一首〈題中取韻〉

散位菅原淳高

朝至遠山遲日斜
是斯遊放為尋花
隱倫問路欲望露
樵客伴行遂領霞
追嶺頭春蹤殆僻
□□□
趁巖腹雪歩弥賒
千程経過誰人倦
染著庾梅

(58)、第十七號(40)

秋夜同賦夜長催勝遊詩〈便用遊字〉

秋夜方長催感興
宜哉素律叶勝遊
東方遲曙会同足
北斗徐廻宴集頭

遅漏自然酣暢客
待鷄遮莫詠吟儔
英才連座争鋒席
思得此時屡無愁

(60)、第十七號(29)

春日同賦燕至自洲渚応教一首　〈以春為韻〉

大学頭菅原在茂

十飛燕至自何處
洲渚之間慰翅頻
無伴鳧鷖巣幕夕
有厭鸚鵡莅梁辰
青丘退去依知社
玄沚抛来為嚮春
可賞□禽諳節候
往還有定不違旬

(62)、(6)

春日同賦花下披経史一首　〈以情為韻〉

親輔

春花綻下披何帙
経史読来高引声
続記倩望張錦底
含章頻対曝紅程
紛粧映字鄭玄思
濃艶薫書班固情
稽古窓前梅樹□
□時終日翫歓鶯

第四函　第二十二號

(15)、(4)

夏日同賦対泉唯酌酒一首　〈以遊為韻〉

酌酒唯云催幾興
対泉終日與朋遊
樽前勧酔偏占召
座下□□静臥流
阮籍傾間消九夏
嵇康嗜處引参秋
数盃宴席独沈陸
散木恥名仰　帝猷

親輔

第四函　第二十三號

(6)、(4)

歳暮同賦詩友待春(景)各分一字詩〈探得交字〉

前伊豆守平時(兼)

待春景至言詩友
吟詠□□□□□
「　　」
慕和風報伴来嘲
万歳歓遊昌箇裏
任他漢日苦封茅

(42)

雨中有管絃

本自雨中感旁成
有絃有管動心情
山腰雲暗龍鱗曲
水面浪廻鶴操声
餘靄収来高調處
孤煙巻去急弾程
施霑斜脚似皇澤
見此独愁沈滞名

〈僚紙の判明しない懐紙〉

①詩題のみ

第四函　第十四號

(1)

九日同賦菊作言詩友応教一首　〈以粧為韻〉

第四函　第十五號

(1)

春日同賦歌管伴鶯声

②　東韻

第四函　第十八號

(44)

」

箇中此正通隔夜早
辞参伏暑逐朝忽報一
声風煙松葉密庭前
緑露草花開籬下紅多
歳携文雖接座言詩染
筆恥微功

③　真韻・諄韻

第四函　第二十號

(61)

」

興暮槐門地鳳韻聞闌
棘路人寵樹雨中嘶
鳥老羽林露底花落匂
前途万里望疲去独恥
陸沈愚昧臣

④　元韻

第四函　第十四號

(10)

秋夜同賦月下知方
術各分一字応　教詩一首　〈探得言字〉

大江周房

靈方仙術回知源月下

⑤ 刪韻

第四函 第十八號 (50)

「夕雖拘引遂送韶光空欲還

隔俗寰 (55) 第四函 第二十號

⑥ 先韻

第四函 第二十三號 (22)

「月砂庭沍偏省落花玉砌填遮眼芳菲開戸外馳望遥白撥簾辺玄冬迎後蕭條處生計独闌漸暮年

⑦ 仙韻

第四函 第二十二號 (9)

「粧遥迸映自千竿色当鮮芳艶凌青無礙露濃房交翠欲謝年西王母種其遮莫此處詫可口(仙)

⑧ 麻韻

第四函 第十八號 (33)

冬日同賦山家雪始降

応　教一首　〈題中取韻〉
散位菅原在高

新雪始降皆玉砂猗哉
冬気属山家竹楼纔
「
」

⑨陽韻

第四函　第十五號

(5)　詩　〈以涼為韻〉
前伊豆守平時兼

緑樹陰間移枕席詠吟
「
」

第四函　第二十號

(33)

似望微月林戸漸如翫
落花碧岫傍窓光且聚
鑪峯当　影弥遮往来樵
客行衣重寒色飄颻路更遐

⑩清韻

第四函　第二十二號

(16)　秋日同賦晴後望江山一首〈題中取韻〉
前伊豆守平時兼

江山本自望方成
何況箇中遠近晴
馳思沙村天潔暁
廻眸嶺徼霧開程
谿雲散処趁跡去
波月澄時乗興行
秋日遨遊驚視聴
野□□□□□□

第四函　第二十三號

(2)

皆有情

⑪ 尤・幽韻

第四函　第十五號

(19)

夏夜平等院即事勒〈**遊流舟**／**幽**〉

散位平親輔

暫辞華洛尋何処
宇県引群有勝遊
古寺晩望同浄聴
禅庭景気仰遺**流**
月前夢覚老僧牖
波上歌清漁客**舟**
一日往来頻乗興
□□□□□□〔**幽**〕

⑫ 侵韻

第四函　第十五號

(3)

夏日同賦避暑携絃(管)一首　〈以音為韻〉

兵部大輔平時宗

箇中避暑携絃管□
□惶来感巨禁孤竹

第四函　第十七號

(45)

三月盡同賦遠近春光盡詩一首　〈以深為韻〉

大江周房

春光遠近盡相惜々
此々中興味深咫尺隔(疎)
参伏節千程辞境九陽
「

第四函　第十八號

(60)

」

里憐霞否錦繡林中

□囀音

第四函　第二十三號

(5)、(8)

」

勝趣感情心池亭月(落)

光瑩鏡浪驛風涼韻□

金螢乱沙村挑燭影(雁)

過江舘繫書音嗜文

不怠累家士為愍送(年)

独陸沈

⑬　不明

第四函　第二十二號

(14)

遥吾馬泥短靴低帽

⑬　詩題闕

第四函　第十八號

(11)　**無題詩**（覃韻）

」

親輔

山寺春天遊宴行

此中引友感難堪

禅林桜艶旁留雪

仏閣梅花先望南

法性静観加静念

教文無二是無参

言詩絃管共催席

才拙風情独不覃

(25) **句題詩**（寒韻）

」　応教一首〈□□□韻〉　散位親輔

□深遠近眺臨處白雪云
□感万般柴戸跡埋
□未反石橋路絶客通
□千花臺上色同沍
□月窓前光共寒閉
□家書思往事運微独恥
□徐闌

(47) **無題詩**（真韻・諄韻）

」　**勒〈頻春人巡〉**

親輔

雨中寂々宴遊處
景気遮望感興頻
好鳥賞声歌竹夕
和風厭響惜花春
勤抽信力帰諸仏
忠勵愚身仰一人
微運為憐沈陸士
忘憂暫醉酒盃巡

第二部　近衛家実詩壇の考察

第一章　『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作者

はじめに

本章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作者について検討する。本詩懐紙には、近衛家実が主催する詩会にて提出された詩懐紙の内、家実以外の出席者の作品が残されている。その紙数は断簡も含めると三百七十紙以上、出席者は二十名を超えており、当時、家実を中心とした詩壇が形成されていたと考える。『猪隈関白記紙背詩懐紙』の制作時期は、建久七年（一一九六）～元久二年（一二〇五）の約十年間に収斂される。

最初に、この時期の家実を取り巻く状況を確認しておきたい。建久七年当時、家実は正三位右中将であった。同年に起きた源通親を中心とする政変により、父基通が後鳥羽天皇の関白に就任し、近衛家が復権してきた時期である。その後、家実は建久八年（一一九七）権中納言、同年従二位、建久九年（一一九八）に左大将に補任され、同年権大納言となる。正治元年（一一九九）に右大臣、同年正二位、元久元年（一二〇四）に左大臣、建永元年（一二〇六）に土御門天皇の摂政となる。家実はこの時期、盛んに作文会や連句の会を開いている。この当時の家実の連句の会に伴う文芸活動については、柳澤良一氏の詳細なご論考がある[一]。一方、当時開かれた詩会については、山崎誠氏がその活動について言及されている[二]。ただ、詩会に出席した個々の人物と近衛家との関係という点で、そこには考察の余地があると考える。そこで本章では、詩壇を構成した作者について、詩会当時の官歴や近衛家との関係を明らかにし、詩壇の特徴を考察したい。

一　家実の兄弟

『猪隈関白記紙背詩懐紙』には、家実の異母弟である近衛道経（一一八四～一二三八）と近衛兼基（一一八五～没年未詳）の作品が残されている。道経の母は平信範女、極官は正二位右大臣に至っている。一方、兼基の母は最舜女、極官は正二位大納言に至っている。まず、詩会の時期までの両者の官歴を簡単に確認しておく。

道経は建久六年（一一九五）に従五位上、同八年（一一九七）に正五位下右少将、同年十二月に左中将に補任されている。正治元年に従三位、同年権中納言に補任され、建仁二年（一二〇二）に正二位に叙されている。一方、兼基は、建久八年に従五位上、同九年に正五位上に叙

されている。正治元年に従四位下、右中将、同二年（一二〇〇）従三位に至る。そして、建仁二年に従二位、元久元年に権中納言、元久二年には、正二位中納言に至っている。残された詩懐紙は、道経は一紙、兼基は八紙現存する。兼基の官署には「右近」「権中納言」等の官職が記されている。道経の懐紙の官署には、「権中納言」とある。なお、道経の懐紙の詩題「漁樵雪裏情」は、兼基の作品にも確認出来る。これは、『猪隈関白記』正治二年（一二〇〇）十一月二十六日条にこの詩懐紙が詠まれた作文会の記事が残っている。

二　源氏出身の作者

本節では、源家俊、源兼定、源成信、源通衡の四名について、その官歴や、家実との関係を考察したい。家俊、兼定、成信の三名は村上源氏出身である。まず、源家俊から出自、官歴を確認する。家俊は、正四位下宮内少輔源俊光男、母は源雅光女である。極官は従三位宮内卿に至っている。なお、本詩懐紙中に、家俊の懐紙は一紙確認出来る。その官署には「宮内卿」と記されている。詩会時期までの官歴を確認しておく。仁安三年（一一六八）に従五位上、文治元年（一一八五）に従四位上、同五年（一一八九）に宮内卿に補任されている。建久元年（一一九〇）に正四位下、正治元年に讃岐介を兼ね、元久元年に従三位に叙された。

次に源兼定（一一四九～一二一六）について、その出自・官歴を確認する。兼定は正二位権中納言源雅頼男、母は源成定女又は源盛経女である。極官は従三位治部卿に至っている。兼定は、自身の名前を二度変えている。一度目は応保元年（一一六一）に雅能を兼房に、二度目は治承元年（一一七七）兼房を兼定としている。なお、本詩懐紙中に記された官署は「木工頭源兼定」、「越前権介」である。そこで改名後の官歴を確認する。寿永二年（一一八三）に正五位下、建久元年に木工頭、建久五年に越前権介に補任されている。元久元年に左少弁、元久二年に従四位下に叙されている。家俊と兼定については、『猪隈関白記』建久九年一月十九日条に、家実が左近衛大将の除目の為、宮中に参内する際、供をする殿上人の中にその名前を確認出来る。このことは、二者が家実の近くに仕え、非常に親密な間柄であったことを窺わせる。

源成信は、従三位治部卿源顕信男、その兄弟に家実の母源顕子がおり、家実からは叔父に該当する。極官は従五位上宮内権少輔である。懐紙の官署には、「宮内権少輔権顕成」或は「散位宗信」と記されている。この二つの名は、成信のものだが、その時期は明確ではない。『猪隈関白記』建仁二年三月二十六日条に鳥羽上皇が石清水八幡宮に行幸される際、その参仕した人物として、源家俊と宮内権少輔源顕成の名前を確認出来る。なお、源通衡は、詳細が不明の人物である。ここまで見た三名は、いずれも家実の母方に当たる村上源氏出身である。古記録には、家実に近仕する様が見え、その関係の親密さを窺える。

三　平氏出身の作者

本節では、詩壇を形成した作者の内、平氏出身の平親輔、宗清、時宗、時兼、知基についてその官歴を確認し、近衛家との関係を検討する。まず、平親輔を見る。親輔は、正四位下内蔵頭平信基男[三]、極官は従三位治部卿に至っている。懐紙の官署には「勘解由次官」「散位」と記されているものが殆どである。詩会の時期に関係する官歴を確認する。親輔は、寿永二年に蔵人に補任され、同年従五位下。元暦元年（一一八四）兵部少輔に補任され、文治三年（一一八七）に従五位上。文治五年（一一八九）正月十八日長門介を兼任する。建久元年（一一九〇）に正五位下を叙され、兵部少輔を辞している。正治二年に勘解由次官に補任され、建仁三年（一二〇三）に越後権介を兼任した。

近衛家との関係を検討する。『猪隈関白記』建久九年五月五日条に「家司三人」の内に「散位親輔」と記されている。これは、親輔が家実の家司として仕えていたことを示す。紙背詩懐紙の制作時期以降の同書承元二年（一二〇八）三月三日条にも「家司右少弁親輔」とあり、それが継続していることを示す。親輔は、本詩懐紙において、最も多くの作品を残している人物である。これは、家実の主催する詩会に参加する機会が多かったこと、即ち、家司として側近くに仕えていたことを示す。このことは、家実の曾祖父忠通と親輔の祖父信範が密接な主従関係で結ばれていたような関係を両者が築いていたと窺わせる。

次に平宗清を見る。宗清は、従四位上少納言平信実男、極官は正四位下右京大夫に至っている。本詩懐紙に残る宗清の作品は一首のみである。その官署には、「散位」と記されている。『猪隈関白記』では、建久九年一月十九日条、二十日条に「散位」とある。これは詩懐紙の官署と一致する。『民経記』によれば、嘉禎二年に宗清は右京権大夫に補任されている。宗清と近衛家の関係を考えたい。『民経記』貞永元年二月二十六日条に「此御懺法事右京権大夫宗清奉行」、同書同元年三月二日条に「先之由御出、人々漸参集、家司右京権大夫奉行」とある。一つ目の記事は、貞永元年二月二十五日に家実が堀河堂において涅槃経を修し、宗清がその奉行を務めたことを述べている。二つ目の記事は、其の結願の様子を述べる。この記事の「御出」が家実のことを指すので、宗清は当時、家実の家司であったとわかる。こうした記事は、宗清が家実の信頼厚い家司であったことを示すと考える。

次は、平時宗である、時宗は正二位権大納言平時忠男、母は藤原顕時女領子で、安徳天皇の乳母を務めた従三位帥典侍である。時宗は、異母兄弟の時家等の子ともいわれるが、『玉葉』治承三年（一一七九）十一月十三日条に、「〈此中侍従時宗《時忠子》、通宗《通親朝臣子》等、着打指貫、結水置之、共幼年也〉」と記されていることから、時宗は時忠の息子と考える。延慶本『平家物語』の二場面に時宗は登場する。一つは、延慶本『平家物語』第四・二「平家一類百八十余人解官事」において、治承四年（一一八〇）八月に解官された平家一門の中に「尾張守時宗」とその名前が見える。もう一つの場面については、諸本により異同が存する為、次にそれを掲出する。

北方帥典侍殿は、何事も深く思入たる人にて、「いつもすまじき別れかは」と思いなぐさめ給ひつゝ、心づよくぞもてなし給ひける。其腹に尾張侍従時宗とて、十四に成給若冠おわしけり。なのめならず糸惜しみ給けるに、是を見置て、いつ返るべしともしらぬ遠国へ趣く事の心うさ、歎悲給へども無甲斐。時宗も、今は限の別を惜て涙に咽給けり。（延慶本『平家物語』第六末・七、平大納言時忠之事 四）

この場面は、能登国に流される時忠が、その継室帥典侍、息子の時宗と別れに悲しむ場面である。この息子の名前が、平家物語の諸本によって異なっているのである。延慶本と同じであるのは、四部合戦状本、源平盛衰記である 五。これに対して、覚一本『平家物語』 六「平大納言被流」では、時宗の名前が「子息侍従時家」となっている。これについて、角田文衛氏は、時家が継母の領子の讒訴によって上総国に生かされた為、その当時時家が関東にいたことを明らかにした。更にこれを時宗とした上で、時宗の生年を承安二年（一一七二）であると指摘した。角田氏は、時宗のこれ以降の消息を不明とした 七。しかし、本詩懐紙の存在により、不明とされた時宗の消息の一部が明らかとなった。官署には全て「兵部大輔平時宗」と記されている。なお、『吾妻鏡』建久六年七月十九日条に故時忠の所領が帥典侍に安堵されたという記事が見え、その後の消息を窺える。また、近衛家と時忠一族はそれほど遠い関係ではなかったと考える。忠実から基通の四代に家司として仕えていた平信範の『平範記』は、家司として関係した文書や蔵人頭宛に送られてきた文書の紙背に記されている。尾上陽介氏は、紙背の平時忠の書状の存在を明らかにされた 八。また、時忠の娘は家実の弟、道経と結婚している。消息が不明であった時宗が近衛家主催の詩会に出入り出来た背景には、時忠一族と近衛家の緊密な関係があったと考える。また、平時宗と義兄弟となった時兼の存在も大きいだろう。そこで、続いて時兼について、出自や官歴を整理する。

平時兼（一一六八～一二四九）は、正五位下少納言平信国の実子で平時忠の猶子である。極官は従三位右京大夫に至っている。時兼と時宗は、義兄弟の間柄である。時兼は、治承二年に縫殿権助、治承二年に春宮権少進、治承四年従五位下に叙され、同年伊豆守に補任された。しかし、時宗と同じく治承四年八月に解官されて以後、承元四年（一二一〇）に従五位上に叙されるまで、三十年間昇進することはなかった。本詩懐紙の制作時期は、この昇進を全くしなかった時期に該当している。その為、時兼の懐紙の官署は「前伊豆守」と記されている。承元四年以降は順調に出世を遂げている。

ここで、時兼と近衛家の関係について述べておく。『民経記』寛喜三年（一二三一）五月十九日条に、近衛兼経が右近衛大将に補任され、その拝賀の次第について記述されている箇所に「家司右中弁時兼」と見える。つまり、時兼は近衛家の家司であった。尾上氏は、陽明文庫に所蔵されている『御八講』という書名の資料が、平時兼の日記原本であることを明らかにされた。同時に東京大学史料編纂所蔵『不知記』に、この資料の本文が含まれていることを指摘した 九。『不知記』は、柳原紀光の謄写本で、元久三年（一二〇六）八月から十二月までの記事が

載せられている。そこには、家実の子が三歳を迎えたことや、近衛家で開かれた作文会について記されている。こうした記述より、時兼が家実に近侍し、良好な関係が築かれていたことを窺える。日下力氏は、三十年間の不遇の後、時兼が順調に出世したことを述べ、承久の乱後の新体制の中で、時忠の弟である親宗ほどではないものの、優遇されていたことを指摘する[一〇]。確かに、その面もあるだろう。そして、それと同時に近衛家に家司として仕え、その強い後ろ盾があったことも、時兼の出世に影響したと考える。

最後に平知基について述べる。平知基は、『尊卑分脈』に名前を確認出来ず、その出自は不明である。本詩懐紙の官署には、「文章生」或は「散位」と記されている。『猪隈関白記』では、建久九年一月八日条、十九日条、二十日条にその名前を確認出来る。いずれの日においても前駈において「殿勾当」を務めている。なお、二十日条にのみ「六位也」とある。このことから、近衛家に近侍していた人物であるとわかる。

ここまで、詩の作者の内、平氏出身者についてその出自を整理し、近衛家との関係を考察した。家司層である者が多く、家実やその息子兼経と緊密な関係を結んでいたことを窺える。

四　菅原氏出身の作者

本節では、詩壇を構成した作者の内、儒者であった菅原氏出身の作者について考察する。菅原氏出身の作者には、菅原在茂、その息子である在高と義高、在高の息子、淳高の四名がいる。まずは、在茂から出自と官歴を確認する。

菅原在茂（一一二一～一二〇〇）は、従四位下式部権少輔菅原在長の養子、実父は従五位下豊前権守菅原是基である。極官は、正四位下大学頭に至っている。仁平三年（一一五三）五月二十一日に藤原頼長の自邸である東三条第にて実施された学問料試を受ける。この学問料試が東三条第にて実施されることになった経緯は、『宇槐記抄』（仁平三年五月八日条）に詳しい。記事には、頼長が「才不才」に関係なく、その出自によって学問料支給が決まる現状を問題視し、後鳥羽上皇の院宣を受け、自邸にて学問料支給の為の試験を課したと記されている。この時に課された詩題は、『春秋左氏伝』を典拠とする「礼以行義」であり、菅原登宣が及第した[一一]。その後、永万元年（一一六五）に対策に及第し、同年十月に式部丞に補任されている[一二]。治承元年（一一七七）に従五位で大学頭に補任された。この時無官であった在茂が上臈を超越して大学頭に補任された背景には、「菅氏之長者」を理由に関白が強く後押ししたと兼実は述べている[一三]。その後、建久九年に越後介を兼任した。正治二年六月二十八日に八十歳で没した。近衛家との関係を明示する例としては、『猪隈関白記』建久八年正月十五日条、基通の御節供に陪膳として在茂の名前を確認出来る。また、基通家政所下文案に別当として在茂の名が記されている[一四]。在茂は、家実の父に近仕していたと言えよう。

次に、在茂男、菅原在高（一一五九～一二三二）について、当時の官歴を確認する。父は、先述の通り在茂であり、母は藤原家基女。極官は、従二位式部大輔に至っており、三代の天皇の侍読を務めた。安元二年（一一七六）に二十二歳で穀倉院学問料を支給された。これについて藤原兼実は、「未無知其賢愚之人」としてそれを批判している[一五]。治承二年（一一七八）に文章得業生、同四年に対策に及第している。本詩懐紙には、「刑部大輔」「文章博士」「大学頭」「周防介」が官署に記されている。本詩会紙と関係のある補任時期を、以下に整理する。刑部大輔に還任されたのは建久三年（一一九二）であり、同九年に従四位上に叙された。正治二年に文章博士に補任され、建仁元年兼越後介、元久元年大学頭、元久二年兼周防介に補任された。

続いて在高と近衛家との関係を見る。『猪隈関白記』建久九年正月二十日条に左近衛大将補任五後、諸所に慶を申すための「前駈」の中に「刑部大輔菅原在高朝臣」と、その名前を確認出来る。また、同書正治元年三月十四日条では、石清水八幡宮臨時祭に出立する際の前駈に在高が含まれている。その記事には、在高について「刑部大輔在高朝臣奉仕之、雖儒者依為家司也」と記されている。この記事より在高が近衛家に家司として仕えていたことがわかる。また、建永二年十月の家実家政所下文に「別当式部大輔兼周防権守菅原朝臣」とその名が記されている[一六]。こうした記述より、詩会の活動が盛んであった当時、家実に在高が近仕している様子を窺える。

在高の弟、菅原義高は生没年未詳、極官は従四位下刑部大輔である。義高の詩懐紙の官署には全て「散位」と記されている。義高は、関連する記述が少なく、近衛家との関係を知る為に、詩会の時期以降の古記録の記事にも言及しておきたい。『猪隈関白記』承元二年閏四月二十八日条に、文章生義高が蔵人に補任されたことと記されている、また同書同年六月六日条に新蔵人義高と見える。時代がかなり下るが、『明月記』嘉禄二年（一二二七）には、義高が従四位に叙されたことが記されている。『猪隈関白記』は、在茂の死後の記録である。このことから、父や兄と同じく家実に近仕していたと考える。

最後に在高男、淳高（一一七七～一二五〇）について詩懐紙作成時期に至るまでの官歴等を確認し、近衛家との関係を検討する。詩懐紙に残された官署には、「尾張権守」「丹後守」「散位」と記述されている。これに関係する官歴を中心に確認する。寿永元年（一一八二）に文章生、文治六年（一一九〇）に東宮蔵人に補任された。建久六年に穀倉院学問料を支給されている。『猪隈関白記』建久八年十二月十七日条の近衛家の作文会の記事には、「散位淳高」と記されている。建久九年年五月十四日に祖父在茂の挙により文章得業生の申し立てをし、同年六月八日文章得業生となる。そして、正治元年に対策及第し、蔵人に補任された。また同年、尾張権守も兼任している。建仁元年に丹後守、同三年得替解任され、元久二年に従五位上に叙された。なお、極官は従二位式部大輔に至っている。

淳高に関する記事が『民経記』安貞元年（一二二七）十二月二十二日条に残されている。これには、興福寺僧徒が当時の内大臣で家実息、

藤原兼経のもとに参内した時のことが記述されている。そこには、「四位家司刑部卿淳高朝臣」と記されており、淳高が兼経の四位家司であったとわかる。淳高は、家実の家司であった父在高と共に、近衛家に仕えていたのである。

ここまで、懐紙の作者の内、菅原氏出身者を見た。儒者ではあるが、在茂以下近衛家に仕えていた。近衛家の家司であった在高、淳高が儒者として順調に出世し、従二位に至った背景には近衛家の確かな後ろ盾があったからだと考える。官歴や、古記録より両家の密接な関係を窺うことが出来た。

五　大江氏出身の作者

前節では、儒家の菅原氏と近衛家との関係を検討した。詩壇を構成した儒家は菅原氏だけではなく、大江氏出身者もそこに名を連ねている。そこで本節では、大江匡範とその男周房の官歴を整理し、近衛家との関係を考察したい。

大江匡範（一一四〇～一二〇三）は、従四位上式部少輔男、義弟に大江広基がいる。極官は従四位下太皇太后宮大進である[一七]。治承三年御書所作文に御書所衆として参加、同四年正月に給料宣旨を蒙り、寿永元年に蔵人に補任され、文章得業生と兼任した。建久八年太皇太后宮権大進、建久九年に従四位下に叙された。後に『猪隈関白記』正治元年八月二十一日条には「散位匡範」とある。本詩懐紙に残る匡範の官署は、「左京権大夫」「太皇太后宮権大進」「散位」を確認出来る。匡範の詩懐紙の製作時期の下限は元久元年頃と推定され、作品はいずれも匡範の最晩年の作だといえよう。近衛家との関係については、特に近衛家において何らかの役職に就いてはいない。しかし、匡範の現存する懐紙の紙数は、親輔よりやや少ない程度である。それだけ家実の主催する詩会に出席していたということは、それだけでも家実と親密ない間柄であったことを窺わせる。

次に周房について、その出自や官歴を整理し、近衛家との関係を考察する。現存する詩懐紙の官署には、「学生」「左衛門権少尉」を確認出来る。古記録類をもとに詩懐紙の制作時期よりも先まで周房の官歴を整理する。正治元年に「学生」、建保五年に（一二一七）式部権少輔（「宗清願文案」[一八]）、嘉禄元年（一二二五）に文章博士に補任された。極官は、従四位上大学頭に至っている。

では、周房と近衛家の関係について見る。『民経記』寛喜三年一月十日条に家実邸にて、右中弁親俊朝臣・文章博士周房朝臣・蔵人右佐範頼・前主水正頼尚等が体調不良の家実に祗候しているとの記述がある。これは、両者が親密な関係であったことを窺わせる。

六　藤原氏出身の作者

藤原出身の作者として名前の確認出来るのは、藤原光親と藤原敦尚である。まず、光親の出自や官歴を整理する。

光親（一一七六～一二二一）は、正二位権中納言藤原光雅男、母は藤原重方女である。極官は、正二位権中納言に至る。後鳥羽上皇の側近であり、承久の乱後に斬首されたことでも有名な人物である。光親の官歴について詩会の制作時期前後まで整理する。光親は、寿永二年に蔵人に補任され、文治三年に豊前守に補任、同四年に兵部権大輔を兼任している。建久元年に従五位上、建久八年に左衛門権佐を兼任した。正治二年に右少弁、建仁元年に権左少弁に補任され、同三年に正五位上に叙された。元久元年に右中弁、従四位下に叙され、同二年に正四位下に叙された。なお、懐紙の官署には「兵部権大輔」と記されている。左衛門権佐補任以前、即ち建久八年以前の作と考える。

続いて、光親と家実の関係を検討する。『猪隈関白記』建久九年正月二十五日に家実の家司・職事・家令が補された。この記事に「家司三人」として「左衛門権佐光親」とある。つまり、光親は、家実の家司として近侍していたのである。

次に敦尚の出自から整理する。敦尚は保綱と名乗っており、藤原式家出身、正四位下式部少輔藤原敦綱男、母は春覚法眼女。極官は従四位上民部大輔に至る。懐紙の官署はすべて「給料文章生」と記されている。『明月記』[一九]建久七年五月二十七日の記事に「秀才一人敦尚、給料二人淳高、長倫」とある。敦尚が秀才に補された理由として、「被超下臈三人、今度自肥後国上洛、仍補之。」と記されている。近衛家と敦尚との関係を検討する。『猪隈関白記』安貞二年（一二二八）十二月四日条に、「四位家司保綱」とある。これは、保綱が近衛家の家司であったことを示している。

最後に名前の一部が闕となっている作者について、その名前の推定を試みたい。式部権大輔敦□と肥後守敦□である。山崎氏は、前者を敦尚の父、敦綱である可能性を指摘し、後者をその筆跡の違いから前者とは別人だと述べている[二〇]。前者の「式部権大輔敦□」については、詩懐紙の制作時期から作者を検討したい。この時期に式部権大輔であった人物は、先述した敦尚の父、敦綱である。敦綱は、建久元年に式部権大輔に補任され、建仁元年までその地位にあった。近衛家とも関係の深い人物で、治承三年に家実の父基通の家司になっている。時期や息子も詩会に参加していること、近衛家との繋がりから、この作者は敦綱であると考える。後者の肥後守敦□については、敦綱は先述の通り、確かに補任されてはいるが、山崎氏が指摘するように本文の文字は別手であるようである。稿者は山崎氏の指摘に従っておきたい。

おわりに

本章では、近衛家実詩壇を形成した作者について、その出自や作詩時期の官歴を整理し、近衛家との関係を考察した。作者の殆どが家実の兄弟や母方の親戚である村上源氏出身者、近衛家の家司であり、家実にとってはいわば身内のような存在である。彼らと共に形成した詩壇は、非常に私的なものであったという側面を持つ。こうした作者の構成で共通するのが、家実の曾祖父忠通の歌壇である[二二]。井上宗雄氏は忠通の歌壇について「忠通母師子の一族村上源氏の人々」と、「家司・乳母層を中心にした内々の会であったらしい」と述べる。これについては、橋本不美男氏も「家族的な集団であった」と述べる。こうした構成は、家実の詩壇と共通している。この一致は、詩壇を構成していた人々の間に忠通の文事を引き継ごうとする意志を窺わせる。また彼らの中には、家実と共に政治的に大きな出世を遂げる者がある。近衛家が復権していく中で行われた詩壇の活動は、忠通の時代を意識しそれを様々な面で引き継ごうとしていたと考える。

一 柳澤良一「猪隈関白藤原家実の青年期の文芸活動について―聯句会を中心として―」(『学葉』第二十号、一九七八年)。

二 山崎誠「陽明文庫蔵猪隈関白記紙背詩懐紙について」(『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年、初出一九八二年)。

三 尊卑分脈による。刑部権大輔信季を実父とする説もある。

四 本文は、松尾葦江・清水由美子編『校訂延慶本平家物語(十二)』(汲古書院、二〇〇八年)を参照。

五 四部合戦状に「其御腹成十四歳男子御、尾張侍従時宗申事」、『源平盛衰記』に「その腹に今年十四歳になる息男あり。尾張侍従時宗といふ斜めならずいとほしがり給ひけり。」とある。

六 大津雄一・平藤幸編『平家物語　覚一本　全　改訂新版』(武蔵野書院、二〇一四年)では、時家を「時宗が良い。」とする。

七 角田文衛『平家後抄　上下』(講談社学術文庫、二〇〇〇年)。

八 尾上陽介『平範記』紙背文書やその他の断簡からの発見」(田島公編『近衛家名宝からたどる宮廷文化史　陽明文庫が伝える千年のみやび』、笠間書院、二〇一六年)。

九 前掲注八書。

一〇 日下力『平家物語の誕生』(岩波書店、二〇〇一年)。

一一 増補史料大成刊行会編『増補史料大成　台記別記　宇槐記抄』(臨川書店、一九六五年)を参照。『宇槐記抄』には六月とあるが、『本朝世紀』(仁平三年五月二十一日条)により五月に改めた。また、この学問料試の記事は、『古今著聞集』(巻四、文学)にも収録されている。

一二 吉田早苗校訂『大間成文抄　上巻』(吉川弘文館、一九九三年)。

一三 『玉葉』(治承元年十一月十五日)関白被申云、成光雖可然、辞文章博士浴加級恩、何強排大学頭、在茂雖位浅為菅原氏之長者、未任一官、尤可被登用云々。

一四　「関白家政所下文案」（鎌倉遺文九〇一）（竹内理三編『鎌倉遺文　古文書編第二巻』、東京堂出版、一九七二年）。
一五　『玉葉』（安元二年一月十九日条）。
一六　「関白家政所下文案」（鎌倉遺文一七〇三）（竹内理三編『鎌倉遺文　古文書編第三巻』、東京堂出版、一九七二年）。
一七　『勅撰作者部類』には、「四位左京大夫」とある。（山岸徳平編『八代集全註　第三巻』、有精堂出版株式会社、一九六〇年）。
一八　鎌倉遺文二二八七（竹内理三編『鎌倉遺文　古文書編第四巻』、東京堂出版、一九七三年）。
一九　稲村栄一『訓注明月記　第一巻』（松江今井書店、二〇〇三年）を参照。
二〇　前掲注二書。
二一　忠通の歌壇については、井上宗雄「院政期歌壇の考察」（『国文学研究』第十九集、一九五九年）、橋本不美男「院政期の歌壇と和歌の位相」（『王朝和歌史の研究』笠間書院、一九七二年、初出一九六八年）、萩谷朴編『平安朝歌合大成　第六巻』（同朋社、一九七九年復刊、初版一九六二年）等を参照。

第二章　鎌倉時代における幼学書の享受

はじめに

鎌倉時代、貴族達の学習は「四部ノ読書」から始まった。『千字文』『百二十詠』『蒙求』『和漢朗詠集』という四種の幼学書[一]を読むことを「四部ノ読書」と称したのである[二]。幼学書の幼学とは、『礼記』（曲礼上）「人生十年曰幼。学。（人生まれて十年を幼と曰ふ。学ぶ。）」に由来する。当時、貴族の十歳前後の児童達は、この四種の書物を丸暗記する形で学習したのである。この時期に得た知識は、その後の彼らの詩や文章に大きな影響を与えている。言わずもがな、それは『猪隈関白記紙背詩懐紙』においても同じである。『千字文』が漢字の音訓を学ぶことを主たる目的としたように、四種の幼学書は、学習の目的を異にしている[三]。その中で特に作詩に影響を与えたのは、『百二十詠』『蒙求』『和漢朗詠集』だと考える。

そこで、本章では、この三種の幼学書が『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作品において、どのように受容されていたのかを考察する。

一　『百二十詠』の受容と反映

『百二十詠』は、唐の李嶠の詠物詩百二十首を収めた漢詩集である。百二十の事物を十二の部門に分け、各部門に十首の五言律詩からなる詩が収められている。詩の本文については、無注本と唐の張庭芳の注を記した有注本の二種類が存在する。これにより、様々な事物の知識を得、詩句の正しい声律を知ることが出来る[四]。先行研究では、『百二十詠』が句題詩の構成方法、特に破題において強い影響を及ぼしたと指摘している[五]。そこで、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作品を取り上げ、その影響を考察したい。最初に第四函第十六号第六紙を掲出する。

〔第四函　第十六号　第六紙〕

冬日、同じく漁樵雪裏の譲渡畏怖ことを賦する詩〈題の中より韻を取る〉

兼基

1 三冬飛雪望方清　三冬　雪を飛ばして望方に清し
2 想像漁樵箇裏情　想像る　漁樵　箇裏の情
3 厳子瀬辺花散思　厳子瀬の辺　花散る思
4 鄭公溪北月寒行　鄭公溪の北　月寒き行

5 負薪已及雲黄夕　薪を負ひて已に及ぶ 雲の黄なる夕
6 垂鉤遅留風白程　鉤を垂れて遅留す 風の白き程
7 可恥詠吟詩句拙　恥づべし 詠吟 詩句の拙きことを
8 紛々皓々玉塵盈　紛々 皓々 玉塵盈ちたり

当該詩は、家実の弟、兼基の作品である。「漁樵雪裏情」という句題詩で、詩題に「漁樵」という双貫語を含んでいる。詩題を破題する頷聯を見る。まず第三句上四字「厳子瀬辺」と第四句上四字「鄭公溪北」を見る。前者は後漢の高士厳光が釣りをしていた時の故事を踏まえ、詩題の「漁」を言い換える。後者は、後漢の太尉鄭弘が薪を拾っていた時の故事を踏まえ、詩題の「樵」を言い換える。これにより、各句下三字は、詩題の「雪裏」を表現することになる。第三句下三字「花散思」は、『百二十詠』六（010）「雪」の「逐舞花光散、臨歌扇影飄。（舞を逐ひて花の光散じ、歌に臨みて扇の影飄る。）」を踏まえている。「雪」と題を持つ詩の表現を用いることで、詩題の「雪」を破題している。『百二十詠』の詩題と同じ語句を破題する際、『百二十詠』の詩の表現をそのまま用いているのである。こうした例は他の作品においても見られる。次に第四函第十四号第二紙の菅原義高の作品を掲出する。

〔第四函 第十四号 第二紙〕

重陽同じく菊は言詩の友作りといふことを賦して教に應ずる一首　〈粧を以て韻と爲〉

散位菅原義高

1 九月之天重九日　九月の天 重九の日
2 言詩作友菊開粧　詩を言ひ友と作す 菊開くる粧
3 艶應連璧研詞意　艶は連璧に應ず 詞を研く意
4 色是断金振響腸　色は断金を是とす 響を振る腸
5 摘藻寒潭交尚淡　藻を寒潭に摘ぶ 交 尚ほ淡し
6 綴篇暁岸契旁芳　篇を暁岸に綴る 契 旁く芳し
7 此花近植前庭下　此の花近く前庭の下に植うれば
8 遮莫芝蘭野外香　遮莫 芝蘭の野外に香ることを〕

この詩は、「菊作言詩友」という詩題をもつ句題詩である。そこで、当該詩の表現を確認する。頷聯では、「艶」と「色」が詩題の「菊」を

表す。第三句「連壁」は、『蒙求』(044)「岳湛連璧」に由来する。また、「断金」は『周易』に由来する語句である。いずれも堅い友情を表しており、詩題の「友」を言い換えている。各句下三字を見る。「研詞意」は、『白氏文集』(3356)「酔後聴唱桂花曲(酔後桂花曲を唱ふるを聴く)」桂花詞意苦丁寧、唱到嫦娥酔便醒。(桂花の詞意苦だ丁寧、唱へて嫦娥に到りて酔便ち醒む。)」を踏まえた表現で、詩句をより良いものに磨き上げることをいう。それと対をなす「振響腸」は、『文選』巻十一に見える孫綽の「遊天台山賦」の「法鼓琅以振響、衆香馥以揚煙。(法鼓琅として以て響を振るひ、衆香馥として以て煙を揚ぐ。)」を踏まえている。素晴らしい響きを持った詩のことを表す。下三字では、詩題の「詩」を言い換える。これにより、頷聯では、詩題の「菊」「友」「詩」をそれぞれ対偶関係を持ちながら、破題していると確認出来た。ついで、頸聯を見る。第五句上二字「摘藻」と「綴篇」は、それぞれ、詩を詠じ、詩を作ることを意味する。即ち、詩題の「詩」を言い換えている。また、各下三字は、望むべき美しい交友関係を表現する。即ち、詩題の「友」を言い換えることとなる。これにより、詩題の「菊」を表すのは、「寒潭」と「暁岸」と言うことになろう。この対句は、『百二十詠』七「022 菊」に「霾靡寒潭側、芼茸暁岸隈。(霾靡たり 寒潭の側、芼茸たり 暁岸の隈。)」とあるのを踏まえた表現である。詩題に「菊」をもつ詩の表現を用いることで、破題すべき「菊」を言い換える。本詩の場合、「菊」の詩の対句をそのまま使用し、破題に用いている。『百二十詠』の表現が、当時の句題詩の破題において重要であったと考える。

二　『蒙求』の受容と反映

唐の李翰の撰による『蒙求』は、中国の故事を四字句に縮め、それを約五百九十六句収めている八。この四字句は、前半に人名、後半にその事績を二字で表す。これを標題という。『蒙求』という書名は、『周易』「蒙卦」「有童蒙求我義。」に由来する。『蒙求』の場合には、撰者である李翰の自注が存在する。しかし、『蒙求』は注も含め、時代によって内容が異なっている。平安・鎌倉期には、最も古い李翰の注が用いられていた。本朝では、中国の故事を学ぶ為に幼学書として広く用いられていた。その様は、「勧学院の雀は蒙求を囀る」等にも反映されている九。『猪隈関白記紙背詩懐紙』の制作時期と同じ時期に、『蒙求和歌』が成立しており、当時、その知識が浸透していたことは明らかである。そこで本節では、『蒙求』が詩においてどのように反映されているのか。内容解釈を通じて具体的に考察したい。次に第四函第十七号第三十九紙を掲出する。

〔第四函 第十七号 第三十九紙〕

秋夜同じく月下遠人の情といふことを賦する一首〈情字を便用す〉

平親輔

1 月下迎秋催眺望　月下に秋を迎へ眺望を催す
2 遠人此處動幽情　遠人此處に幽情を動かす
3 辺愁添雪三千里　辺愁雪を添ふること三千里
4 郷涙濕霜四五更　郷涙霜を濕すこと四五更
5 乗興子猷尋戴去　興に乗りて子猷戴を尋ねて去る
6 通夢蘇氏在胡驚　夢を通じて蘇氏胡に在りて驚く
7 羈中今夜光殊勝　羈中今夜光殊に勝れたり
8 想像庾公楼上晴　想像る　庾公の楼上晴るることを

当該詩は、「月下遠人情」という詩題の句題詩である。この詩の第五句「子猷尋戴」は、『蒙求』(176)「子猷尋戴」一〇という標題をそのまま用いている。これは、大雪の降った後、月に照らされた雪景色の美しさに王子猷が興を感じ、遠い剡県に住む逵戴と共にこれを楽しもうと思ったが、逵戴の家に着いた時には、その興も尽きており、そのまま家に入らずに帰ったという故事である。これにより、上四字「乗興子猷」で詩題の「月下情」、下三字「尋戴去」で詩題の「遠人」を破題している。当該詩では『蒙求』の標題をそのまま詩句に取り込み、その故事を用いて、詩題を破題している。但し、『蒙求』の故事は、破題以外にも用いられている。次に同函同号第三十九紙を掲出する。

〔第四函　第十七号　第三十九紙〕

春日同じく春友鶯にしかずといふことを賦して教に応ずる一首〈鶯字を便用す〉

刑部大輔菅原在高

1 親友如何春興成　親友　如何でか春興成る
2 論其昵近不如鶯　其の昵近を論ずるに鶯にしかず
3 芳言第一花間語　芳言は第一　花間の語
4 比翼無雙霞底声　比翼は無雙なり　霞底の声
5 好哢艶陽殊合志　好哢　艶陽に殊に志を合す
6 清歌美景勝同情　清歌　美景に勝れて情を同じくす

7倩思百囀此時契　倩つら思ふ　百囀此の時に契りては
8縱類陳雷豈得争　縱ひ陳雷に類すとも豈に争ふことを得む

第八句に「陳雷」とある。これは、『蒙求』(105)「陳雷膠漆」[一一]を踏まえた表現である。「陳雷」とは、陳重と雷義のことで、二人の堅い友情に関する故事を載せている。標題の二字をそのまま用いていることから、『蒙求』を典拠としたものと考える。尾聯は、自身の感情を表現する聯であり、詩題と関連付けることもあった。当該詩では、詩題の「春友」である「鶯」と比較し、陳重と雷義ですら鶯には敵わないと述べている。述懐における『蒙求』の表現は、詩会の出席者が皆それを理解できるということを示す。即ち『蒙求』の故事が出席者全員に定着しているということであろう。ここでは、二紙を例にとり、『蒙求』の受容と、詩への表現を見た。平親輔は、前章にて整理したように、儒者ではない。そうであっても『蒙求』が詩に用いられているのは、幼学書として故事を学んだ知識が生かされているからであろう。また、『蒙求』は、その表現を破題の為に用いられるだけではない。故事を共通の理解として、自身の心情を表す述懐にも用いられるのである。

三　『和漢朗詠集』の受容と反映

『和漢朗詠集』は、他の三つの書物とは異なり、幼学書として成立したわけではない。しかし、平安末期から鎌倉期に幼学書として扱われるようになった。その理由について、佐藤道生氏は貴族たちが社交上、七言律詩を作る必要があり、その為には幼いときから句題詩の詠法を身に着け、破題に通じている必要があったと指摘する[一二]。また、山田尚子氏も当時の必須の基礎知識として、詩歌の表現、特に破題の技法を学ぶ必要があったことを述べている[一三]。佐藤氏は、幼学書として学び、それが詩に反映された例として、『法性寺殿御集』所収詩を分析した[一四]。また小野泰央氏は、『猪隈関白記紙背詩懐紙』とほぼ同時期の古記録『民経記』に『和漢朗詠集』の摂取を指摘する[一五]。そこで本節では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』において、それがどのように受容され、詩に反映されたのかを考察したい。まず、第四函第十八号第六十八紙の菅原在高の作品を次に掲出する。

〔第四函　第十八号　第六十八紙〕

春日同じく歌舞花に催さるといふことを賦して教に應ずる一首〈題の中より韻を取る〉

文章博士菅原在高

1被催花色興遊多　花色に催さるる興遊多し
2視聴未休舞與歌　視聴未だ休まず舞と歌と

3 陰雪廻来難弁艶　陰雪廻り来たりて艶を弁じ難し
4 陽春唱得不求他　陽春唱へ得たりて他を求むることを得ず
5 欲同園蝶繽紛否　園蝶の繽紛たるに同じくするや否や
6 其奈林鶯音韻何　其れ林鶯の音韻に奈何せん
7 岸柳庭桜年発地　岸柳　庭桜　年ねん発く地
8 楽天調至比韓娥　楽天の調べ至りて韓娥と比す

当該詩は、建仁三年（一二三〇）一月二十六日に催された詩会にて提出された作品である。「歌舞被催花」という句題詩である。詩題は「歌舞」という双貫語を含んでおり、各聯でこれを詠み分ける必要がある。頸聯の「園蝶」と「林鶯」という対偶表現は、『和漢朗詠集』一六（巻上、春・閏三月 060、源順）の「帰谿歌鶯、更逗留於孤雲之路、辞林舞蝶、還翩翻於一月之花。（谿に帰る歌鶯は、更に孤雲の路に逗留す、林を辞す舞蝶は、還つて一月の花に翩翻す。）」を踏まえており、「鶯」が「歌」を「蝶」が「舞」をそれぞれ言い換えている。詩題の双貫語を意識した破題に、『和漢朗詠集』の対句がそのまま利用されている。『和漢朗詠集』が用いられているのは、破題の為の表現だけではない。その例として、次に第四函第十九号第四紙を掲出する。

〔第四函　第十九号　第四紙〕

重陽の日、同じく花の中に唯だ菊を愛するのみといふことを賦して教に應ずる一首〈粧を以て韻と為(す)

散位平知基

1 菊為重陽送異香　菊は重陽の為めに異香を送る
2 花中唯愛一叢粧　花の中に唯だ一叢の粧を愛するのみ
3 紫蘭群艶妬佳趣　紫蘭の群艶　佳趣を妬む
4 紅蕙濃匂隔寵光　紅蕙の濃匂　寵光を隔つ
5 金谷春風忘不憶　金谷の春風　憶へざることを忘る
6 東籬秋露翫斯芳　東籬の秋露　斯の芳しきを翫ぶ
7 今陪高会詠吟末　今　高会の詠吟の末に陪る
8 詩酒管絃動感腸　詩酒　管絃　感腸を動かす

当該詩は、建仁二年（一二二九）九月九日に催された詩会にて提出された作品である。『猪隈関白記』建仁二年九月九日条一七に、「有密作事、題云、花中唯愛菊、以粧為韻。（密に作の事有り。題に云ふ、花の中に唯だ菊を愛するのみ。粧を以て韻と為す。）」その時の記録が残されている。この「花中唯愛菊」という詩題は、『和漢朗詠集』（巻上、九日付菊 267、元稹）の「不是花中偏愛菊、此花開後更無花。（是れ花の中に偏へに菊を愛するにはあらず 此の花開けて後更に花無ければなり。）」の一節から取られている。密々の詩会であり、詩題を献上した人物は不明である。

また、第一句「菊為重陽」は、『和漢朗詠集』（巻上、九日付菊、李端）の「燕知社日辞巣去、菊為重陽冒雨開。（燕は社日を知って巣を辞して去る、菊は重陽の為めに雨を冒して開く。）」を踏まえている。このように『和漢朗詠集』は、その表現が詩題や、破題の表現、首聯等、様々な形で用いられている。ここまで、句題詩の例を見たが、『和漢朗詠集』が典拠として用いられていたのは、句題詩だけではない。次に無題詩の第四函第十八号第七紙を掲出する。

〔第四函 第十八号 第七紙〕

冬日陪　書閣言志勒

大江周房

1 忝接羽林高会末　忝なくも羽林高会の末に接はる
2 伝聞此宴識何彊　此の宴を伝へ聞くに識ること何ぞ彊からむ
3 爐峯雪色不殊月　爐峰の雪の色は月に殊ならず
4 豊嶺鐘声欲和霜　豊領の鐘の声は霜に和せむとす
5 携帙多年居学牖　帙を携へて多年　学牖に居り
6 吟詩今日在沙場　詩を吟じて今日沙場に在り
7 免毫難染詠尤鯁　免毫染め難し詠尤も鯁し
8 只恥群龍吐鳳章　只だ恥づらくは群龍に鳳章を吐くことを

当該詩は、周房の無題詩である。第四句「豊領鐘声欲和霜」は、『和漢朗詠集』（巻上、秋・月 256、中書王（兼明親王））の「欲和豊嶺鐘声否、其奈華亭鶴警何。（豊嶺の鐘の声に和せんとするや否。其れ華亭の鶴の警めに奈何。）」を踏まえている。冬の日の様子を表しており、『和漢朗詠集』の表現が、無題詩の情景を表すものとして用いられている。

おわりに

本章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』において、幼学書がいかに受容され、詩に反映されていたのかについて考察を行った。『百二十詠』は、句題詩の詩題を破題する際、詩題に含まれる事物の詩の表現を、そのまま取り込み、詩に用いていた。これにより、『百二十詠』が句題詩の破題において重要な役割を果たしていたことを確認出来た。『蒙求』は、句題詩において標題の一部或は全てが用いられている詩を見た。詩題を破題する為だけではなく、自身の心情を表す為の表現にも用いられている。このことは、『蒙求』の故事が当時の人々に深く浸透していたことを示している。『和漢朗詠集』は、句題詩の詩題や首聯、破題の為に用いられるだけではなく、無題詩にもその表現が用いられている。このことから、『和漢朗詠集』が、当時の詩作全般にわたり、きわめて重要であったとわかる。また、こうした幼学書の知識を元にした表現は、儒者の作品だけではなく、どの作者の作品にも見られることである。これは、当時の人々の間に幼学書の知識が深く浸透していたことを示している。『猪隈関白記紙背詩懐紙』の分析を通じて、鎌倉時代における幼学書の享受の一端を明らかにすることが出来ると考える。

一 桃裕行『上代学制の研究〔修訂版〕』（桃裕行著作集第一巻、思文閣出版、一九九四年）。

二 太田昌二郎「四部ノ読書」考（『太田昌二郎著作集　第一冊』吉川弘文館、一九九一年、初出一九五九年）。

三 佐藤道生「宮廷文学と教育」（仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林舎、二〇〇八年）。

四 前掲注二論。胡思昴「『李嶠百二十詠』序説―その性格・評価と受容をめぐって―」

五 蒋義喬「詠物詩から句題詩へ―句題詩詠法の生成をめぐって」（『和漢比較文学』三五、二〇〇五年）、佐藤道生「『百二十詠』と句題詩」（『句題詩論考―句題詩とは何ぞや』勉誠出版、二〇一六年、初出二〇一五年）。

六 『百二十詠』所収の詩句に関しては、山崎明、ブライアン・スタニンガー「百二十詠詩注校本―本邦伝存李嶠雑詠注―」（『斯道文庫論集』第五十輯、二〇一七年）を参照。

七 前掲注六論。

八 池田利夫「『蒙求古註集成』総説と諸本解題」（『源氏物語回廊』笠間書院、二〇〇九年。初出一九八九年）、同「『蒙求古註集成』序と跋」（同上書、初出一九九〇年）、前掲注三論等参照。

九 太田晶二郎「勸學院の雀は　なぜ蒙求を囀ったか」（前掲注二書、初出一九七二年）。

一〇 〔蒙求〈故宮博物院蔵古鈔本〉、176子猷尋戴〕世説、王子猷、居山陰夜雪隠。夜大雪。眠覚、開屋酌酒。四望皎然、因起彷徨、詠左思招隠詩。忽憶戴安道情。逵在剡県使夜乗一小船。経宿方至。造門不前而返。人問其故也。王曰、乗興而返。何必見戴也。

一一 〔蒙求〈故宮博物院蔵古鈔本〉、176子猷尋戴〕後漢書雷義字仲公、豫章人也。与陳重為友情如兄弟。時人語曰、膠漆雖堅不如陳与雷。二人仕並為郡守也。

一二 佐藤道生『『和漢朗詠集』、幼学書への道」（『三河鳳来寺旧蔵暦応二年書写和漢朗詠集　影印と研究　研究篇』勉誠出版、二〇一四年、初出二〇〇六年）。

一三 山田尚子「朗詠注の成立と展開―『私注』欄上への試みを兼ねて」（『重層と連関　続中国故事受容考』勉誠出版、二〇一六年、初出二〇一一年）。

一四 前掲注論一二論。

一五 小野泰央『『民経記』における『和漢朗詠集』の摂取方法について」（『中世漢文学の形象』勉誠出版、二〇一一年、初出二〇一一年）。

一六 『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和歌文学大系47　和漢朗詠集・新撰朗詠集』（明治書院、二〇一一年）を参照。

一七 東京大学史料編纂所編『大日本古記録　猪隈関白記　三』（岩波書店、一九八七年）。

第三章　前代撰集の影響

はじめに

前章では、幼学書の享受を中心に『猪隈関白記紙背詩懐紙』に残された作品の表現を考察した。表現の解釈を通じて、これまでのように中国の書物や幼学書を典拠・用例とするのは勿論だが、更に本朝の表現を受容している可能性が見出されてきた。鎌倉期に成立した本詩懐紙を解釈する為には、前代に成立した本朝の撰集も視野に含める必要がある。これまで、平安末期に本朝で成立した撰集の受容については、後代の作品数が少ないこともあり、あまり考察されてはこなかったように思われる。特に平安末期には、家実詩壇と関係の深い藤原忠通が編纂に携わった『本朝無題詩』や『法性寺殿御集』が成立している。そこで、本章では、詩の内容解釈を通じて、その詩風を考察し、典拠・用例について考えたい。

一　句題詩から見た前代撰集の影響

〔第四函　第二〇號　第五二紙〕

春日同賦**尋花至遠山**應　教一首〈題中取韻〉　散位菅原義高

1 猗哉遊覽興難禁　猗なる哉　遊覧　興禁じ難し
2 遠至山村花遍尋　遠く山村に至り　花を遍く尋ぬ
3 危磴攀霞蹤幾僻　危磴　霞を攀づ　蹤は幾ど僻る
4 幽溪趁雪路猶深　幽溪　雪を趁ふ　路は猶ほ深し
5 遙隨樵客望勾思　遙かに樵客に隨ふ　勾を望む思ひ
6 自謁穩倫求艶心　自ら隠倫に謁す　艶を求むる心
7 巖戸洞門旁信馬　巖戸　洞門　旁た馬に信す
8 空忘歸程日徐沈　空しく歸程を忘れ　日は徐ろに沈む

右の作品は、先に見た菅原淳高の作品と同じ詩題で作られた菅原義高の作品である。三句目と四句目に注目すると『白氏文集』巻二二(2301)「遊坊口懸泉、偶題石上」という詩中に「危磴上懸泉、澄湾坊口轉」とその用例が見られ、この語が「山」を表していると考えられる。そし

て、下の句にある「蹤幾僻」についてだが、これは『法性寺殿御集』一の「幽寺月方清」の詩中に「古寺幽閑蹤幾僻、箇中翫月四望清」とあり、その使用が見られる。つぎに五句目と六句目に移る。この聯では五句目の「樵客」と六句目の「隠倫」が対句として用いられているが、これは『本朝無題詩』二巻一にある藤原茂明の「山家春雪」等の詩中にも見られるもので中国では一般に「隠淪」と表記されるところを日本では一般的な「倫」の字で表記している点からもこの部分を典拠・用例として用いていると考えられる。つまり菅原義高の詩には、中国の作品が詩句の典拠として用いられていると同時に、この懐紙の作品が書かれる少し前に日本で成立した『法性寺殿御集』や『本朝無題詩』の影響をも窺うことが出来る。

また、家実の弟に当たる近衛兼基の作品中にも同様の例が見られる。

〔第四函 第一四號 第三六紙〕

秋日同賦**遠近秋望多**各分一字詩〈探得雲字〉　権中納言兼基

1 遠營近郭多秋望　遠營 近郭 秋望多し
2 偏任馬蹄日漸曛　偏へに馬蹄に任せて日漸くに曛ず
3 蘭蕙苑中花色遍　蘭蕙苑の中 花色遍し
4 三千里外月光分　三千里の外 月光分かつ
5 如何籬下孤叢露　籬下 孤叢の露を如何せむ
6 看取江南一道雲　江南 一道の雲を看取す
7 無智無才無藝質　智無く才無く藝無き質
8 還慙詩席被牽群　還りて慙づ 詩席 群に牽かるることを

兼基は、尾聯にて自身のことを「無智無才無藝質」と述べているが、この句は『法性寺殿御集』の「答見重贈之佳什」の中に「無智無材無藝士、不圖今作相門尊」とあり、同じように自身を謙遜する語として用いられている。ここに挙げた例は詩会の主催者に当たる家実やその弟の兼基にとって曾祖父に当たる藤原忠通が中心となった撰集の影響が窺える点で、この詩壇の特質の一つだと考えられる。

〔第四函 第一八號 第二一紙〕

春日同賦**尋花至遠山**應教一首〈題中取韻〉　勘解由次官平親輔

1 爲翫芳花尋處々　芳花を翫ばむが爲に處々を尋ぬ

2 千程僻遠至深山　千程 遠きに僻りて深山に至る
3 思匂遙向連峯上　匂を思ひ遙かに向かふ 連峯の上
4 依色猶行幽澗間　色に依り猶ほ行く 幽澗の間
5 洞裏映霞臨欲見　洞裏の映霞 臨みて見むと欲す
6 巖邊春雪覓忘遠　巖邊の春雪 覓めて遠きを忘る
7 濃粧紅艶問其地　濃粧 紅艶 其の地を問ふ
8 樵路跡長□□□　樵路の跡長く□□□

※□□□は切られており不明

右の詩は、先の菅原淳高、義高の作品と同題を持つ平親輔の作品である。三句目と四句目では、「山」を破題する語句として「連峯」と「幽澗」が対句の形で用いられている。この二語は、『文鳳抄』という詩作の為の対句語彙集にどちらも見られるものである。また、七句目には「濃粧」と「紅艶」が句中対の形で用いられ「花」を意味しているが、これらの語も『文鳳抄』「花」の部に対句となる語として載せられている。

『文鳳抄』〔巻三、地儀部、山〕

遠山　閑山　空山　重山　高山　名山　遙嶺　重嶺　遠峯　連峯　遠岫　列岫　幽谷　深谷　空谷　絶澗　幽澗　虚澗　深洞　重巖
高巖　奇巖

『文鳳抄』〔巻八、草樹部、花〕

紅艶　紅粧　紅葩　紅鰓　紅顔　紅粉　紅氣　錦葩　錦彩　素艶　粉艶　粉粧　粉瞼　粉顔　白片　濃艶　濃粧　濃氣　奇香　異香　濃匂　清芬　異彩

〔第四函　第一七號　第四四紙〕（「花色映臺榭」）

太皇大后宮権大進大江匡範

1 紛々花色映何處　紛々たる花色 何處にか映ずる
2 臺榭之間不秘匂　臺榭の間 匂を秘せず
臺　花色映
3 香柏紅櫻籠粉艶　香柏の紅櫻は粉艶を籠む

樹　花色映

4 長楊 翠柳積芳塵　　長楊の翠柳は芳塵を積む

樹　花色映

5 燕姫舞袖 旁廻雪　　燕姫の舞袖は旁く雪を廻らす

臺　花色映

6 秦女簫聲 剩調春　　秦女の簫聲は剩へ春を調ぶ

7 始自携文餘念少　　始めて文を携えてより餘念少なし

8 心懸風月數寄身　　心は風月に懸く 數寄の身

〔注〕本懐紙は端作が欠けてしまっているが、首聯の用字、頷聯・頸聯の破題から詩題は「花色映臺榭」と考えられる。なお、同題の作品が第四函第二〇號第二一紙(平時兼)に存在する。

これは、「花色は臺榭に映ず」という題の大江匡範の作品三である。この詩中に用いられている対句の典拠について考えていく。三句目の上二字「香柏」と四句目上二字「長楊」はそれぞれ「香柏」が「臺」を、「長楊」が「榭」を表す対句として用いられている。これは、『文鳳抄』巻四の「臺榭」の部に「長楊 香柏　長楊ハ榭ノ名ナリ。」対句の形で載っており、五句目の「燕姫舞袖」と六句目の「秦女簫聲」という対句の形は『擲金抄』巻下に双貫語として用いる際の対句として同じような表現が載せられている。

『文鳳抄』〔巻四、居処部、臺榭〕長楊 香柏　長楊ハ榭ノ名ナリ

『擲金抄』四〔巻下、双貫部、居処部、臺榭〕青松 緑柳　呉娃舞袖 秦女簫聲　吹簫 酌酒　老柳 幽蘭　燕姫舞 楚王遊

ここまで、対句語彙集と本詩懐紙における対句の典拠について考えてきたが、かなり重なる部分が多いことがわかる。『文鳳抄』の成立については山崎誠氏が嘉禎元年頃と指摘している五。また、本間洋一氏は本詩懐紙と『文鳳抄』に載せられている語句に重なる点の多いことから本詩懐紙が作られる以後に成立したと指摘している六。また、『擲金抄』の成立についても建永から承元頃という指摘がある七。いずれも本詩懐紙の成立以後に成立したということになり、本詩懐紙に残されている作品が作られた際に現存するこれらを使用していたと言うことは出来ない。しかし、一つの題に対して複数の詩人が同じ対句を用いている点が本詩懐紙の作品には見受けられることから、こうした作品に先行する対句語彙集を使っていたという可能性は考えられる。また、詩作と語彙集は互いに増補し合っていく関係であり、本詩懐紙もそうした中にあったとも考えられる

二　無題詩に見る前代撰集の影響

平安中期、菅原文時によって句題詩の構成方法が確立されて以後、詩宴では専ら句題詩を詠むことが主流であった。しかし、平安末期になると無題詩が再評価されるようになる。その背景には、文人貴族の政治的な不遇があったと指摘されている[八]。文人貴族たちは、都から離れた場所においてその場の景色と共に自身の不遇を自由に表現する無題詩を詠み、詩宴の出席者と共感しながら、憂さを晴らそうとしたと考えられている。この時期に成立した藤原忠通の別集『法性寺殿御集』に句題詩と無題詩がほぼ半数ずつ収められていることや、忠通の下命により総集『本朝無題詩』が成立したことも、無題詩が広がっていたことの現れと言えよう。先に本詩懐紙の句題詩を考察した際、本詩壇の活動の少し前に成立した日本漢詩の撰集『本朝無題詩』の所収詩を踏まえる傾向があることを指摘した。本節では、無題詩における表現の特徴を見ていきたい。

最初に平親輔の「秋日於書閣言志」（第二〇號第二七紙）を見る。この詩は頸聯に「詩酒家々偏命宴、管絃處々久催遊（詩酒は家々にあり 偏へに宴を命ず、管絃は処々にあり 久しく遊を催す）。」とある。

傍線部の対は、詩宴の華やかな様子を表現する。句の元来の典拠には、『和漢朗詠集』[九]（巻上、20春興、白居易）の「歌酒家々花處々、莫空管領上陽春（歌酒家々花処々、空しく上陽の春を管領すること莫かれ）。」や、同じく『和漢朗詠集』（巻上、24春興、菅原文時）の「笙歌夜月家々思、詩酒春風處々情（笙歌の夜の月の家々の思、詩酒の春の風の処々の情）。」が考えられる。しかし、藤原忠通の「早春即事」（『本朝無題詩』巻四）に「管絃處々詠吟夜、歌酒家々遊宴春（管絃は処々にあり 詠吟する夜、歌酒は家々にあり 遊宴する春）。」とあるのは見逃せない。寧ろ、当該詩は忠通の表現に則って作られたのではないかと考える。

続いて、平時兼の「夏日於山寺即事」（第一五號第三一紙）を取り上げる。当該詩では三箇所の対偶関係に注目する。第二聯は、「向西觀得香爐火、修夏擊來紺殿鐘（西に向かひて観じ得たり 香炉の火、夏を修めて撃ち来たる 紺殿の鐘）。」である。傍線部の対偶関係は、藤原忠通の「夏日遊古寺」（『本朝無題詩』巻十）の「紺殿鐘鳴山月曙、香爐火滅水煙孤（紺殿の鐘鳴りて山月曙け、香爐の火滅して水煙孤なり）。」にも見出せる。他に用例はなく、この句を踏まえた表現と考えられる。

第四聯は、「縦交下界嘲風宴、猶憶中天滿月容（縦ひ下界 嘲風の宴に交はれども、猶ほ中天 満月の容を憶ふ）。」である。傍線部の対偶関係

は、藤原忠通の「山寺即事」（『本朝無題詩』巻十）に「嶺泉飛洗中天月、林葉落埋下界秋（嶺泉飛んで 中天の月を洗ひ、林葉落ちて 下界の秋を埋めたり）。」と、その用例を見出せる。さらに第五聯の「偏洗六根幽澗水、只問五朶故山峯（偏へに六根を洗ふ 幽澗の水、只五朶を問ふのみ 故山の峯）。」を見る。この傍線部についても藤原茂明の「春日広隆寺即事」（『本朝無題詩』巻九）に「乗月哢來幽澗水、尋花行尽故山雲（月に乗じて哢し来る幽澗の水、花を尋ねて行き尽きぬ故山の雲）。」として、同様の対偶関係が指摘出来る。いずれも語句自体の典拠は他にあるが、対偶関係まで同じものは、『本朝無題詩』の用例の他に見られない。よって時兼は、指摘した詩句の表現に拠ったと考えられる。このように三箇所の対偶関係の典拠に『本朝無題詩』の所収詩を見出せたことは、その影響力の強さを窺わせる。

更に、大江周房の「早夏於古寺即事」（第一四號第三〇紙）の頸聯について述べる。そこには、「世路嶮難 禪定水、人間比類 暮山雲（世路の嶮難 禪定の水、人間の比類 暮山の雲）。」とある。

「世路嶮難」は、藤原周光の「夏日遊林亭」（『本朝無題詩』巻六）に「世路嶮難爭謝遣、生涯蹇剝欲何如（世路の嶮難争か謝し遣らむ、生涯の蹇剝何如せんと欲する）。」とあるように、作者自身を取り囲む世間の厳しさを嘆く際に用いられる。この語句は『本朝無題詩』以前のものに殆ど用例が見られない。また、藤原忠通の「山寺即事」（『本朝無題詩』巻十）には、「世路嶮難千里浪、人間榮耀一時夢。（世路の嶮難は千里の浪、人間の栄耀は一時の夢）。」とある。これは「世路嶮難」と「人間」が対をなす例である。他に用例が見られないことから、周房の表現は、周光や忠通の表現を踏まえていると言えよう。このように、本詩懐紙のものには、『本朝無題詩』の所収詩を典拠や用例と指摘出来る語句が多く見られ、その強い影響を受けていたことが考えられる。

また、上句下三字の「禪定水」という表現にも触れておきたい。同様の語句は、『新撰朗詠集』[9]（巻下、545山寺、藤原定頼）に「禪定水清寒谷月、閼伽花老故園霜（禪定水清し寒谷の月、閼伽花老いたり故園の霜）。」と見える。「遊法住寺（法住寺に遊ぶ）」という詩題をもつ無題詩からの摘句で、他に「禪定水」という表現は見られない。つまり、この句には、『新撰朗詠集』からの影響も想定される。他に『新撰朗詠集』の影響を窺わせるものとしては、先にc、dから復元した時宗の無題詩「秋日於山寺言志」が挙げられる。頷聯の上句「山月」と下句「溪嵐」の対偶関係は、『新撰朗詠集』（巻下、569僧、橘在列）「溪嵐吹樹搖秋思、山月穿窗訪夜禪（溪嵐樹を吹きて秋の思ひを揺かす、山月窓を穿ちて

夜の禅を訪ふ)。」にも見える。『新撰朗詠集』の句は、『扶桑集』からの摘句だが、『扶桑集』では「溪嵐」が「溪風」となっている[一〇]。このことは、「溪嵐」を用いた時宗が、『新撰朗詠集』を詩作の拠りどころとした事を示唆するのではないだろうか。更に、この対偶関係が想定されるのならば、cとdを同定する際の根拠を補強することにもなるだろう。

『新撰朗詠集』は、藤原基俊が『和漢朗詠集』に倣って詩文の摘句と和歌を編纂した撰集である。成立時期は定かではないが、保安三年(一一二二)から長承三年(一一三四)頃と推定されている[一一]。更に、柳澤良一氏は、長承二年(一一三三)の中宮亮顕輔歌合における藤原基俊の判詞等を根拠に、『新撰朗詠集』が後代に与えた影響は成立後のわりと早い時期に見られると考察している[一二]。また、元久の詩歌合(一二〇五年)における藤原良経の句の対偶関係にもその影響が指摘されている[一三]。本詩懐紙の成立と同時期のものに『新撰朗詠集』の影響が指摘されていることは、本詩懐紙の作者もそれを受容する環境にあったことを示唆するのではないだろうか。

ここまで、本詩懐紙の無題詩の検討を通して、『本朝無題詩』所収のものを受容していることがより明確になった。また、『新撰朗詠集』の影響も想定されることを指摘しておきたい。

三　家実詩壇の特質

本詩懐紙の無題詩を考察することで、『本朝無題詩』の影響が明確に見出された。これを踏まえ、本節では、家実詩壇の特質について考えたい。残念ながら、本詩懐紙には家実のものが全く残されていないが、家実の弟、兼基と道経のものは残されている。そこで彼らの無題詩・句題詩双方を検討したい。

まず、兼基の「三月盡日山寺即事」(第一七號第二二紙)を見る。首聯には、「幽深寺裏動心神、歩々行々引友臻(幽深たる寺裏心神を動かす、歩々行々友に引かれて臻る)。」という表現がある。同様の表現は、藤原忠通「春三首　其一」(『本朝無題詩』巻四)の首聯に「歩々行々最易臻、伽藍便是洛陽鄰(歩々行々最も臻り易し、伽藍便ち是れ洛陽の隣なり)。」と見える。いずれも遊山に向かう様子を詠んでおり、当該詩は忠通の表現を踏まえていると考える。

第一六號第六紙(g)と第五紙(h)は、兼基と道経が同じ詩宴に出席した際に詠んだ句題詩である。比較検討をする為、次に二紙を並べて掲

出する。

g、第四函第一六號第六紙

冬日同賦**漁樵雪裏情**詩〈題中取韻〉兼基

1 三冬飛雪望方清　三冬 雪を飛ばして望方に清し
2 想像漁樵箇裏情　想像る 漁樵 箇裏の情
3 嚴子瀨邊花散思　厳子瀬の辺 花散る思
4 鄭公溪北月寒行　鄭公渓の北 月寒き行
5 負薪已及雲黄夕　薪を負ひて已に及ぶ 雲の黄なる夕
6 垂鉤遲留風白程　鉤を垂れて遅留す 風の白き程
7 可恥詠吟詩句拙　恥づべし 詠吟 詩句の拙きことを
8 紛々皓々玉塵盈　紛々 皓々 玉塵盈ちたり

h、第四函第一六號第五紙

冬日同賦**漁樵雪裏情**一首〈題中取韻〉　權中納言道經

1 繽紛飛雪滿旁清　繽紛たる飛雪 満ちて旁く清し
2 此裏漁樵動感情　此の裏 漁樵 感情を動かす
3 遠岸影寒垂鉤曉　遠岸 影寒し 鉤を垂るる暁
4 連峯光沍負薪程　連峯 光沍えたり 薪を負ふ程
5 鄭公溪北暮風白　鄭公渓の北 暮風白し
6 嚴子瀨邊冬月明　厳子瀬の辺 冬月明らかなり
7 愁侍勝遊詩席末　愁ひに勝遊詩席の末に侍り

8 才疎藝少叵揚名　才疎かにして藝少なく名を揚げ叵し

二紙は、正治二年(一二〇〇)十一月二六日の詩宴におけるもので、『猪隈関白記』にその記録が残る一四。句題「漁樵雪裏情(漁樵雪裏の情)」は、古句に典拠が見えず、「漁樵」という双貫語を含む新題であろう。ここでは、傍線を引いた二紙の特徴的な語句に注目し、検討したい。

最初にgの第一句「三冬雪飛望方清」を見る。これと類似の表現が『法性寺殿御集』の「雪飛南北間(雪は飛ぶ南北の間)」に「三冬飛雪望猶新、自北自南飄玉塵(三冬雪を飛ばして望猶ほ新し、北より南より玉塵を飄す)。」と見える。他のものに用例はなく、兼基が忠通の表現に拠ったと考えられる。

g、hを比較すると、二紙には共通する語句が多い。次に二重傍線を引いた共通部分について検討する。まず、「風白」は夕暮れに雪混じりの風が吹き、眼前が真っ白になった様子を表す。gと同じ表現が『法性寺殿御集』「遠近唯飛雪(遠近唯だ雪を飛ばす)」に「華灯一点沙飛暁、画角三声風白程(華灯 一点 沙飛ぶ暁、画角 三声 風白き程)。」と見える。『法性寺殿御集』は「風白程」で句題の「雪」を表し、g、hも同様に句題の「雪」を表すことから、この表現は忠通の表現に拠ると言える。また、hの「暮風白」と「冬月明」とが対をなす用例として、藤原忠通の「初冬即事」(『本朝無題詩』巻五)の「呉江波動暮風冷、漢苑枝疎暁月明(呉江の波動しくして暮風冷じ、漢苑の枝疎かにして暁月明かなり)。」が挙げられる。この部分もhの表現の拠り所と考えられる。

続いて「垂鉤」と「負薪」は、双貫語「漁樵」の言い換えとして用いられている。「垂鉤」は釣針を垂れるという意味で、「漁」を表し、対をなす「負薪」は、採った薪を背負うという意味で「樵」を表すと考えられる。

最後に「嚴子瀨邊」と「鄭公溪北」について述べたい。「嚴子瀨邊」は、後漢の厳光が一度は光武帝の招きに応じて出仕したが、結局隠遁し、釣をして過ごしたという故事に拠る。この故事は『後漢書』や『蒙求』に載る。また、『白氏文集』(3533)「亭西牆下伊渠水中置石、激流潺湲成韻、頗有幽趣、以詩記之(亭西の牆下の伊渠水中に石を置きしに、流に激し潺湲として韻を成し、頗る幽趣有り、詩を以て之を記す)。」にも「忽疑嚴子瀨、流入洛陽城(忽ち疑ふ厳子瀨、流れて洛陽城に入るかと)。」と語句の用例が見られ、「漁」を言い換える。

対をなす「鄭公溪北」は、後漢の太尉鄭弘が、薪を取りに行った若耶溪で仙人と出会い、夕に北風が吹くように頼んだ故事を典拠とする。『後漢書』にその故事が載っており、「樵」を言い換える。但し、『新撰朗詠集』(巻下、454山)に「巫女嶺南行雨冷、鄭公谿北遠嵐餘(巫女嶺

の南に行雨冷まじ、鄭公渓の北に遠嵐余れり）。」という藤原明衡の詩句があることを指摘しておきたい。二紙と同一の語句である点から直接的には明衡の表現を踏まえていると想定される。

先に触れた『新撰朗詠集』成立の背景には、当時、撰者の基俊を高く評価した藤原忠通の意向が強く働いていたと考えられている[一五]。つまり、この『新撰朗詠集』も、『本朝無題詩』や『法性寺殿御集』等と同様に忠通詩壇の産物と言え、指摘した詩句からその受容を指摘出来るだろう。前節に続き、表現に影響を与えたものを中心に考察すると、忠通の影響下に成立した撰集の影響を多分に見出せる。

では、詩壇を形成した作者達が、忠通の文学的活動をどのように捉えていたのかという点を考えたい。そこで、匡範の「詩筵先勸酒（詩筵 先んじて酒を勧む）」（第一七號第三六紙）という句題詩を取り上げる。この詩の第七句に「天永相同今建久（天永に相同じ今建久）」という表現が見られる。天永とは、忠通を中心とした詩宴が催されるようになった時期である。『中右記』[一六]の天永二年（一一一一）十月五日条には、「今日、中納言殿（忠通）初有御作文。」という忠通の作文始の記事が見える。そこには、まだ詩を始めたばかりの忠通が、席上、素晴らしい詩を作り、出席者を驚かせたという逸話が記されている。また、建久年間は、先述したように、家実を中心とする詩壇の活動が始まった時期に当たる。匡範は、二つの詩壇の活動が始まった時期を比較し、家実の作文始が天永の忠通のものに則って行われたことや、家実の詩壇が忠通の詩壇を踏襲していることを同じであると表現したのではないだろうか。匡範の述懐における忠通詩壇への言及は、家実の詩壇が忠通を中心とした文学的活動を成立の当初から意識していたことを窺わせる。こうした点から、家実詩壇の活動では、忠通詩壇の産物である『本朝無題詩』や『法性寺殿御集』、『新撰朗詠集』を積極的に受容し、そこに用いられている詩句を意図的に詩に用いていたのではないかと考える。

おわりに

句題詩・無題詩の表現の分析を通して、前代にも用いられてきた中国詩文を典拠とする表現が見られた。その一方で、藤原忠通がその成立に深く関わる『本朝無題詩』、『法性寺殿御集』等、本邦詩文も典拠として重要な位置を占めている。更に『新撰朗詠集』の影響も想定される。先の句題詩の考察では、その受容を傾向として指摘するに留まっていたが、無題詩の考察から、このことが明確に見出されたと言える。同時に、そうした撰集の受容のあり方や残された詩の内容から、家実の詩壇を構成する作者が忠通の詩壇を強く意識していた姿を窺える。つまり、忠通の文学的活動に範を仰ぎ、自分達の文学的活動をその継承するものとして捉えていたと考えられる。家実と同時期の他の詩壇については、残された作品が少ない為、その特質を窺うことは困難である。しかしながら、家実を中心とする詩壇が、忠通を中心とした詩壇の産物を積極

的に取り込み、詩を詠んでいたことは、家実詩壇の顕著な傾向として、詩壇の特質であると考えられる。そして、本詩懐紙は、文学史上、忠通詩壇の産物となる日本漢詩の撰集の最初の受容例として、位置づけることが出来るだろう。

一 以下、本文は『法性寺殿御集』(尊経閣叢刊、育徳財團、一九三七年)による。

二 以下、『本朝無題詩』所収の詩句に関しては、本間洋一『本朝無題詩全注釈』(新典社、一九九二～一九九四)の本文、訓読、注釈を全般にわたり参考にさせて頂いた。○樵客・隠倫〔本朝無題詩巻一、山家春雪、藤原茂明〕樵客没蹤尋始至、隠倫寄望聚將看。

三 以下に主要な語句の典拠を挙げる。○香柏〔太平御覧 巻一七七、居處部五、臺上〕又史記曰、漢武帝起柏梁臺高数十丈、悉以香柏香柏聞數十里。○長楊〔文選 巻一、西都賦、班固〕於是天子乃登屬玉之館、歴長楊之榭、覽山川之體勢、觀三軍之殺獲。原野蕭條、目極四裔、禽相鎭壓、獸相枕籍。〔李善註〕漢書宣紀曰、行幸長楊宮屬玉觀。服虔曰、以玉飾因名焉。三浦黄圖曰、上林有長楊宮。爾雅曰、閣謂之臺有木謂之榭。○芳塵〔文選、月賦、謝莊〕陳王初喪應劉、端憂多暇。緑苔生閣、芳塵凝榭。〔李善註〕言無復娛遊、故緑苔生凝也。○燕姫之袖〔和漢朗詠集 巻上、鶯、69菅原文時〕燕姫之袖暫收、猜撩亂於舊拍、周郎之簪頻動、顧閒關於新花。

四 国文学研究資料館編、阿部泰郎、山崎誠編集責任、岡部快圓、松野陽一監修『擲金抄』(真福寺本善本叢刊 第一一巻(文筆部一)、臨川書店、一九九八年)参照。

五 山崎誠「菅原為長撰文鳳抄伝本攷」(『国文学攷』八六、一九八〇年六月)。

六 本間洋一『文鳳抄』編纂素材についての一考察」(『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二年、初出は一九八八年)

七 佐藤道生『擲金抄』解題」(注七と同書)にて、その成立は撰者である藤原孝範が大内記の職に合った建永から承元(一二〇六～一二一〇)と指摘されている。

八 本間洋一「『本朝無題詩』―その表現世界―」(『国文学解釈と鑑賞』第五十三巻第三号、一九八八年三月)、佐藤道生『本朝続文粋』と『本朝無題詩』」(『三田国文』第十二号、一九八九年十二月)、藤原克己「〈書評〉本間洋一注釈『本朝無題詩全注釈 二』」(『同志社女子大学日本語日本文学』第五号、一九九三年十月)。

九 以下、『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集／新撰朗詠集』(和歌文学大系四七、明治書院、二〇一一年)の本文、作品番号、訓読、注釈を参照した。

一〇 〔扶桑集巻七、贈答部、橘在列〕溪風吹樹搖秋思、山月穿窗訪夜禪。

一一 大曾根章介「新撰朗詠集」(『大曾根章介日本漢文学論集』第二巻、一九九八年、汲古書院、初出一九八一年)、佐藤道生『新撰朗詠集』の成立」(『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年、初出一九九四年)、柳澤良一『新撰朗詠集』の成立」(『新撰朗詠集全注

釈』一～四、新典社、二〇一一年）。

一二 柳澤良一「『新撰朗詠集』の後代への影響管見」（『和漢比較文学叢書 4　中古文学と漢文学Ⅱ』汲古書院、一九八七年）。

一三 堀川貴司氏は元久詩歌合における良経の作品中に『新撰朗詠集』の影響が見られることを指摘されている。（「詩合・詩歌合について―平安から室町まで―」『斯文』第一二二号、二〇一三年三月）。

一四 〔猪隈関白記、正治二年十一月二十六日条〕天晴、有作文、漁樵雪裏情。

一五 前掲注一一論文。

一六 本文は、『増補 史料大成』（臨川書店、一九七五年）に拠る。

第四章　『文鳳抄』『擲金抄』の享受

はじめに

平安中期に句題詩(漢字五文字からなる詩題をもつ詩)の構成方法が確立されたことは、多くの貴族たちが詩を詠むことを容易にした。詩宴が頻繁に催される中で、作詩の指南書の編纂が求められるようになった。そして平安後期には、中国の類書(徐堅撰『初学記』等)に倣った本朝の類書編纂の動きが高まっていく。

続く鎌倉期においても詩宴は頻繁に催され、多くの対句語彙集や秀句抄が成立した。しかし、その殆どは佚書である。その為、現存する『文鳳抄』や『擲金抄』は、当時の対句語彙集の姿を窺うことの出来る貴重な資料だと言えよう。本稿では、こうした対句語彙集の利用方法について検討し、実際に二書が利用されたと考えられる詩懐紙の内容を考察していきたい。

一　『文鳳抄』、『擲金抄』について

最初に、『文鳳抄』、『擲金抄』について説明しておきたい。

『文鳳抄』は、菅原為長(一一五八～一二四六)が撰した対句語彙集である。成立時期については、山崎誠氏が嘉禎元年(一二三五)頃と指摘した[一]。これに対して、本間洋一氏は、元久元年(一二〇四)頃から建暦元年(一二一一)頃と考察した[二]。本書の構成は、天象部、歳時部、地儀部のような中国の類書に倣った部立からなる巻と略韻や一字抄を収める巻からなる。各部立は、前半部に一字の見出し語(たとえば、天、日、月等)を、後半部に二字の見出し語(双貫語という。たとえば日月、月露等)を収める。そして、見出し語毎に関連する対語が集成されている。また、対語の一部には典拠となる注文が付されている。

『擲金抄』(存巻中下、巻中の一部闕)もまた、『文鳳抄』と同様の構成をもつ対句語彙集である。『文鳳抄』と大きく異なる点は二つある。一点目は、『文鳳抄』では、同一部立内にある非双貫語と双貫語とを別立にし、新たに双貫部を設けている点である。二点目は、対句を形成しない例句のみを収める絶句部を設けている点である。佐藤道生氏は、所収句等の整理を通じて、撰者は南家の儒者・藤原孝範(一一五八～一二三三)であり、成立時期は孝範が大内記の職にあった建永から承元(一二〇六～一二一〇)頃と考察する[三]。

このように、二書の撰者や成立時期等の整理は、詳しく行われてきた。その際、二書は、作詩の為の指南書と位置づけられる。しかし、具

体的な利用方法や成立後の利用状況ついては、あまり述べられていない。そこで、次節以下では、二書が成立した鎌倉期の詩懐紙から対句語彙集利用について検討したい。更に、成立後の利用の可能性についても言及したいと考える。

二　句題詩の構成方法

これらの対句語彙集を検討する前提として、句題詩の構成方法を説明する。句題詩とは、漢字五文字の詩題(句題)をもつ詩のことである。句題には、古句の一句を用いることが多かったが、時代が下るにつれ題者の案出する新題が増えていった。句題詩は、当時の一般的な詩体に倣い、大半が七言律詩で作られた。七言律詩であれば、押韻、平仄、頷聯・頸聯を対句にするという近体詩の規則を守れば良いが、平安中期以後の句題詩には、本邦独自に形成された規則が存在した[四]。

首聯(一句目・二句目)では、詩題に用いられている漢字五文字を全て用いて題意を表現する。この聯を「題目」と呼ぶ。なお、詩題の五文字をこの聯以外に用いてはならない。

頷聯(三句目・四句目)と頸聯(五句目・六句目)では、句題の五文字を用いずに題意を敷衍する。これを「破題」と呼ぶ。句題は、実字(名詞)と虚字(名詞以外の品詞)から構成される。頷聯・頸聯では、少なくとも実字を別の語に言い換えなければならない。更に、どちらか一方の聯では、故事を用いて題意を表現することが望ましく、この場合は「破題」ではなく「本文」と呼ぶ。また、句題は、双貫語という並列構造をもつ二字の熟語(山水、河海等)を含む場合がある。原則として破題は、句毎に完結させなければならないが、双貫語の場合、一句中に全てを詠み込むことが困難である。そこで、双貫語を上句と下句に分け、破題するという方法をとる。たとえば、詩題が「山水」を含む場合、上句で「山」を言い換えたならば、下句で「水」を言い換える必要がある。

尾聯(七句目・八句目)に至り、はじめて詩の作者は自身の心情を自由に表現することが許される。これを「述懐」と呼ぶ。内容としては、詩宴の主催者や詩宴の場、出席者を賞賛する一方、自身の不遇な状況を嘆くなど自謙の句が見られることが多い。

次に、『文鳳抄』や『擲金抄』が作られた鎌倉期の詩においても、こうした句題詩の構成方法が守られていたことを確認しておきたい。取り上げるのは、『猪隈関白記紙背詩懐紙』[五]所収、菅原在茂の句題詩である。これは、建久七年(一一九六)から元久元年(一二〇四)頃に近衛家実(一一七九～一二四三)が主催した詩宴にて提出された詩懐紙のことで、二書とほぼ同時期に成立している。

冬日同賦雪飛藪澤中各分一字應教詩〈探得形字〉

大學頭在茂

1 雪飛四面望旁冷　雪四面に飛びて望旁く冷じ

2 藪澤之中在意銘　藪沢の中 意に在りて銘す

3 雲夢高低天惣白　雲夢 高低 天惣て白し

4 孟諸遠近地無青　孟諸 遠近 地青きところ無し

5 言談入月晉人思　言談し月に入る 晉人の思

6 顦顇吟花楚客形　顦顇し花を吟ず 楚客の形

7 唯怪老頭雖作鶴　唯だ怪しむ 老頭 鶴作りと雖も

8 多年尚未達卑聽　多年尚ほ未だ卑聽に達せざることを

詩題の「雪飛藪澤中(雪は藪沢の中に飛ぶ)」は、古句に典拠をもたない新題である。この詩題には、双貫語「藪澤」が含まれている。首聯では、傍点を付したように詩題の五文字が全て用いられている。

頷聯上句「雲夢」は、楚の藪の名である為、「藪」を言い換えている[六]。対偶関係にある「孟諸」は、宋の大澤の名である為、「澤」を言い換えている。上句「天惣白」は、雪によって空が見渡す限り真っ白である様子を表す。それと対をなす「地無青」では地面が雪に覆われ草が全く見えない様子を表す。いずれも「雪飛」を言い換えている。したがって、頷聯は、上句で「雪飛藪中」を、下句で「雪飛澤中」を表し、一聯全体で詩題を破題している。

頸聯上句「言談」・「晋人思」は、晋の裴頠がその博識から「言談の林藪」と呼ばれた故事を典拠とし、「藪」を言い換えている。それと対をなす「顦顇」・「楚客形」は、楚から追放された屈原が澤畔にてさまよいながら、歌を吟じた故事を典拠とし、「澤」を言い換えている。上句と下句の双方で、故事を用いて詩題が言い換えられており、本文が為されていると言える。また、「入月」と「吟花」は、詩題の「雪飛」を表現していると考えられる。雪を月や花に喩える用例は、詩歌によく見られる表現である。したがって頸聯もまた、上句で「雪飛藪中」を、下句で「雪飛澤中」を表し、一聯全体で句題を破題している。

尾聯上句「作鶴」は、老いて頭髪が鶴のように白くなったことをいう。この表現は、『和漢朗詠集』巻上「雪」七に「立於庭上頭為鶴、坐在爐辺手不亀(庭上に立てれば頭鶴為り、坐して爐辺に在れば手亀まらず)。」という用例がある。下句「卑聽」は、臣下の言葉が天子に聞き届けられることを意味する(『毛詩』小雅「鶴鳴」)。尾聯にて在茂は、年老い、頭髪が真っ白になっても臣下である自身の声が上に聞き届けられず、出世しないことを嘆いている。ここまで、当時の作詩においても句題詩の構成方法が守られていたことを確認出来た。

三　対句語彙集の利用方法

前節で見た句題詩の構成方法を念頭に置き、『文鳳抄』の利用方法を検討したい。まず、『文鳳抄 八』(巻一、天象部)「雪」の項(見出し語)に見られる対語の一部を掲出する。

雪

月、花、練、粉、紈、光、色、寒、冷、冴、封、鏁、白、飛、積、埋、凝、點、**皆以一字有雪意**。

寒輝、清輝、素輝。寒色、冷色。軽質、寒光。素光、皓色。

袁戸、袁門、袁扉。

漢時大雪。洛陽令出安行。民家皆除雪出。袁安門無行路。安已死、令人除雪。入戸見、安偃臥。問云、何不出。安云、大雪人皆餓、不宜干人。賢挙之。録異傳

月光冷、**花色**軽。落粧散、柳絮飛。

玉塵、鉛粉、**銀粉**、素練。銀丸。

『文鳳抄』に立てられている見出し語は、全て実字であり、詩題を構成する実字に一致する。実字は、句題詩の頷聯・頸聯において別の語

に言い換えなければならない。

見出し語「雪」の下に列挙される語句を見ると、一字の列挙の後に「皆以一字有雪意。（皆一字を以て雪意有り。）」と見える。つまり、雪を別の一字で比喩的に言い換えた語の後に二字、三字で言い換えた語が続いていることがわかる。全て、雪と表現されているが、そこに雪の文字は見られない。これは、頷聯・頸聯にて破題する為に用いる語彙を集成したものであるからに他ならない。この点を「雪」という字を詩題に含む実例で確認しよう。掲出する詩は、『猪隈関白記紙背詩懐紙』所収、平親輔の作品である。

冬日同賦雪中催宴遊一首〈以情爲韻〉

親輔

1 雪中遠近眺望程　雪中　遠近　眺望する程
2 遊宴頻催感興幷　遊宴して頻りに催す　感興幷せたり
3 **花色**冬寒梁菀思　花色　冬寒し　梁苑の思
4 **月光**曉冱楚臺情　月光　曉に冱えたり　楚臺の情
5 管絃窗下**玉塵**散　管絃　窓下　玉塵散る
6 詩酒座間**銀粉**輕　詩酒　座間　銀粉軽し
7 才拙性疎愚昧□　才拙く性疎かにして愚昧の□
8 好文亭席獨慙名　文を好む亭席　独り名を慙ぢたり

※□は裁断の為不明[九]

この詩は、「雪中催宴遊（雪中に宴遊を催す）」という句題詩である。頷聯では、「花色」が空を舞う雪を花に喩え、それと対をなす「月光」が雪の輝きを月明かりに喩えることで、それぞれ「雪」を言い換えている。頸聯では、「玉塵」が雪を玉のように輝く塵に喩え、「銀粉」が雪を銀の粉に喩えることで、「雪」を言い換えている。

ここで、『文鳳抄』の「雪」の見出し語以下の部分と当該詩とを比較、検討しよう。すると、傍線を引いた頷聯の「花色」と「月光」、頸聯の「玉塵」と「銀粉」について、両者が一致することを指摘出来る。したがって、『文鳳抄』の語彙と当該詩の語句とが同じ意味で用いられていることがわかる。

この一致から、句題詩を構成する際の本書の利用方法を考えたい。当該詩のように詩題に「雪」を含む場合には「雪」の項目から、「宴遊」を表現する為には「宴遊」の項目から、語句を選び、対句を構成すれば良いのである。その際、注文の付く語句を用いた場合には、故事を踏まえた事になり、「本文」を行った事になろう。こうした対句語彙集を用いれば、作者は、詩題の実字に関する対語を知らずとも、対句を構成出来、容易に句題詩を作ることが出来たと考える。つまり、『文鳳抄』や『擲金抄』の構成は、句題詩で、頷聯・頸聯の破題の為に対句を構成する際、非常に有効であったと言える。また、親輔詩と『文鳳抄』の語句には一致する点が多い。『文鳳抄』は、本詩懐紙よりも後に成立している為、親輔が本書を利用したとは言えない。ただ、こうした一致が確認出来たことは、親輔が『文鳳抄』のような対句語彙集を利用したことを示唆しているのではないだろうか。

続いて、『文鳳抄』や『擲金抄』等が成立した鎌倉期における対句語彙集利用の可能性を検討したい。検討の対象は、『猪隈関白記紙背詩懐紙』所収詩である。

前節にて、菅原在茂の「雪飛藪澤中」という句題詩を見た。これと同じ詩題をもつ大江周房、平親輔の詩がある。

大江周房詩の頸聯には、「悉鋪白沙雲夢地、剩翻銀粉孟諸程(悉く白沙を鋪く 雲夢の地、剩へ銀粉を翻す 孟諸の程)。」とある。在茂詩と同様、「雲夢」・「孟諸」の対句が、双貫語「藪澤」を言い換える為に用いられている。また、平親輔詩の頷聯には、「花飄不馥言談處、月冱旁明遊獵程(花飄りて馥しからず 言談の処、月冱えて旁く明らかなり 遊猟の程)。」とある。この詩では、「言談」が先にも見た裴頠の故事を用いて「藪」を言い換えており、在茂詩と一致する。

このように、複数の詩に詩題を言い換える対語が共通する例は、本詩懐紙の作品中に散見される。

まず、「惜春山路閒(春を惜しむ山路の間)」詩群を見る。この詩群の作者には、源家俊、大江匡範、菅原在高、近衛兼基、平知基、平親輔がいる。源家俊詩の頸聯に、「古蹤花殘樵客思、□棲鶯老隱倫情(古跡 花残る 樵客の思、□棲 鶯老ゆ 隠倫の情)。」とある。下三字「樵客思」は、「樵客」が山に住むきこりを表し、「隱倫情」は、「隱倫」が世間から離れ、山などに隠遁する人物を表す。つまり、「樵客思」と「隱倫情」という対偶関係は、「山路」を言い換える。これは、平親輔詩の頸聯にも「恨半日傾樵客思、勞□霞散隱倫情(半を恨み日傾く 樵客の思、□を労ひ霞散る 隠倫の情)。」と見出せる。「樵客」と「隱倫」という対偶関係は、『本朝無題詩』一〇(巻一、山家春雪)の藤原茂明詩にも「樵客没蹤尋始至、隱倫寄望聚將看(樵客 跡を没し尋ねて始めて至り、隠倫 望を寄せ聚まりて将に看んとす)。」と見出せる。しかし、三字の対偶関係が全く同じであるものは、当該の二紙だけである。

続いて、「蟬響滿東西(蟬響東西に満つ)」詩群を見よう。詩題には、「東西」という双貫語が含まれている。詩の作者には、平時宗、平時兼、敦□[二]がいる。平時宗詩の頷聯は、「新月光前聞更冷、斜陽影下耳相驚(新月 光前に聞きて更に冷じ、斜陽 影下に耳相驚く)。」とある。これは、「新月」が東に出たばかりの月を意味し、「東」を言い換えている。対となる「斜陽」は、傾きかかった太陽の意で「西」を言い換えている。この対偶関係は、同じ詩宴で詠まれた平時兼詩の頷聯にも「斜陽傾處調琴曲、新月昇時擊磐聲(斜陽傾く処 琴を調ふ曲、新月昇る時 磐を撃つ声)。」と見出せる。

このように、同じ詩題をもつ詩の間で対語が共通することは、参加者の間に共通する対句語彙集の存在を示唆していると考える。特に双貫語を言い換える対偶関係が一致している例を見出せたことは、その考えを補強するものとなるだろう。本資料が詩懐紙である点から、二書との関わりを述べるのは、困難である。ただ、二書に先行する対句語彙集が詩宴の出席者の間で共有されており、二書の撰者もそれを目にしていた可能性は、指摘出来るだろう。

四　『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』について

前節では、『文鳳抄』や『擲金抄』と同時期に成立した『猪隈関白記紙背詩懐紙』所収詩を考察した。本節では、時代を少し下げ、二書を利用した可能性の高い『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』を用いて、その実態を検討したい。

『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』は、近衛兼教(一二六七～一三三六)が高山寺に奉納した『五部大乗経』の紙背文書である。その成立時期は、弘安から永仁(一二八〇年代～一二九〇年代)頃と推定される。これは、兼教が主催する詩宴にて提出された詩懐紙で、後に反故となり、その紙背が料紙として用いられている。詩懐紙は現存するものが少ない為、鎌倉期の形式や詩の内容を知る上で、非常に貴重な資料だといえよう。元来、高山寺に納められていたが、後にその一部が寺外に流出してしまった。その散佚後の状況や、そこに名前の見える作者については是澤恭三氏によって整理されている[一二]。また、堀川貴司氏は、本詩懐紙の形式を整理され、「猪隈関白記紙背詩懐紙とほぼ同様の場における三～四世代後の様子が窺える資料」と述べる[一三]。東京大学史料編纂所は、幸田成友氏が本詩懐紙をまとまって所蔵していた時に書写されたものを「鎌倉末名家詩懐紙」として所蔵している。

本詩懐紙は、料紙として用いられる際、天地左右が裁断された為、出席者の名前や詩の内容が完全にわかるものは少ない。名前を確認出来る作者には、近衛兼教、源顕資、平仲親、平親基等が挙げられる。彼らは『猪隈関白記紙背詩懐紙』に作者として名前が見える人物の子孫で

あり、近衛家と非常に繋がりが深い人々である。堀川氏が指摘するように、本詩懐紙の作品が作られた状況は『猪隈関白記紙背詩懐紙』に類似するといえよう。これまで、その存在について触れられてはきたものの、懐紙の詩の内容について考察されてはこなかった。そこで次節以下では、詩の内容の考察を通して、『文鳳抄』、『擲金抄』を含む対句語彙集の利用について考えていきたい。

五　『文鳳抄』、『擲金抄』利用の可能性

『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』には、「右近衛権中将」、「右近衛中将」という官職名と花押のみ記された懐紙が散見される。まず「右近衛権中将」と記す人物の作品を掲出する。

秋夜同賦入夜有虫聲詩〈以便爲韻〉

右近衛権中将［花押］

1 □従露霑唯入夜　□従ひ露霑ふ 唯だ夜に入る
2 草□唧々有虫聲　草□唧々として虫声有り
3 鳧鐘未報破夢處　鳧鐘 未だ報ぜず 夢を破る處
4 虬漏頻移滿耳程　虬漏 頻りに移る 耳に満つる程
5 野外怨深敧枕思　野外 怨み深し 枕を敧つる思
6 叢端韻急擧燈情　叢端 韻急なり 燈を挙ぐる情
7 不堪自本催時興　堪へず 本より時興を催し
8 此□眺望□□□　此□眺望□□□　※□は裁断の為不明

「入夜有虫聲（夜に入りて虫声有り）」という詩題をもつ句題詩である。この詩題は、藤原忠通の別集である『法性寺殿御集』に見られる。詩題の典拠はなく、忠通が詩を作った際に、新題として案出されたものであろう。当該詩の場合、先祖である忠通が用いた詩題を子孫の兼教が流用したものと考える。

当該詩は、句題詩である為、頷聯・頸聯では詩題を破題する必要がある。ここでは、頸聯に注目したい。上句では、「野外怨深」が、外で虫が秋の終わりを怨んで鳴いていることを意味し、詩題の「有虫聲」を言い換える。「敧枕思」は、夜になり枕を傾け、虫の声に聞き耳を立

てることを意味し、「入夜」を言い換える。下句では、「叢端韻急」が、叢で鳴く虫の音がせわしいことを意味し、「有虫聲」を言い換える。また、「擧燈情」は、夜になり燈をつけることを意味し、「入夜」を言い換えている。これにより、各句で詩題が破題されていることがわかる。

この内、詩題の「虫聲」を言い換える「野外怨深」・「叢端韻急」という対偶関係は、『文鳳抄』(巻九、鳥獣部)の「虫」の項目に「叢端韻急、野外怨深」とあるのと一致する。他に用例は見えず、当該詩の作者は、この部分を参考にして詩を作ったと考える。『文鳳抄』の影響を指摘出来る詩は他にも見られる。次に、右近衛中将の詩を掲出する。

三月三日同賦**酌酒對桃花**一首　〈以粧爲韻〉

右近衛中将［花押］

1 □莱遍對桃花艶　□莱 遍く桃花の艶に対ふ
2 酌酒□朝勤感腸　酒を酌む □朝 勤めて腸に感ず
3 蓮子幾廻□□艶　蓮子は幾廻りぞ □□の艶
4 荊南餘味万年□　荊南の餘味 万年の□
5 霞光旁染玉山下　霞光は旁た染む 玉山の下
6 火□無銷藍水傍　火□は消ゆること無し 藍水の傍
7 一詠一吟詩席興　一詠一吟 詩席の興
8 此中与友□□□　此の中に友と□□□

※□は裁断の為不明

本詩懐紙は、三月三日の詩宴にて作られている。「酌酒對桃花(酒を酌みて桃花に対ふ)」という詩題は、先に取り上げた『猪隈関白記紙背詩懐紙』に見える。『猪隈関白記』一四正治元年(一二〇〇)三月三日条に、「有作文。題云、酌酒對桃花、以春爲韻。在茂朝臣獻之。(作文有り。題に云ふ、酒を酌みて桃花に対ふ、春を以て韻とす。在茂朝臣、之を献ず。)」とあり、詩宴に関する記録が残されている。詩題の典拠はなく、在茂が新題として案出したものであろう。当該詩は、同じ三月三日の詩宴の題として、先祖の家実の詩宴での詩題を流用したと考える。

頷聯の「蓮子幾廻」・「荊南餘味」という対偶関係に注目したい。上句「蓮子」は、『白氏文集』(1330、郡樓夜宴留客)の「艶聽竹枝曲、香傳蓮子盃(艶は竹枝曲に聴き、香は蓮子盃を伝ふ)。」を典拠とし、盃を意味し、詩題の「酌酒」を言い換えている。下句「荊南」は、非常に

おいしい酒で有名な地の名前で、「酌酒」を言い換えている。「酌酒」を言い換える対偶関係は、『文鳳抄』(巻六、飲食部)の「酒」の項に「蓮子幾廻、荊南餘味。蓮子ハ盃名ナリ。」とあるのと一致する。また、『擲金抄』(巻中、飲食部)の「酒」の項目にも「蓮子幾廻、荊南餘味」とあり、一致する。全く同じ対偶関係をもつ用例は、他になく、二書に列挙された対語とのみ一致することは見逃せない。したがって、詩の作者が、二書を参考に詩を作ったのではないかと指摘しておきたい。

ここで、『文鳳抄』と同様の対句語彙集である『擲金抄』を典拠とする可能性が出てきた。その可能性から、同じ作者の次の作品を検討したい。

冬日同賦雪深樵隠家詩〈題中取韻〉

右近衛中将［花押］

1 樵隠家□多感事　樵隠の家□ 感ずる事多し
2 安露□□雪方深　安露□□ 雪方に深し
3 九冬花陰負薪思　九冬 花陰 薪を負ふ思
4 千里月前練策□　千里 月前 策を練る□
5 溪北嵐□寒雨地　溪北 嵐□ 寒雨の地
6 □陽日暮白雲□　□陽 日暮る 白雲の□
7 □□□□□□□　□□□□□□□　※□は裁断の為不明

頸聯上句「溪北」と対偶関係にある「□陽」の欠字について、その推定を試みたい。この詩は、「雪深樵隠家(雪深し樵隠の家)」という詩題をもつ句題詩である。この詩題に含まれる「樵隠」は、双貫語である為、頷聯・頸聯において上句と下句に分けて詠む必要がある。上句「溪北」は、後漢の鄭弘が若耶溪できこりをしていた時、そこで、出会った仙人に風が北に吹くよう頼んだ故事を踏まえ、「樵」を言い換える。これにより、対をなす下句では、「隠」を言い換える必要がある。『擲金抄』(巻下、人倫部)には、「樵隠」の項目があり、「溪北嵐、淮陽雲、渭陽浪」と対語が列挙されている。利用の状況と文字の残存部分から欠字部分には、「淮」が該当すると推定される。この語句が「淮陽」であるならば、これは漢の應曜が淮陽山中に隠遁したまま出仕しなかった故事を踏まえていると考えられ、「隠」を言い換えていることになる。双貫語を対句として表現出来ており、作者は、故事を踏まえながら、この部分を参考にしていたのではないかと考える。

ここまで、『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』所収詩を例にとり、その内容を考察した。詩題は、かつて忠通、家実の詩宴で作られたものの流用も見られ、その影響が窺える。また、詩の対偶関係から『文鳳抄』や『擲金抄』を実際に利用していることを指摘出来た。これまで、あまり述べられてこなかった二書の利用の姿を詩の実作において見出せたことは、二書の流行を窺わせる。また、その利用の指摘は、本詩懐紙の欠字部分の推定を可能にし、詩懐紙作品全体を把握する為の重要な手がかりになるだろう。

終わりに

平安中期に確立された句題詩の構成方法は、鎌倉期においても守られており、依然として詩作の主流であった。このことは、鎌倉期に成立した対句語彙集『文鳳抄』・『擲金抄』の利用方法と深く関わる。二書の見出し語は、句題詩の詩題の実字と一致し、その下に列挙された対語は、いずれも実字を言い換える為の語句である。詩の作者は、主として頷聯・頸聯における破題を行う為に二書を利用していたと考えられる。

二書と同時期に成立した『猪隈関白記紙背詩懐紙』所収詩には、同じ詩題を持つ句題詩の間で、対語の一致が散見される。この点から、当時、対句語彙集が利用されていた可能性を指摘出来た。また、破題に用いられている対語の中には『文鳳抄』と一致するものも見られる。両者の成立時期から、『文鳳抄』や『擲金抄』に先行する対句語彙集が存在し、詩懐紙の作者や二書の撰者は、それを利用していたと考える。

そして、『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』所収詩の考察を通して、先祖である忠通、家実の詩宴の影響と共に、『文鳳抄』や『擲金抄』が実際に利用されていた姿を窺えた。このことは、二書が当時流行していたことの証と言えよう。但し、こうした対句語彙集利用の例は、取り上げた二つの詩懐紙群作品の一部に留まる。二つの詩懐紙群には、破題の際に、詩題を言い換えるという方法を用いていない詩も見られる。この点から、二書は、破題の基本である語句の言い換えを学ぶ為の書であったと言える。今後は、取り上げた詩懐紙群について考察を進め、二書の利用の状況を明らかにしていきたい。また、先祖である忠通の詩壇、家実の詩壇と『近衛兼教一筆五部大乗経紙背詩懐紙』との関わりについても明らかにしていきたいと考える。

一 山崎誠「菅大府卿為長伝小考」（『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年、初出一九七九年七月）。
二 本間洋一『文鳳抄』の編纂素材について」（『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二年、初出一九八八年七月）。
三 佐藤道生「『擲金抄』解題」（『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年、初出一九九二年）。

四 句題詩の構成方法については、主として佐藤道生「句題詩概説」（『句題詩研究　古代日本の文学に見られる心と言葉』佐藤道生編、慶應義塾大学21世紀COE心の統合的研究センター、二〇〇七年）、同「漢詩文・漢文学」（『日本文学史　古代・中世編』小峯和明編、ミネルヴァ書房、二〇一三年）や堀川貴司「句題詩の詠法と場」（『詩のかたち・詩のこころ　―中世日本漢文学研究―』若草書房、二〇〇六年、初出一九九五年五月）を参照。

五 本文は大曾根章介・後藤昭雄・山崎誠・佐藤道生「陽明文庫蔵猪隈關白記紙背詩懐紙」（『和漢比較文学叢書　5　中世文学と漢文学Ⅰ』汲古書院、一九八七年）参照。山崎誠氏は「陽明文庫蔵猪隈関白記紙背詩懐紙について」において、本詩懐紙の成立時期や作者について整理されている。（前掲注1書、初出一九八二年六月）。

六 以下に語句の典拠を挙げる。○雲夢〔文選巻十九、高唐賦、宋玉〕昔者楚襄王、與宋玉游於雲夢之臺。［李善注］漢書音義張揖曰、雲夢楚藪也。在南郡華容縣、其中有臺館也。○孟諸〔文選巻七、子虚賦、司馬相如〕且齊東陼鉅海、南有琅邪。（中略）浮渤澥、游孟諸。［李善注］文穎曰宋大澤也。故屬齊。○言談・晉人思〔晉書巻三十五、裴頠伝〕時人謂頠爲言談之林藪。○月〔百二十詠、雪〕地疑明月夜、山似白雲朝。○顦顇・楚客形〔文選巻三十三、漁父、屈原〕屈原既放、游於江潭、行吟澤畔。顔色憔悴、形容枯槁。○花〔白氏文集、0746、答馬侍御見贈〕苑花似雪同隨輦、宮月如眉伴直廬。なお、本文右横の小字は、詩句と詩題との対応関係を稿者が考え示したものである。

七 『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集／新撰朗詠集』（和歌文学大系47、明治書院、二〇一二年）の本文、作品番号、訓読、注釈を参照。

八 以下、川口久雄『真福寺本　文鳳抄』（勉誠社、一九八一年）の影印に拠る。また適宜、本間洋一校注『歌論歌学集成　別巻二　文鳳抄』（三弥井書店、二〇〇一年）を参照。

九 以下、□は不明箇所。本作品は詩懐紙に書かれており、後に料紙とされた為、欠損し判読出来ない箇所が存在する。

一〇 『本朝無題詩』所収の詩句に関しては、本間洋一『本朝無題詩全注釈』（新典社、一九九二～一九九四年）の本文、訓読、注釈を参照。

一一 裁断されており、作者名は不明。

一二 是澤恭三「紙背文書の散佚　高山寺蔵近衛兼教一筆大乗教の例」（『古文書研究』第九号、一九七五年十二月）。

一三 堀川貴司「詩懐紙通観」（前掲注4書、初出二〇〇三年二月）。

一四 『大日本古記録　猪隈関白記一』（岩波書店、一九七二年）参照。

第三部　『猪隈関白記紙背詩懐紙』以降成立の詩懐紙

第一章　東京大学史料編纂所蔵『拾芥抄』紙背詩懐紙

はじめに　―『拾芥抄』紙背詩懐紙とは―

東京大学史料編纂所蔵『拾芥抄』一巻は、南北朝時代書写で現存する最古の写本と言われている[一]。『拾芥抄』とは、貴族にとって必要な知識を九十九の部門に分け、集成した百科事典の一つである。その編者や成立時期は定かではない。流布本は上中下の三巻からなるが、前後を闕とする当該書は、異なる立項の仕方であったと指摘されている[二]。全十八紙からなる当該書は、現在その一部を残しているに過ぎない。その料紙には、天地や左右を裁断された文書の紙背が用いられている。紙背文書には、消息三紙、和歌懐紙六紙、詩懐紙九紙を確認出来る。その料紙として用いられた詩懐紙が、『拾芥抄』紙背詩懐紙である。紙背文書については、和田英松氏がその詩懐紙に触れ、鎌倉末頃のものと指摘した[三]。その後、岡田正之氏は紙背文書の作者の名前や関係を明らかにした[四]。昭和十六年に影印が出版された際には、橋本進吉氏が岡田氏に則りつつ、作者について詳細に解説している[五]。近年、史料編纂所の他の資料と共に本資料の影印が出版された。その解説の中で山家浩樹氏は紙背文書に関する内容をまとめ、更に増補された。そして紙背文書の成立を鎌倉時代末から南北朝時代のごく初期と指摘した[六]。

先行研究では、『拾芥抄』自体の成立を考えることを主な目的とし、紙背文書の人物に関する整理が行われてきたように思われる。既に述べたことだが、詩懐紙の現存数は大変少ない。作詩時期が鎌倉末から南北朝期とされる本資料は、詩の内容を考える上でも大変貴重な資料だといえよう。また、本詩懐紙の作品はすべて七言律詩で構成されている。本朝では、時代が下るにつれ、七言絶句が主流となった。その中で本資料のような七言律詩の作品の構成方法や、内容解釈は、当時の詩について考える上で、必要だと考える。そこで、本章では詩懐紙の作者について、これまでの知見をまとめ、詩懐紙の提出された詩会の性格を検討する。また詩の解釈を通じて、当時の詩の構成方法や典拠・用例を考察したい。

一　紙背文書の作者

本節では、紙背文書の作者を整理する。作詩時期を考える為、紙背文書に見える作者を全て把握する必要がある。第十六、十七、十八紙の消息は、いずれも裁断により送り主等の名前が確認出来ない。そこで、詩懐紙、和歌懐紙の作者とその題を紙数と共に、次に示す。

明圓　第二紙（春日同賦詩境翫花鳥詩〈以情／為韻〉）、第四紙（夏日同賦夏得水石□各分一字詩〈探得／涼字〉）、
　第九紙（春夜守庚申同賦招客対桃花詩〈以紅／字〉）、第十紙（詠三首和歌／鶯知春、檐間梅、忍久恋）紙
業通　第三紙（暮春同賦惜花春雨中詩〈題中取／韻〉）、第六紙（詠三首和歌／浦千鳥、暁雪、契待恋）、第十二紙（詠積雪和歌、歳暮）
定□　第五紙（詠三首和歌／浦千鳥、暁雪、契待恋）
源親長　第七紙（詠三首和歌／鶯知春、檐間梅、忍久恋）、第十三紙（詠積雪和歌、歳暮）、
懐雄　第八紙（夏日同賦荷発知池近各分一字詩）
秀範　第十一紙（秋日同賦草際有秋□各分一字詩〈探得□／字〉）
氏範　第十四紙（晩夏同賦荷発知池近各分一字詩〈探得輝／字〉）
実□　第十五紙（春日言志詩〈勒〉）
不明　第一紙（歳暮同賦冬深古寺□一首〈題中取／韻〉）

先行研究では、各人のつながりや経歴について整理されている。これまでの考察に依拠しつつ、作者を考えたい。右に列挙した順に従って、各人の経歴を概観する。

まず、明圓については、岡田、橋本両氏が正親町三条実継（一三一三～一三八八）男の毘沙門堂門跡明圓と断じた[七]。それに対し、山家氏は他の作者と活動時期が異なる点を指摘し、実継男を当該の明圓とは別人だと述べた。その上で、『花園天皇日記』元亨二年（一三二二）四月十四日条に見える、天皇と将碁に興じた人物に明圓がおり、その人物である可能性を示唆した。確かに明圓を三条実継男とすると他の作者と活動時期が異なることになる。明圓の第十紙の歌題は、第七紙の源親長の作品と一致しており、両者は同じ歌会に出席していたことがわかる。つまり、当該作品の作者である明圓と親長　の活動時期は重なっている。その点から、ここでは山家氏の推定に従っておきたい。

次いで、第三紙、第六紙の作者である業通は、藤原南家出身、正五位下飛騨守藤原懐宣男。第八紙の作者である懐雄は、懐宣の弟である為、両者は叔父と甥の関係に当たる。業通の極官は従五位上大学助、永福門院蔵人を務めた。懐紙の位署には、二紙双方に「大学助業通」と記されている。永福門院は、伏見天皇の中宮であった西園寺鐘子（一二七一～一三四二）の院号である。鐘子は永仁六年（一二九八）八月二十一日に、この院号を受けている。興国三年（一三四二）五月七日に薨去しているので、この間に業通は蔵人として務めていたのだとわかる。

源親長は、第五源氏、正四位下右馬権守源兼康男。極官は正五位下土佐守である。『続拾遺和歌集』以後、勅撰集に十四首入集しており、『拾遺風体抄』の作者でもある。親長は、建治元年（一二七五）九月十三夜の摂政家月十首歌合に弟の邦長と共に参加している。井上宗雄氏

は、この歌合が一条家の人々とその家司層によって久しぶりに催されたと述べ、その後見として一条実経の存在を指摘した[八]。親長が実経の家司であったかは定かではないが、実経に近侍していたのであろう。なお、父兼康や弟邦長も勅撰集に歌が採られた歌人である。このことは歌の才に優れた家として当時広く知られていたであろうことを窺わせる。

懐紙の制作時期を考える為に位官を確認する。懐紙には「散位源親長」と見える。懐紙の作品と勅撰集に入集している和歌との間に重複はない為、歌会の時期については不明である。古記録に官歴を探ると、『勘仲記』弘安九年（一二八六）三月二十六日条に「前土佐守源親長」とあり、この時期に活躍した人物とわかる。山家氏はこの記事を紹介したうえで、嘉元年間までその名が確認されることから、親長の活躍した時期を文永から弘安年間頃と推定する[九]。

先にも触れた懐雄は、従四位上刑部大輔藤原業尹男。極官は従五位下長楽門院蔵人。但し、位署には「懐雄」とのみ記されている為、作詩当時の位官は不明である。長楽門院とは、後二条天皇の中宮、徳大寺忻子（一二八三～一三五二）の院号である。『花園院御記』延慶三年（一三一〇）十二月十九日条に忻子がこの院号を受けたとある。また、忻子は観応三年（一三五二）二月一日に薨去したので、この四十二年の間の一時期、蔵人として仕えていたのであろう。

そして第十一紙の作者である氏範は、藤原南家貞嗣流出身の儒者。従二位刑部卿藤原明範男で、極官は従四位下式部大輔に至った。次の第十四紙の作者である秀範も同じ藤原南家貞嗣流出身の儒者。正四位下式部卿藤原淳範男で、極官は従四位上文章博士に至った。秀範の父淳範は、氏範の父明範の弟である為、両者は従兄弟の関係である。只、氏範も秀範も双方が、端作は名前のみ、自身の位官等を記してはいない。この為、作詩時期を特定するのは難しい。なお、定□と実□については、それぞれ「左近少将実□」、「法眼定□」とある。しかし、これだけでは人物の特定に至らず、その出自や経歴は不明である。

ここで、この懐紙の成立時期と懐紙が提出された詩会の成立背景を考えたい。成立時期は、これまで推定されてきたように、作者の活動時期が重複する鎌倉時代後期から南北朝時代初期と考える。

次に、歌懐紙や詩懐紙が提出された会の成立背景を検討する。それを知る為に紙の端作に注目しよう。当該懐紙の端作は、これまでの詩懐紙と詩題と官署の書き方が異なっている。詩題を書く際、詩会の主催者の身分により、「詩」の上に「応教」等を書く必要がある[一〇]。しかし、本詩懐紙では「詩」の上に「応製」や「応教」の語句がない。第四紙や第八紙に「各分一字詩」と続けて書かれていることを見れば、天地の裁断により、それらが闕となったわけではないとわかる。つまり、当該の詩懐紙が提出された詩会は、摂関家等が主催したものではなく、主催者と出席者の間に位階で大きな差がなかったといえる。次に官署を見る。一般に端作には、位官と姓名を書く必要がある。しかし、本詩懐

紙の場合、多くが名前のみを記すに留まっている。これは、出席者同士が、規則通りに官署を記す必要のない間柄だったからであろう。作者は、南家出身の者に偏っている。本詩懐紙は南家出身の儒者を含む私的な場にて提出された懐紙だと考える。

二　『拾芥抄』紙背詩懐紙

本節では、考察対象とする『拾芥抄』紙背文書の詩懐紙八紙の翻字を以下に提示する。料紙として用いられている為、天地の裁断や磨滅等により文字の確認出来ない箇所も存する。これにより、第一紙は端作（「歳暮冬深古寺□一首」）以降が判読不能である。そこで、第二紙から第十五紙の内、詩懐紙七紙を本文の字配りのまま次に掲出する。

〔第二紙〕

春日賦詩境翫花鳥

詩〈以情／為韻〉

明圓

四時得境賦詩興有□
有花翫哢成講席濃□
顕已性宴筵嬌韻感□
情如何客夢遼□□
像想居易窓裏声連□
会同文事甚林□染筆
忘塵営

〔第三紙〕

暮春同賦惜花春雨中

詩〈題中取／韻〉

大学助業通

祁々春雨寂開地唯満
落花在此中白雪辞□
斜脚滴紅霞隔嶺暗声
□終看濃艶露初□
欲覓残粧雲尚濛九□
光陰過半減□尋時□
□□風

〔第四紙〕
夏日同賦夏得水石□
各分一字詩〈探得／涼字〉
明圓
九夏早移深自水石□
見露暑如忘初商既近
山声暗炎景纔残池色
涼松下苔文衣尚裏
竹中緑影簟方長前□
形勢風情好勝地南晴
□眺望

〔第八紙〕
夏日同賦荷発知池近
各分一字詩〈探得／清字〉

懐雄

池色溶又知夏意新荷
帯露蓋陰傾聞風遠岸
入窓馥浸月寒潭当砌
清翠薬圃又廻水静
紅花絶又曲塘生請□
勝地竹松下匪避□□
万歳栄

〔第九紙〕

春夜守庚申同賦招客対
桃花詩〈以紅／為韻〉
明圓

試将詩思頻招客桃花
成主興無窮逢君栄□
勧来酔交友芳談相契
同今日多情添我色
当時有故為誰紅庚申
守夜椎甲子葉落気□
一盞中

〔第十一紙〕

秋日同賦草際有秋□

各分一字詩〈探得□／字〉

秀範

秋色秋光廻薄到茲□
百草楼芳香蒹葭洲□
風蕭颯蘭蕙苑邊露□
涼地水消々荷背□□
叢鬱々菊胥黄月斯
哉到下旬波千畝如□
稼積穣

〔第十四紙〕

晩夏同賦荷発知池近

各分一字詩〈探得輝／字〉

氏範

九夏已闌秋近処池□
荷薮水蛍飛入屋風□
沙風気照尽月非潭□
輝在座張芝揺翠□
廻庭積草蕙紅衣柿
□□々影地被促納□
□□□

〔第十五紙〕

春日言志詩〈勒〉
　　左近少将実□
青山本自雖催興郡□
隔望片々霞欲暮乱□
侵酒旆渡天陽鴈□
詩家寒梅一様載紅□
春雨数番補白茶風□
悠然何外覓好無嬾□
此中□

三　句題詩、無題詩の構成と詩風

本節では、前節にて翻字した作品を元に、当時の詩風を考察したい。内容は、句題詩七（内一紙は詩題のみ）首と無題詩一首が現存する。まず、句題詩を取り上げ、構成方法が守られていたのかを検討する。第三紙の藤原業通の「惜花春雨中」を、字配りを七言律詩に改めて次に掲出する。なお、本文横の文字は説明の為に稿者が付した。また、下段の平仄は平声を○、仄声を●、韻字を◎で示す。（平仄は以下同。）

〔第三紙〕

暮春同賦惜花春雨中詩〈題中取／韻〉大学助業通

1 祁々春雨寂開地　祁々たり　春雨寂しく開く地
2 唯満落花在此中（惜春花 雨中）　唯だ満つ　落花此の中に在り
3 白雪辞□斜脚滴（惜春花 雨中）　白雪□を辞す　斜脚の滴
4 紅霞隔嶺暗声□（惜春花 雨中）　紅霞嶺を隔つ　暗声□
5 終看濃艶露初□（惜春花 雨中）　濃艶を看ることを終えたり　露初めて□
6 欲覓残粧雲尚濛　残粧を求めむとす　雲尚濛なり
7 九□光陰過半減　九□光陰半ばを過ぎて減る
8 □尋時□□□風　□尋時□□□風

【平仄】

1 ○○○●●○●
2 ○●●○●●◎
3 ●●○□○●●
4 ○○●●●○◎
5 ○○○●●○□

6 ●●○○○●◎
7 ●□○○○●●
8 □○○□□□◎

まず、当該詩の平仄を確認する。近体詩における平仄の規則として、二四不同、二六対、避下三連と粘法が存する。前代の詩においてはこれらがほぼ厳格に守られていた。下段に示した通り、当該詩においても平仄の規則は全て守られていることを確認出来る。

次に、作詩の際に句題詩の構成方法が守られているかを確認する。最初に首聯を見る。首聯では、詩題に含まれる「花」「春」「雨」「中」が詠み込まれている。必ず詠み込むべき三字の実字「花」「春」「雨」が詠み込まれており、「題目」が果たされていると考える。

続く頷聯と頸聯では、詩題が破題されているかを検討する。頷聯の分析から行う。第三句上二字「白雪」とその対偶関係にある「紅霞」はいずれも「春花」を言い換えている。本朝における用例として、『類聚句題抄』[二]の紀長谷雄の作品の、「杏園暁望紅霞色、梅稜春知白雪粧。（杏園の暁望紅霞の色、梅稜春を知る白雪の粧。）」がある。長谷雄のさくでは、春の杏の咲き誇る様を「紅霞」に、梅の木乱れる様を「白雪」に重ねて表現している。当該詩も、長谷雄の作と同様に、花を踏まえた表現と考える。第四句「隔望」は、春の風景である「紅霞」から隔たってしまったことを述べ、それを惜しむ様子を表現する。そこで、第四句上四字全体で「惜春花」を言いかえている。第三句は一字を闕いているが、「白雪」は「春花」を言い換えていると考える。各句の下三字を見よう。第三句「斜脚」と第四句「暗声」という対偶関係は、『和漢朗詠集』[二](巻上、春・雨 084、慶滋保胤)「斜脚暖風先扇処、暗声朝日未晴程。（斜脚は暖風の先づ扇ぐ処、暗声は朝日の未だ晴れざる程。）」を踏まえている。これにより、詩題の「雨中」を言い換える。以上の分析から、頷聯では詩題を破題していることを確認出来た。

そして、頸聯の表現を見る。第五句上四字「終看濃艶」の「濃艶」は「春花」を意味しており、更に「終看」により、花を見終えたということを言い、「惜春花」を言い換える。それと対をなす第六句上四字「欲覓残粧」は、花が盛りを過ぎても未だそれを眺めたいと言い、詩題の「惜春花」を言い換えている。第五句の下三字は闕字がある為、第六句下三字を見る。「雲尚濛」は、『楚辞』「哀時命」の「霧露濛濛其晨降兮、雲依斐而承宇。」を踏まえており、詩題の「雨中」を言い換える。これにより、闕字はあるものの、頸聯においても詩題が破題されていることを確認出来た[一三]。

最後に尾聯を見よう。第七句「光陰過半減」は、詩会の時間がすぎるのは大変早いことを言う。これにより出席する詩会を賞賛する。こうした作者が出席した詩会について述べることは、述懐の常套表現の一つである。以上の分析より、当該詩が句題詩の構成方法を守って作詩されていることを確認出来た。また当該詩の典拠・用例についても指摘をした。そこには、幼学書であった『和漢朗詠集』や『白氏文集』の影

響を窺うことが出来た。『和漢朗詠集』の影響については、他の作品からも窺うことが出来る。

その例として第十一紙の藤原秀範の作品が挙げられる。第十一紙の詩題「草際有秋□」は、その一部闕としている為、頷聯のみ取り上げる。頷聯は、「蒹葭洲□風蕭颯、蘭蕙苑邊露□涼。（蒹葭洲の□　風蕭颯たり、蘭蕙苑の邊　露□涼し。）」とある。第三句「蒹葭洲」とその対偶関係にある第四句「蘭蕙苑」は、いずれも秋の草が咲き乱れている地の意味で用いられていると考える。それぞれの用例は、『和漢朗詠集』巻上、秋部に見出せる。「蒹葭洲」は、中国の故事に典拠がある。しかし、端作の秋の意を含んでいること、「蘭蕙苑」と共に用いられていることを考慮すれば、『和漢朗詠集』により強い影響を受けて作詩されたと言えるのではないか一四。ここまで、幼学書の一つ、『和漢朗詠集』の影響を見た。典拠・用例について更に考察を重ねる為に、第三紙とは異なる句題詩を取り上げて、その典拠・用例を見る。次に、第八紙の藤原懐雄の「荷発知池近（荷発きて池の近きことを知る）」を掲出する。先と同様、下段にはその平仄を示す。

〔第八紙〕

夏日同賦荷発知池近各分一字詩〈探得清字〉　懐雄

1 池色溶又知夏意　池色溶けて又夏の意を知る
2 新荷帯露蓋陰傾　新荷　露を帯びて蓋陰傾く
3 聞風遠岸入窓馥　風を聞く遠岸　窓に入る馥
4 浸月寒潭当砌清　月を浸す寒潭　砌に当りて清かなり
5 翠薬圃又廻水静　翠薬の圃又廻水静かなり
6 紅花絶又曲塘生　紅花絶えて又曲塘に生ず
7 請□勝地竹松下　請□勝地竹松の下
8 匪避□□万歳栄　避くること非ず□□万歳栄

【平仄】

1 ○●○●○●●
2 ○○●●●○◎
3 ○○●●●○●
4 ○●○○○●◎
5 ●●●●○●●
6 ○○●●●○◎
7 ○□○●●○○
8 ●●□□●●◎

まず、平仄を見よう。この作品においては、第一句、第五句にやや不安はあるが、平仄の規則はほぼ守られていることを確認出来る。

次いで、詩の表現を見る。第三紙では、『白氏文集』の影響について触れた。第八紙においても第一句「池色溶」は、青々とした池の水を表している。これは、『白氏文集』巻三十二（3115）「早春招張賓客」の「池色溶溶藍染水、花光焔焔火焼春。（池色溶溶として藍水を染め、

花光焔焔として火春を焼く。）」を踏まえた表現だと考える。第二句「蓋陰傾」とは露を帯びた蓮の様子を表している。これは『百二十詠』「荷」の「風来香気遠、日落蓋陰移。（風来たりて香気遠く、日落ちて蓋陰に移る。）」を踏まえた表現であろう。先は『和漢朗詠集』を指摘したが、同じ幼学書として知られる『百二十詠』の影響もまた、窺うことが出来る。

ここまで、句題詩の構成方法と表現について検討した。前代同様、平仄の規則や句題詩の構成方法を守って作詩されていることを確認出来た。一方で、無題詩はどうか。『拾芥抄』には、本文も確認出来る無題詩が一首現存している。そこで、この無題詩について、その表現を分析し、典拠・用例についても考察したい。次に、第十五紙の左近少将実□の無題詩を掲出する。

〔第十五紙〕

春日言志詩〈勒〉左近少将実□

1 青山本自雖催興　青山　本より興を催すと雖も
2 郡□隔望片々霞　郡□　望を隔つ　片々たる霞
3 欲暮乱□侵酒旆　暮れなむとする乱□　酒旆を侵す
4 渡天陽雁□詩家　天を渡る陽雁　□詩家
5 寒梅一様載紅□　寒梅　一様に紅□を戴く
6 春雨数番補白茶　春雨　数しば番ひて白茶を補ふ
7 風□悠然何外覓　風□悠然として何をか外に覓めむ
8 好無嬾□此中□　好きもの無し　嬾くして□此中□

【平仄】

1 ○○●●○○○
2 ●□●○●●◎
3 ●●●□○●●
4 ●○○●□○◎
5 ○○●●●○□
6 ○●●○●●◎
7 ○□○○●●○
8 ●○●□●○□

まず、当該詩の平仄について確認する。当該詩もまた、平仄の規則は守られている。

次に、詩の表現を見る。第一句上二字「青山」は、春になったことを示す表現であり、『白氏文集』巻十二（0692）「長安早春旅懐」の「夜深明月巻簾愁、日暮青山望郷泣。（夜深けて明月簾を巻きて愁へ、日暮れて青山郷を望みて泣く。）」等に、その典拠を見出すことが出来る。

第二句下三字「片々霞」についても又、春の情景として間々詠まれる霞の様子である。第三句「侵酒旆」は、杜牧の「贈沈学士張歌人」の「呉苑春風起、河橋酒旆懸。（呉苑に春風起き、河橋に酒旆懸けたり。）」を典拠・用例とする表現と考える。第四句「陽雁」は、春になると南に飛ぶ雁のことを指す。また、第五句「寒梅」は、花を咲かせることで春の到来を告げる早春の風物詩である。第六句「春雨」もまた、春が到来し降る雨のことを言う。無題詩では、各句において春に関連付けながら構成されていることを確認出来た。詩の典拠・用例には、句題詩同様、『白氏文集』や、他の唐の詩人の作品の影響を窺える。

おわりに

本章では、『拾芥抄』紙背詩懐紙について、その作者を概観し、残された作品を考察した。作者は名前が判明しないものも含め、九名を確認出来る。その内、儒者を含む四名が藤原南家出身であった。端作の書き方等から、作品が提出された詩会は、藤原南家を中心とした私的な文事であったと考える。

次いで、彼らの作品について考察を行った。作品は句題詩と無題詩の双方が残されており、いずれも七言律詩で構成されている。形式面では、押韻の韻字は勿論、平仄の規則も守り作詩されている。内容面では、句題詩の場合、前代と同様にその構成方法を守り、作詩されていることを確認した。また、無題詩においても詩題の季節と関連付けながら作品を構成していることを確認した。詩題の典拠・用例については、『白氏文集』や、『和漢朗詠集』等の幼学書の強い影響を感じる表現が見られた。その一方で、本朝の作品の影響を受けた表現も見受けられる。現存する資料が少ない為、明確な指摘は困難だが、鎌倉末期における幼学書や『白氏文集』、本朝における撰集の受容の一端を、本資料からは窺うことが出来る。

一 毎日新聞社編『国宝・重要文化財大全』（七、書跡（上巻）、毎日新聞社出版、一九九八年）。
二 池田早苗「拾芥抄」解説（東京大学資料編纂所編『平安鎌倉記録典籍集』東京大学資料編纂所影印叢書2、八木書店、二〇〇七年）
三 和田英松『本朝書籍目録考証』（パルトス社、一九九〇年）。
四 故実叢書編集部編『禁秘抄考註・拾芥抄』（改訂増補 故実叢書22巻、明治図書出版、一九九三年）。
五 『拾芥抄』（古典保存会、一九三六年）。
六 山家浩樹「拾芥抄紙背文書」解説（注二書）。
七 注三、四書参照。

八　井上宗雄「一条実経について」（『鎌倉時代歌人伝の研究』、風間書房、一九九七年、初出一九九三年）。

九　注六書参照。

一〇『二中歴』「書詩歴」には、端作の書き様が記されている。これによれば、天皇、上皇主催の宴では「応製」、皇太子、后主催の宴では「応令」、親王、公卿主催の宴では「応教」とある。これは臨時の宴の際には書く必要がないともされる。（前田育徳会編『二中歴』尊経閣文庫影印集成16、八木書店、一九九八年）等を参照。

一一　以下、『類聚句題抄』所収の詩句については、本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、二〇一〇年）を参照。

一二　以下、『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和歌文学大系47　和漢朗詠集・新撰朗詠集』（明治書院、二〇一一年）を参照。

一三　以下に主要な語句の典拠・用例を示す。○祁々〔文鳳抄巻一、天象部・雨〕祁々、春、颯々、秋、蕭々、濛々、凄々○終者〔文選巻六十、弔魏武帝文、陸機〕夫終始者万物之大帰、死生者性命之区域。○濃艶〔和漢朗詠集巻上、春・花117（花光浮水上）、菅原文時〕誰謂水無心、濃艶臨兮波変色、誰謂花不語、軽漾激兮影動唇。○残粧〔類聚句題抄、高花出廻楼、寛弘御製〕接瓦残粧含露媚、隔甍脆色払霞紅。半分濃艶上階月、纔送芬々過欄風。○濛〔白氏文集巻十二、0678寒食卧病〕病逢佳節長歎息、春雨濛濛榆柳色。

一四　○蒹葭洲〔和漢朗詠集巻上、秋・秋夜237、紀斉名〕蒹葭州裏孤舟夢、榆柳営頭万里心。○蘭蕙苑〔和漢朗詠集巻上、秋・菊271、菅原文時〕蘭蕙苑嵐摧紫後、蓬莱洞月照霜中。

第二章　『本朝世紀』紙背詩懐紙

はじめに　―『本朝世紀』紙背詩懐紙とは―

『本朝世紀』は、久安六年（一一五〇）に鳥羽上皇の命を受け、藤原通憲（一一〇六～一一六〇）が編纂した歴史書である。編者である通憲が平治元年（一一五九）に保元の乱で死亡した為、その編纂は途絶してしまった。現在、その多くが散逸したとされる。その一部を書写した資料の一つに、国立歴史民俗博物館所蔵『本朝世紀』（田中穣氏旧蔵、以下田中本と称す）がある。『本朝世紀』紙背詩懐紙は、全八紙からなる田中本の料紙として用いられた詩懐紙八紙のことを指す。田中本は、宮内庁書陵部蔵『本朝世紀』（柳原本）の親本の一つとされており、現在は鎌倉時代の写本として重要文化財の指定を受けている[一]。しかし、当該書に対して旧蔵者の田中教忠氏は「日本記畧」という書名を付している。後に書名は『本朝世紀』と改められたが、その書名についても疑問が呈されている。先行研究では、書名の他、書写された時期についても議論がなされており、田中本は多くの問題を内包した資料といえよう。その成立時期について論じられる際、紙背詩懐紙との関係から考察されることも間々ある。そこで、まずそうした成立時期に関する先行研究をまとめておきたい。

『田中教忠蔵書目録』において川瀬一馬氏は、その書写時期を鎌倉時代中期とした[二]。これは、国立歴史民俗博物館における館所蔵田中穣氏旧蔵本の調査[三]においても同様の見解であった。これに対して疑義を呈したのは、橋本義彦氏である。橋本氏は、紙背詩懐紙の作者である「主殿頭量実」に言及し、成立時期を南北朝期以降と指摘した[四]。後に、橋本氏は量実に関して更に詳細に考察しており、『本朝世紀』という書名そのものに対する問題提起もしている[五]。これを受け、高橋秀樹氏は橋本氏の指摘することを認め、『本朝世紀』本文の書写時期を南北朝期と改めた[六]。このように、先行研究では紙背詩懐紙の存在は指摘されるものの、その本文や作者に関する詳細な考察は、詩懐紙全体には及んでいないようである。中世以降、詩懐紙自体の現存数が少なく、また残された詩の本文がいずれも七言律詩であり、本資料は貴重な資料だと考える。当時の詩風を知る為には、詩本文の内容解釈をする必要がある。そこで本章では、田中本紙背詩懐紙を翻字し、他に書写された本文と比較しながら校訂本文を作成する。そして、それを用いて詩懐紙の作者を整理し、詩の内容解釈を行いたい。

一　紙背詩懐紙の書写状況

本節では、田中本紙背詩懐紙について、可能な範囲でその書写状況を確認する。現存する田中本は詩懐紙の天地に破損がある為、本文に判読不能な箇所が存在する。以前の田中本を書写した資料を基に、判読不能な箇所を解明したい。

東京大学史料編纂所には、柳原紀光が安永九年（一七八〇）に田中本の紙背詩懐紙のみを書写した『旧詩懐紙案』が所蔵されている。本書は、紀光自筆の書写本で、「右一巻以或人本□書写了□、可秘々々、／安永第九正廿七　従二位柳原紀光」という書写奥書を有する。この書写奥書とほぼ同時期の書写奥書として、宮内庁書陵部蔵柳原本『本朝世紀』七の書写奥書「右以或人所持古巻書写了、史官記歟、頗以可秘蔵／安永第九正廿三　従二位柳原紀光」が存する。この柳原本『本朝世紀』は、先述の通り田中本『本朝世紀』を底本とする。即ち、紀光が『本朝世紀』本文を書写後、紙背を書写したものが史料編纂所蔵『旧詩懐紙案』だと考える。また同所には、昭和六年の影写本も所蔵されている。この影写本は、「右本朝世紀並紙背詩懐紙／京都市伏見区日野西大道町／昭和十年四月影写了／田中忠三郎氏所蔵」という書写奥書を有する。また、紀光が寛政六年（一七九四）に書写した詩懐紙の作法書、宮内庁書陵部蔵『詩懐紙草』にも、田中本の紙背詩懐紙が書写されている。この書写された三種の本文は、いずれも同じ田中本を書写した資料だが、文字の闕けている箇所等に異同がある。特に、史料編纂所蔵影写本、書陵部蔵『詩懐紙草』では、現在の田中本では官署や詩の本文に確認出来ない箇所にも間々文字が記されている。そこで、次節以降では、昭和十六年に出版された田中本の影印版八を底本とし、その翻字を行う。そして他の書写本と対校し、校訂本文を作成する。詩の本文や、内容解釈については、この校訂本文を用いて行うこととする。

二　『本朝世紀』紙背詩懐紙の翻字と校訂

本節では、田中本『本朝世紀』を翻字する。底本には、出版された影印版を用いる。また、対校本として東京大学史料編纂所蔵『旧詩懐紙案』（以下、案と称す）同所蔵影写本『本朝世紀』（以下、影と称す）、宮内庁書陵部蔵『詩懐紙草』（以下、草と称す）を用いた。まず田中本の翻字とその校異を示し、次にその校訂本文を示す。

〔第一紙〕

閏九月十三夜言志□*

大蔵権少輔［　］

屡命霄遊頻翫霽一輪
高掛九天望両家討義
老荘道七世約期劉阮
郷餘閏重秋風与月

微寒警節露為霜良朋
数輩撥簾霞山色浮盃
入酒腸

［校異］□：詩（影、案、草）

【校訂本文】

閏九月十三夜言志詩

大蔵権少輔［　］

屡命霄遊頻翫霽
一輪高掛九天望
両家討義老荘道
七世約期劉阮郷
餘閏重秋風与月
微寒警節露為霜
良朋数輩撥簾霞
山色浮盃入酒腸

〔第二紙〕

閏九月十三夜言志詩〈勒〉＊

主殿頭量実

良辰良夜明々月餘閏
添秋添素望金律当晴
詩得境青山雖暮酒為
郷菊施栄色孤叢露

松伴貞心累葉霜遮莫
高鵬位*鸚翅逍遥一致
動中腸
［校異］勒：ナシ（案、草）位：「鳴也」と傍記（案、草）
【校訂本文】
閏九月十三夜言志詩〈勒〉
主殿頭量実
良辰良夜明々月
餘閏添秋添素望
金律当晴詩得境
青山雖暮酒為郷
菊施栄色孤叢露
松伴貞心累葉霜
遮莫高鵬位鸚翅
逍遥一致動中腸

〔第三紙〕
閏九月十三夜□志*一首〈勒〉
［　　］*
暮秋餘閏景光□□□*
清風良夜望□□□□*
詩酒席尊卑□*已礼儀
郷香氛*漸減晩蘭□*

貞操早呈古柏霜唐□*
易迷駑質性鳳才謝□
動心腸

［校異］□志：言心（影）、言志（案、草）、［　］：大炊助頼音（影、案、草）□□□：好□□（影、案、草）、□□□□：緇素延□（写、案、草）、□：約（影、案、草）、気：氛（影、案、草）、□：露（影）唐□：唐唐（影）、虎□（案、草）、

【校訂本文】

閏九月十三夜言志一首〈勒〉

大炊助頼音

暮秋餘閏景光好
□□清風良夜望
緇素延□詩酒席
尊卑約已礼儀郷
香氛漸勝晩蘭露
貞操早呈古柏霜
唐唐易迷駑質性
鳳才謝□動心腸

〔第四紙〕

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

権律師澄誉

無射十三清潔光今宵
不向仲秋望迥看明月
珠生水毎遇良辰酒作

郷古砌老松晴後雨
廃籬残菊閏餘霜霜林
紅葉近曽興何啻傾盃
蕩寸腸

【校訂本文】

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

権律師澄誉

無射十三清潔光
今宵不向仲秋望
逈看明月珠生水
毎遇良辰酒作郷
古砌老松晴後雨
廃籬残菊閏餘霜
霜林紅葉近曽興
何啻傾盃蕩寸腸

〔第五紙〕

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

大学助三善□*倫

三秋雖尽有餘閏可賞
風光万里望黔首子来
堯舜道蒼生父事礼儀
郷松持勁葉顕貞節

菊発孤叢帯早霜只*恥
蓬衡庸□*意截蒲功浅
労中腸

［校異］□：真（影、案、草）、只：呂（案）、□：昧（影、案、草）

【校訂本文】

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

大学助三善真倫

三秋雖尽有餘閏
可賞風光万里望
黔首子来堯舜道
蒼生父事礼儀郷
松持勁葉顕貞節
菊発孤叢帯早霜
只恥蓬衡庸昧意
截蒲功浅労中腸

〔第六紙〕

閏九月十三夜言□□*

左衛門少［　］*

窮秋有閏重良夜□□*
清光千里望漁□□□*
臨浪駅旅人鞭□□□*
郷芬々紫菊□□□*

欝々翠松拒暁□□□*
瓊篇多感興□□□□*
動心腸

［校異］□□：言志（影、案、草）、［　］：尉中原（影、草）、尉中（案）、□□：明月（影、案、草）、□□□：客棹舟（影、案、草）、□□□：馬憶□（影、案、草）、□□□：映朝露（影、案、草）、□□□：霜六義（影、案、草）、□□□□：剰羞三盞（影、案）、：剰羞三盃（草）

【校訂本文】

閏九月十三夜言志詩
左衛門少尉中原□□

窮秋有閏重良夜
明月清光千里望
漁客棹舟臨浪駅
旅人鞭馬憶□郷
芬々紫菊映朝露
欝々翠松拒暁霜
六義瓊篇多感興
剰羞三盞動心腸

〔第七紙〕

夏日同賦松陰且納□*
一首〈題□□*／韻〉
景長

納清涼気堪何処宜坐
長松欝々陰万木有秋

唐白思〈白氏詩云万株松□*青山／上□里沙堤明月中矣*〉七株無夏
鄭薫心月疎南寺三更
影〈荊南頭陀寺碑文／云松疎夏寒矣〉風冷北□*□*
夜音一夜音高天*暦瑞
慤承餘葉仰神林
［校異］□：涼（影、案、草）、□□：中取（影、案、草）、□：友（影）、上□里沙堤明月中矣：上千里沙堤明月中矣（影）、明□十□□（案、草）、郊：都（影）、□：「一」傍記（草）一夜音高天：一夜高□天（案、草）

【校訂本文】

夏日同賦松陰宜納涼一首〈題中取／韻〉

景長

納清涼気堪何処
宜坐長松欝々陰
万木有秋唐白思〈白氏詩云万株松友青山／上□里沙堤明月中矣〉
七株無夏鄭薫心
月疎南寺三更影〈荊南頭陀寺碑文／云松疎夏寒矣〉
風冷北邙一夜音
一夜音高天暦瑞
慤承餘葉仰神林

〔第八紙〕

夏日同賦松陰宜□□*

一首〈題□□*／韻〉

左大史［　］*
何処庭前宜夏心□□*
興好古松陰*蓋無□□*
三庚気琴有清商□□*
音阮籍竹林□□□*
嵇康柳水豈応□□□*
仙種堪為友貞節□□*
趍紫□

［校異］□□：納涼（案、草）、□□：中取（影、案、草）、［　］：匡遠（影）、□□：納涼（影）、陰：蔭（案、草）、□□：若熱（影）
□□：一部（影）、□□□：昔近臨（影）、昔□□（案、草）、□□□：臨万□（影）、臨□□（案、草）

【校訂本文】

夏日同賦松陰宜納涼

一首〈題中取韻〉

左大史匡遠

何処庭前宜夏心
納涼興好古松陰
蓋無若熱三庚気
琴有清商一部音
阮籍竹林昔迢臨
嵇康柳水豈応臨
万□仙種堪為友
貞節□□趍紫□

三　紙背詩懐紙の作者と成立時期

本節では、詩懐紙の作者について考察し、詩懐紙の制作時期を考えたい。まず、詩懐紙の官署に確認出来る作者は、大蔵権少輔、主殿頭量実、大炊助頼音、権律師澄誉[九]、大学助三善真倫、左衛門少尉中原、景長、左大史匡遠の八名である。この内、名前や官職から出自を確認出来る人物を、先行研究と合わせて考察したい。まず第二紙の作者、主殿頭量実については、橋本氏が小槻氏（壬生流）出身の小槻量実であることを明らかにした[一〇]。量実は、正四位下左大史小槻匡遠男。量実自身は、正五位上左大史に至っている[一一]。詩懐紙にある「主殿頭」補任の時期は、不明である。この点について、橋本氏は『師守記』[一二]貞和元年（一三四五）六月十四日条に「主殿頭量実」とあることを根拠に康永四年以前であると指摘する。この記事には、匡遠が主殿頭量実、大蔵権少輔興緒と共に中原師香を訪ねたと記されている。この記事の量実と興緒は共に匡遠の実子である。他に同書同五年（一三五〇）正月十六日条[一三]にも「主殿頭量実」とその名前を確認出来る。また、『後愚昧記』[一四]貞治五年（一三六六）五月四日条に「左大史小槻匡遠」卒去、続く七日条に「左大史小槻量実」卒去の記事が残る。橋本氏は、これらを基に詩会の時期を康永四年以降、貞和五年以前の閏九月、即ち貞和四年（一三四九）或は貞治四年（一三六五）の閏九月と指摘した。橋本氏の言及は田中本の紙背に留まるが、他の写本を検討すると他にも出自等がわかる作者を確認出来る。その一人が、第八紙の作者「左大史匡遠」である。これは、量実の父、匡遠のことを指すと考える。匡遠は、小槻千宣男で元亨三年（一三二三）に左大史に補任され、没するまでその地位にあった。

他に、小槻氏の関係者と考えられるのが、第三紙の作者「大炊助頼音」である。これは、先にも出てきた正五位上大蔵権少輔小槻興緒男、小槻頼音を指すと考える。この人物は、匡遠の孫に該当する。頼音は、暦応三年（一三四〇）に「大炊助頼音」と記されている。なお『園太暦』[一五]貞和五年二月十五日条に「和泉守小槻頼音」とある。頼音が「大炊助」と官署に記す時期は、貞和五年以前となるだろう。

続いて、右の官歴の確認を元に、詩懐紙の制作時期を検討したい。『詩懐紙案』、『詩懐紙草』には、共に第一紙の作品の冒頭に「貞治四年」という注が付されている。確かに、量実の官歴だけでは、貞和四年或は貞治四年の閏九月という可能性がある。しかし、先述の通り頼音が「大炊助」と記す時期は、貞和五年以前と考えられる。よって、第一から六紙は、貞和四年閏九月十三日に催された詩会における作品だと考える。また、第七、八紙については、景長の官歴が記されておらず、詩会の時期の特定が困難である。匡遠が左大史であった元亨三年（一三二三）以降貞治五年以前とのみ指摘しておく。

なお、詩懐紙の作者には小槻氏出身者の名が多く確認される。そこで、第一紙の「大蔵権少輔」について改めて検討しておきたい。量実が主殿頭であった時期、大蔵権少輔であった人物として、先の『師守記』の記述より小槻興緒が挙げられる。興緒は匡遠の実子であり、頼音の

父親である。このことから、量実等と同じ詩会に出席していた可能性を指摘出来るだろう。この詩懐紙が提出された詩会は、どのような性格を持つのか。詩懐紙の端作には、「応教」のような詩会の主催者の地位を示す語句は見られない。また、出席者に小槻氏出身者が目立つ。これらのことは、詩懐紙が提出された詩会が小槻氏と同程度の位階を持つ人々の集まりであり、私的な文事であったことを示すと考える。

四　詩懐紙本文の詩風

本節では、残された詩懐紙の表現について考えたい。第一から六紙は「閏九月十三夜言志」という詩題を有する無題詩である。また、第七、八紙は「松陰宜納涼（松陰宜しく納涼すべし）」という句題詩である。まずは、第七紙の景長の作品を掲出する。

〔第七紙〕

夏日同賦松陰宜納涼一首〈題中取／韻〉

景長

1 **納**清**涼**気堪何処　清涼なる気を納れて何処にか堪ふる

2 **宜**坐長**松**欝々**陰**（松陰 宜納涼 松陰）　宜しく坐すべし　長松欝々たる陰

3 万木（松陰）有秋（宜納涼）　唐白思（松陰）〈白氏詩云万株松友青山／上千里沙堤明月中矣〉　万木に秋有り　唐白の思

4 七株（宜納涼）無夏（松陰）　鄭薫心　七株に夏無し　鄭薫の心

5 月疎（宜納涼）　南寺三更影（松陰）〈荊南頭陀寺碑文／云松疎夏寒矣〉　月疎かなり　南寺の三更の影

6 風冷　北邙一夜音　風冷じ　北邙の一夜の音

7 一夜音高天暦瑞　一夜の音高し　天暦の瑞

8 慾承餘葉仰神林　慾に餘葉を承けて神林を仰ぐ

本詩懐紙は、全て南北朝期の作品である。当時の句題詩においても、前代同様に句題詩の構成方法が守られているのかを検討する。まず、首聯を見る。首聯では、詩題の五文字が全て用いられていることを確認出来る。次に、頷聯をみる。頷聯と頸聯では、各句が詩題を敷衍しているかを確認したい。第三句上二字「万木」は、作者の注にあるように、『白氏文集』巻二十（1338）「夜帰」の「万株松樹青山上、十里沙

堤明月中。（万株の松樹青山の上、十里の沙堤明月の中。）」を踏まえている。同句下三字「唐白思」とは、注に示した詩の作者、白居易を指す。即ち、この五字は詩題の「松陰」を言い換えている。この部分と対偶関係にある第四句上二字「七株」と下三字「鄭薫心」を見る。この部分は、唐の鄭薫が七株の松を植えていたという故事を踏まえている。こちらも第三句同様、「松陰」を言い換えていると考える。一方、詩題「宜納涼」を表すのが、第三句「有秋」と、それと対をなす第四句「無夏」であろう。第三句では、松の下は涼しく、そこに秋が来たかのようだと述べる。また第四句では、松の下が涼しいことで、あたかも夏ではなくなったかのように、その厳しい暑さから解放されたと述べる。これにより、頷聯では、詩題「松陰宜納涼」を破題していることを確認出来た。

続けて、頸聯を見る。第五句上二字「月疎」は、「松陰」を表す。この句の注には、王巾の「桂深冬燠、松疎夏寒。（桂深くして冬燠かく、松疎かにして夏寒し。）」（『文選』巻五十九「頭陀寺碑文」）が引用されている。この注から、詩題の「宜納涼」を表すと考える。また、同句下五字「南寺三更影」の「南寺」は松の植えられている「荊南」の頭陀寺を指す。「三更影」とは、松によって上空が覆われ、その下が夜のように暗くなった様子を表す。これにより、詩題の「松陰」を表している。対偶関係にある「風冷」は、松風が吹き、その音の涼しさを表現する。『和漢朗詠集』（巻上、夏・納涼 164）「池冷水無三伏夏、松高風有一声秋。（池冷しうしては水に三伏の夏無し、松高うしては風に一声の秋有り。）」一六等、その用例が見られる。ここでは、詩題の「宜納涼」を言い換える。また「北邙一夜音」の「北邙」とは、長安の北にある漢の五帝の陵墓、北邙に植えられた松を指す。「一夜音」とは、松に覆われ夜のように暗い中で、松風の琴のような音が響くことを言う。これにより「松陰」を言い換える。なお頸聯各句「三更」と「一夜」の対は、『本朝無題詩』巻三「月下即事」に「寒水三更穿凍掬、秋庭一夜蹈霜行。（寒水三更に凍を穿ちて掬ひ、秋庭一夜霜を蹈みて行く。）」一七とあるように本朝で間々見られる表現である。

最後に尾聯を見よう。第七句下三字「天暦瑞」の「天暦」とは村上天皇の御世を指す。この言葉は、藤原忠通が「祖宗天暦明時相、尋跡箇中写旧塵。（祖宗は天暦明時の相、跡を尋ねて箇中に旧塵を写さむ。）」（『本朝無題詩』巻四「春三首其一」）と詠んだように、素晴らしい治世の時期の象徴として用いられている。また、第八句の「餘葉」とは、代々の自身の家が伝えてきた官職を継ぐことをいうと考える。現在の治世が天暦期のように天皇の徳が行きわたっている中で、気が進まないながらも、自身が官職を継ぐという自謙の表現は、述懐の常套表現と言えよう。以上の検討により、本詩懐紙に見える句題詩が、平安時代以降の句題詩の構成方法を踏まえて作詩されていることを確認出来た一八。次に、その表現に目を向けたい。第七詩の句題詩の分析を通じて、頷聯、頸聯の表現の典拠には、『文選』や『白氏文集』、『和漢朗詠集』の影響が見られる。当該詩からは、前代同様に中国の書物の他、幼学書の享受も窺える。

では、無題詩はどうか。詩を数首取り上げ、その詩風を考察したい。

〔第二紙〕

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

主殿頭量実

1 良辰良夜明々月　良辰良夜 明々たる月
2 餘閏添秋添素望　餘閏 秋に添へ素を添ふる望
3 金律当晴詩得境　金律当に晴れて詩境を得たり
4 青山雖暮酒為郷　青山暮るると雖も酒郷為り
5 菊施栄色孤叢露　菊は栄色を施す 孤叢の露
6 松伴貞心累葉霜　松は貞心を伴ふ 累葉の霜
7 遮莫高鵬位鸚翅　遮莫（さもあらばあれ）高鵬位鸚の翅
8 逍遥一致動中腸　逍遥し一に致り中腸を労す

これは、小槻量実の作品である。頷聯「詩得境」は『白氏文集』巻二十二（2276）「秋池二首其二」の「間中得詩境、此境幽難説。（間中詩境を得、此境幽にして説き難し。）」等の表現を踏まえている。またその対偶関係にある「酒為郷」は、『和漢朗詠集』（巻下、雑・酒 482）の白居易の「生計抛来詩是業、家園忘却酒為郷。（生計抛ち来たる詩是れ業なり、家園忘却して酒郷為り。）」を踏まえている。また、尾聯の「高鵬位鸚」、「逍遥一致」は、『白氏文集』巻三十四（3260）「喜與楊六侍御同宿」の「濁水清塵難会合、高鵬低鸚各逍遥。（濁水清塵会合し難し、高鵬低鸚各おの逍遥す。）」を踏まえている一九。このように、両実の詩の表現には、『白氏文集』や、『和漢朗詠集』の影響を強く窺うことが出来る。また、「金律」や「菊」のように、秋に関わる表現が各句に見られる。端作の閏九月は、本来であれば十月、季節は秋から冬に変わる時期である。しかし、閏九月は暦の上では九月に該当し、季節は秋となる。いつもよりひと月多い秋を更に楽しもうとし、各句にそれと関係する表現を詠み込みつつ、詩を構成している。こうしたことは、他の詩にも見られるのだろうか。続いて、同じ詩題を有する第五紙の三善真倫の作品を掲出する。

閏九月十三夜言志詩〈勒〉

大学助三善真倫　【平仄】

1 三秋雖尽有餘閏　三秋尽くると雖も餘閏有り

2 可賞風光万里望　賞すべし　風光万里の望
3 黔首子来堯舜道　黔首の子来たり　堯舜の道
4 蒼生父事礼儀郷　蒼生の父事へり　礼儀の郷
5 松持勁葉顕貞節　松は勁葉を持して貞節を顕す
6 菊発孤叢帯早霜　菊は孤叢に発きて早霜を帯ぶ
7 只恥蓬衡庸昧意　只だ恥づ　蓬衡庸昧の意
8 截蒲功浅労中腸　截蒲功浅くして中腸を労す

右は、大学助三善真倫の作品である、先の両実の作品と同じ詩題で作詩されており、その表現の典拠・用例を検討したい。第三句上二字「黔首」と第四句上二字「蒼生」は、いずれも人民の意である。「黔首」は、『史記』「秦始皇本紀」等にその用例が見られる。また、「蒼生」は、『尚書』「益稷」を典拠とする表現である。ただ、この二語を対句とする例は、『本朝無題詩』巻五「述懐」の大江匡房の「蒼生非一何開口、黔首且千豈尽頭。（蒼生一に非ず何ぞ口を開かむ、黔首且つ千豈に頭を尽くさむ。）」等、本朝の詩集に確認出来る。

続いて頸聯を見よう。このれんでは、松と菊を対句として用いており、先の両実の作品の表現と一致する点がある。第五句から、その表現を考察する。「松」と「勁葉」は、一年を通じて色が変化しないことからその節操の堅さを詩に詠んでいる。『百二十詠』「松」に「歳寒終不改、勁節幸君知。（歳寒くして終に改めず、勁節君に知れむことを幸ふ。）」とあり、こうした表現を踏まえている。一方、第六句では、花の中で最も最後に咲く菊のことを詠んでいる。第六句の表現は、『白氏文集』巻三十一（2774）「重陽席上賦白菊」の「満園花菊鬱金黄、中有孤叢色似霜。（満園の花菊は鬱金のごとく黄なり、中に孤叢有つて色霜に似たり。）」を踏まえている。第八句「截蒲」とは、『蒙求』（276 温舒截蒲）二〇にある、前漢の温舒が貧しさにより蒲を伐って筆と詩、勉学に励んだという故事を典拠とする二一。

ここまで、無題詩二首を取り上げ、その表現を考察した。句題詩同様、『白氏文集』や『史記』、幼学書であった『百二十詠』や『蒙求』の影響も窺える。

おわりに

本章では、『本朝世紀』紙背詩懐紙について、詩会の時期や作者、詩の表現を考察した。田中本『本朝世紀』の紙背は破損が多く、それだけでは詩懐紙全体の姿を知ることは困難である。しかし、その写本も検討することで、作者や詩風を知ることが可能になる。また、これまで

曖昧であった詩懐紙の制作時期については、対校により作者の官歴の検討することで、一部ではあるが推定を更に進めることが出来た。共に明らかになった詩の表現については、句題詩の場合、平安中期に確立した構成方法が南北朝期においても守られていたことを確認出来た。明確な構成方法を持たない無題詩も含め、その表現には、『白氏文集』や『文選』の影響が指摘出来る。このことから、当時の下級官人にまで、句題詩の構成方法や、『白氏文集』『文選』の知識が浸透していたことを窺える。

判明した作者には小槻氏出身者の名前が多く確認される。彼らが出席した詩会は、どのような性格のものであったのか。詩会の主催者によって付けるべき「応教」などの文字も端作には見られない。これにより、懐紙の作者が出席した詩会は小槻氏と同程度の位階を有する官人の私的な文事であったと考える。取り上げた句題詩に見る「天暦瑞」という表現や、家臣の貞節を訴える「松」の表現は、当時の天皇に対する忠心を示す為であっただろう。南朝と北朝に分裂していた当時、小槻匡遠は官務家出身として北朝の政治の中枢にあったという[二三]。こうした詩会は、北朝を支える官人達がその忠心を示し団結を図る場としても機能していたのではないかと考える。

一 毎日新聞社編『国宝・重要文化財大全』（七、書跡（上巻）、毎日新聞社出版、一九九八年）。田中本は、昭和十年に国宝の指定を受け、後に重要文化財に指定された

二 川瀬一馬編『田中教忠蔵書目録』（田中穣、一九八七年）

三 田中本調査団「「田中穣氏旧蔵典籍古文書」所収記録類目録」（『国立民俗博物館研究報告』第七十二集、一九九七年）

四 橋本義彦「本朝世紀解題」（『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九八七年、初出一九七一年）

五 橋本義彦「田中本『本朝世紀』は本朝世紀か」（『日本歴史』第六〇八号、一九九九年）

六 高橋秀樹『田中穣氏旧蔵典籍古文書目録　古文書・記録類編　国立歴史民俗博物館資料目録［1］』（国立歴史民俗博物館編、国立歴史民俗博物館振興会、二〇〇〇年）

七 宮内庁書陵部蔵『本朝世紀』〔柳―五五九〕、外題には「〈極秘〉史官記」、右肩に「康保四年五六月秋冬／〈安和元〉同五年春四五月」とある。紀光の書写奥書は、第八張裏に存す。

八 貴重図書影本刊行会編『日本記略　国宝本朝世紀古鈔本残欠』（便利堂、一九四一年）本書は書名に『日本記略』とあるが、現在は『本朝世紀』と名を改めた田中本の影印である。

九 注七書の解題には、「澄覚」とある。

一〇 注四、五参照。

一一 橋本氏は宮崎康充氏が「左大史」とある量実について、「量実の官務職相続の実がなかった」という指摘を紹介している。（前掲注五）参照。

一二 藤井貞文、小林花子校訂『師守記』（第三、史料纂集、続群書類従完成会、一九六九年）
一三 藤井貞文、小林花子校訂『師守記』（第四、史料纂集、続群書類従完成会、一九七〇年）
一四 『大日本古記録　後愚昧記』（一、岩波書店、一九八〇年）
一五 『園太暦』（巻三、太洋社、一九三七年）
一六 以下、『和漢朗詠集』については、久保田淳監修、佐藤道生・柳澤良一著『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（和歌文学体系47、明治書院、二〇一一年）を参照。
一七 以下、『本朝無題詩』については、本間洋一『本朝無題詩全注釈』（一～三、新典社、一九九二～一九九四年）を参照。
一八 以下に主要な典拠・用例を示す。○鬱々〔百二十詠、031松〕鬱々高山上、森々幽澗陲。○七株・鄭薫心〔南部新書巻五〕鄭少師薫於里第植小松七本、自号七松処士。異代可対五柳先生。○北邙〔藝文類聚巻十四、帝王部・陳宣帝〕随江総陳宣帝哀策文曰、鳥哀哀而驚曙、松瑟瑟而吟枝、異故郷之絲竹、非舊宅之塤篪、掃秋葉而無尽、薦春桜而願知、北邙已謝。
一九 以下に主要な語句の典拠・用例を示す。○金律〔文鳳抄巻二、歳時部・秋、雑秋〕素秋、素律、素節、金商、金律、白蔵、清秋、清商○青山〔藝文類聚巻三、歳時部・秋〕梁簡文帝秋夜詩曰、高秋渡函、墜露下芳枝。緑潭倒雲気、青山銜月規。○貞心〔文選巻二十一、遊仙詩、何劭〕青青陵上松、亭亭高山栢。光色冬夏茂、根柢無彫落。吉士懐貞心、悟物思遠託。
二〇 池田利夫『蒙求古註集成』（上巻、汲古書院、一九八八年）参照。
二一 以下に主要な語句の典拠・用例を示す。○顕貞節〔文選巻十、西征賦〕勁松彰於歳寒、貞臣見於国危。○黔首〔漢書、秦始皇本紀〕分天下、以為三十六郡、郡置守尉監。更名民曰、黔首。○蒼生〔尚書、益稷〕兪哉、帝光天之下、至于海隅蒼生。○勁葉〔百二十詠、031松〕歳寒終不改、勁節幸君知。［注］一本、范雲詠松詩云、凌風知勁節。○截蒲〔蒙求、276溫舒截蒲〕漢書路溫舒、鉅鹿人。牧羊於大澤中。截蒲以為書。太守見而奇之、使掃学仕至臨淮守也。
二二 匡遠については、『増補「史料大成」』（「勘仲記三、冬平公記、匡遠記」、臨川書店、一九七五年）参照。

おわりに

本論文では、鎌倉時代に形成されていた近衛家実詩壇について、明らかにしようとした。

まず、第一部では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』全体像を把握する為に、『猪隈関白記紙背詩懐紙』に含まれる断簡について、その復元作業を行った。第一章では、前提となる句題詩の構成方法を確認したうえで、句題詩と無題詩の断簡同士を同定し、一紙に復元する作業を詳密に行った。こうした復元の対象となるのは、左右に分断された懐紙である。そこで第二章では、まず左右に分断された懐紙を整理した。そして、第一章で示した方法に基づき、闕となった詩題を補い、懐紙同士を同定し一紙に復元する作業を可能な限り行った。その際、句題詩と無題詩では構成方法が異なる為、自ずからその方法には違いが生じることになる。

句題詩の場合、形式面として韻字や平仄の中でも特に粘法の一致が手掛かりとなる。内容の面では、頷聯・頸聯の破題しているであろう表現と詩題との関わりが手掛かりになる。加えて尾聯の述懐が詩会の様子を述べている場合には、それも手掛かりとなりうる。

無題詩の場合、形式面において、句題詩と同様に平仄の粘法が二紙を同定する際の手掛かりとなる。もう一つの手掛かりとなるのは、勒である。韻韻とは、無題詩の詩会において、用いる韻字とその順を予め決め、詩会の出席者全員がそれを用いて作詩することを言う。これにより、詩題を闕とする作品においても、同じ詩会で提出された作品を見つけることが出来、詩題を推定することが可能となる。

第一部の復元は、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の全体像の把握を目的としており、他に流出した詩の本文の収集することもその一部と捉える。そこで、陽明文庫に軸装された源兼定の懐紙や、懐紙の作法書に掲載された平親輔等の詩も、翻字して収録した。

今回の復元では、残念ながら僚紙が見つからなかったものも存する。しかし、今後僚紙が見つかる可能性もある為、押韻の文字に従って整理し、最後に収載した。

第二部では、近衛家実詩壇の考察として、出席者や、詩の表現を検討した。第一章では、詩懐紙に名前の確認出来る作者を全て整理した。作者は、家実の兄弟や、母方の村上源氏出身、平氏、菅原氏、大江氏、藤原式家などに分類し、出自や近衛家との関係を検討した。近衛家の関係から検討すると、家実の縁戚や、家司層出身の者がその殆どを占めていたことがわかる。出席者と家実の関係は、緊密なものであったと指摘出来る。第二章以降では、詩の内容解釈において、主として表現の典拠・用例という視点から考察した。

第二章では、鎌倉時代、「四部ノ読書」と言われた幼学書の享受を考察した。幼学書の中で、作詩に大きく関わった『百二十詠』『蒙求』『和漢朗詠集』について具体的に詩に反映されている表現を確認した。『百二十詠』の場合、句題詩の破題に関わる部分にその詩句が用いられて

いる。このことから、『百二十詠』は句題詩の破題をするに当たり、非常に重要であったとわかる。『蒙求』では、句題詩の破題や述懐に標題の一部或は全てが利用されていた。自身の心情を『蒙求』を用いて表現するのは、出席者全員にその故事が理解されていることを示す。つまり、『蒙求』の知識が当時の人々の間に深く浸透していたのである。『和漢朗詠集』は、句題詩の詩題や首聯、破題に関する表現の他、無題詩にも用いられていることを確認した。多岐にわたる利用は、『和漢朗詠集』が作詩するに当たり重要な書物であったことを示す。これを通じて、幼学書の知識が儒者に限らず皆に浸透している状況や、その利用の仕方の一端を明らかにした。

第三章では、前代に成立した『本朝無題詩』『法性寺殿御集』を中心に、その受容について句題詩、無題詩の双方から考察を行った。いずれにおいても、その表現が『猪隈関白記紙背詩懐紙』の作品の中に積極的に取り入れており、その最初の受容例として位置づけることが出来た。また、出席者の詩の表現から、『本朝無題詩』や『法性寺殿御集』を編纂した忠通の文学的活動を強く意識している様子を窺えた。忠通の歌壇を構成していた人物と家実の詩壇を構成する人物は、どちらもその主宰者にとって縁戚や家司層であった。この一致も、家実詩壇の意識に拍車をかけたと考える。

第四章では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』の詩の表現において、同じ詩題を有する作品間に重複する表現が見られることを指摘した。それらは、句題詩の破題に関係する部分で重複している。同時代に成立した破題の為の対句語彙集『文鳳抄』・『擲金抄』とその表現の比較検討を行った。これにより、重複する表現が生じた背景には対句語彙集が存在する可能性を指摘した。また、後代に成立した『近衛兼教一筆五部大乗経』についても、対句語彙集利用の可能性を指摘した。

第三部では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』以降の紙背詩懐紙二種について整理し、作者や詩の典拠・用例を考察した。

第一章では、『拾芥抄紙背詩懐紙』に残された作品を翻字し、懐紙の作者や詩の詩風を考察した。作者には、藤原南家出身者が多く確認され、詩懐紙が提出された詩会は、出席者にとって私的な文事であったことを確認した。第二章では、『本朝世紀』紙背詩懐紙に残された作品を翻字し、懐紙の作者や残された詩について考察した。この詩懐紙の作品を書写した本が存在し、その書写した内容と当該詩懐紙を比較し、闕けていた部分を補い、校訂本文を作成した。作者については下級官人の小槻氏出身者の名前が多く確認出来た。本詩懐紙もまた彼らを中心とした私的な文事において提出された作品である。残された句題詩には、独自の構成方法が守られており、『白氏文集』や幼学書を典拠・用例とする表現を見出した。これにより、後代における句題詩の姿を窺うことが出来た。

本論文では、『猪隈関白記紙背詩懐紙』について作者や詩の内容解釈における典拠・用例の検討を等、多角的に分析を行った。これにより、家実詩壇の一端を明らかにすることが出来たと考える。今後その全貌を明らかにする為には、今後より詳細な考察が求められるだろう。

初出一覧

「近衛家実詩壇の考察」（『中世文学』第五十八号、二〇一三年六月）
「無題詩の系譜――忠通から家実へ」（『和漢比較文学』第五十二号、二〇一四年二月）
「鎌倉期における『文鳳抄』『擲金抄』の享受」（『藝文研究』第一〇六号、二〇一四年）

本論文は、右の論文を解体し、内容に組み込んだものである。